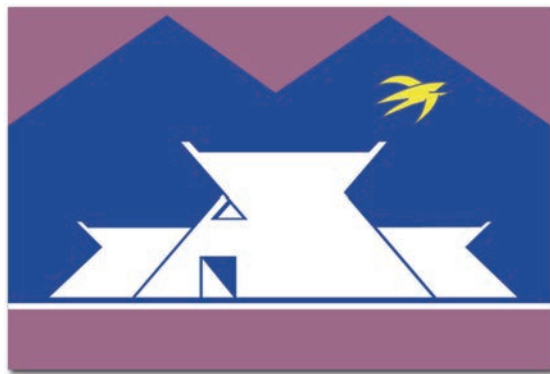


宮崎県埋蔵文化財センター

研 究 紀 要

第 7 集



2022年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

表紙の絵：「宮崎県埋蔵文化財センター旗」

図中の建物は、過去から現在へ引き継がれている平和な共同体（集落）を具象化したもので、飛翔する鳥はセンターの所在地である宮崎市佐土原町の下那珂遺跡から出土した弥生土器の線刻画をモチーフとしている。背景は青い空と山並み、豊かな自然に恵まれた我が郷土宮崎県を表現したものである。

平成 12 年制定



宮崎県埋蔵文化財センター本館

序

宮崎県埋蔵文化財センターは、県内の埋蔵文化財の保護と活用を中心拠点として、昭和 57 年 10 月に創立しました。そこから現在にいたるまで、県内の発掘調査及び教育普及活動等に積極的に取り組んでいます。

本書は、当センター職員及び関係各位による、県内の発掘調査に関わる研究や保存活用に対する成果にはじまる日頃の研究活動をまとめたものになります。その内容は考古学の分野だけではなく、自然科学分析等様々な分野から、専門的かつ多面的な視点で埋蔵文化財への理解を深めるものとなっています。

本書が学術資料としてだけでなく、様々な学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護活動への理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、当センターの活動につきまして、多大なるご理解とご協力を賜りました関係諸機関各位に心よりお礼申し上げます。

令和 4 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター所長
菊村 祐司

例 言

- 1 本書は、宮崎県埋蔵文化財センター職員の研究活動の一端を紹介し、広く情報発信することで各々の資質向上を図り、ひいては県民文化の向上に寄与することを目的として刊行するものである。
- 2 掲載されている論文等の内容や見解、文責は執筆者個人に属するものである。
- 3 本書は Adobe 社製の Adobe InDesign CC で編集し、PDF 版で公開するものである。なお、原稿の作成等には Microsoft 社製の Microsoft Word 2016、Microsoft Excel 2016 および Adobe 社製の Adobe Illustrator CC、Adobe Photoshop CC を使用している。
- 4 本書の編集は宮崎県埋蔵文化財センターの竹田享志が行った。

目 次

【論文・研究ノート】

石器石材の肉眼鑑定と蛍光 X 線分析の連携	赤崎 広志	1
—黒曜石製石器の分類における課題について—		

日向における近世土師器の出土事例	堀田 孝博	15
----------------------------	-------	----

古代・中世・近世の日向における火打石～基礎資料の報告（1）～	藤木 聡	25
--	------	----

【資料集成・紹介】

県指定木花村古墳表採埴輪片 2 例	和田 理啓	41
-----------------------------	-------	----

宮崎県内出土の近現代ガラス製品の報告例について	竹田 享志	47
-----------------------------------	-------	----

【教育普及】

地域の埋蔵文化財を活用した学習指導の在り方	平井 祥蔵・伊東 浩二	63
～小・中学校と連携した現地説明会と出前授業の実践を通して～		

石器石材の肉眼鑑定と蛍光X線分析の連携 ー黒曜石製石器の分類における課題についてー

赤崎 広志
(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

上平遺跡は、令和元年から令和2年にかけて、宮崎県都城市山之口町で発掘調査を実施した複合遺跡である。筆者は、この遺跡の整理作業にかかる石材の分類に協力した。この遺跡は、古墳時代の地下式横穴墓から人骨や鉄剣なども出土した複合遺跡であるが、出土層位の主体は縄文時代後期と早期であった。特に縄文時代早期には100基を超える集石遺構、炉穴、住居跡などが検出されており、大規模な生活痕跡が残っていた。発掘調査では、多数の縄文土器に加えて、石鏃を主体とする石器類が出土しており、鹿児島方面との関係性が伺える興味深い遺跡である。この遺跡の報告書は令和4年度刊行予定であり、縄文土器や石鏃の詳細な形態分類は報告書に記載される。本稿では多数出土した石鏃の石材鑑定と蛍光X線分析を実施した結果、分類にあたって判断に迷った事例や黒曜石以外の石材の分析結果などを中心に報告する。

2 石器石材の産地推定の現状

宮崎県埋蔵文化財センターでは、これまで石器石材について、おもに目視での表面観察による分類と黒曜石においては、透過光による内部構造、包有物（晶子）の構成などを指標として分類を行ってきた。また、2020年からは黒曜石を中心とした石器石材の蛍光X線分析データの集積を始めており、大まかな分類が可能なデータ数を確保できている（赤崎2021）。しかし、当センターは、蛍光X線分析装置を独自に所有しておらず、宮崎県工業技術センターで機材借用できる年間数日のみの分析能力であるため、発掘調査で出土する膨大な数の遺物の全点分析することは、難しい状況である。したがって石材分類の主体となるのは顕微鏡観察などによる目視分類であり、蛍光X線分析は、この検証確認のためや、判別困難な分類群の検討に補完的に活用するスタイルとなっている。特に石器に利用されることの多い黒曜石では、透過光による晶子観察が主な分類のポイントであるが、時として激しく混濁した包有物によって、透過観察ができないものも存在する。これらは肉眼判定が困難で、蛍光X線分析による分類を試みる必要がある。

3 上平遺跡の石鏃における桑木津留産黒曜石のバリエーション

上平遺跡では、未成品を含めて866点の石鏃が出土しており、その約9割が黒曜石製である。石核や剥片、碎片を含めると、黒曜石製石器のボリュームは15867点であり、総重量は約19kgに達している。はじめに、これらの黒曜石製石器全点を、顕微鏡観察によって目視で分類した。続いて分類群ごとに、九州内の黒曜石産地で採集した標準試料との比較によって、産地推定を行った。この段階で、圧倒的な割合で宮崎・鹿児島・熊本の県境付近で産出するいわゆる「桑木津留（くわのきづる）産」黒曜石の特徴を持つものが主体であった。上平遺跡の桑木津留産黒曜料には、複数のバリエーションがあったため、抽出して蛍光X線分析を実施し確認を行った。現在、当センターで同定に使用している桑木津留産黒曜石は、宮崎県えびの市西方の大塚林道に分布する火砕流堆積物中と、鹿児島県伊佐市上青木の間根ヶ平林道沿いの沢筋で採集したものである。両地点は、直線で約2km離れているが蛍光X線分析の値は、ほぼ一致する。一帯は肥薩火山岩類の分



図1 桑木津留産黒曜石のうち透過するタイプの透過光・落射光での状況

布域であり、同一火砕流から供給された黒曜石であれば、採集地が異なっても同質である可能性が高い。黒曜石は、流紋岩質マグマなどが、急冷してガラス質になったものである。同源マグマでも噴出時期の違いやマグマだまり内での分化作用などで成分が変化することが知られている。

本稿で「桑木津留産黒曜石」としている一群は、研究者によって「桑木津留」「上青木」「菱刈」など、現在採集できる地点名で分類されたり、同一地点でも分析値が違うことで呼称を替えているケースもある（杉原ほか2004・2011・2014、川道ほか2018、東京航業2020）。分析値や採集地点が違うことは、大きな要因ではあるが、同質な黒曜石でも、分析値が漸移したり、火砕流などによる広範な拡散を受ける可能性があることは前述のとおりである。当センターが所蔵する桑木津留産黒曜石の同定に用いる目視・顕微鏡観察での特徴は以下のとおりである。

- ・透過光観察：透過のよい薄茶色（飴色）のガラス基質が特徴で、晶子は全体に少ない。微細な



図2 桑木津留産黒曜石のうち縞状を呈するタイプの透過光・落射光での状況

気泡や毛状晶子が複雑に絡まると、透過が悪くなり混濁することがある。気泡内にクリストバライトなどの白色鉱物が生成し、いわゆる微細な雪片（スノーフレーク）を形成することもある。・色調、風化面：滑らかな黒色から茶色で、風化面は、白色で微細な梨地や、ささくれた海綿になることがある。混濁部が縞状や流理構造を呈することもある。

上平遺跡の黒曜石製石鏃を上記の観点で分類していくと、大きく以下の3つの様相を呈するグループに分けることができる。

- ① きれいに透き通るガラス質の基質で、ほとんど晶子や気泡が確認できないもの（図1）。
- ② きれいに透き通る基質と光の透過の悪い部分が縞状を呈するもの（図2）。

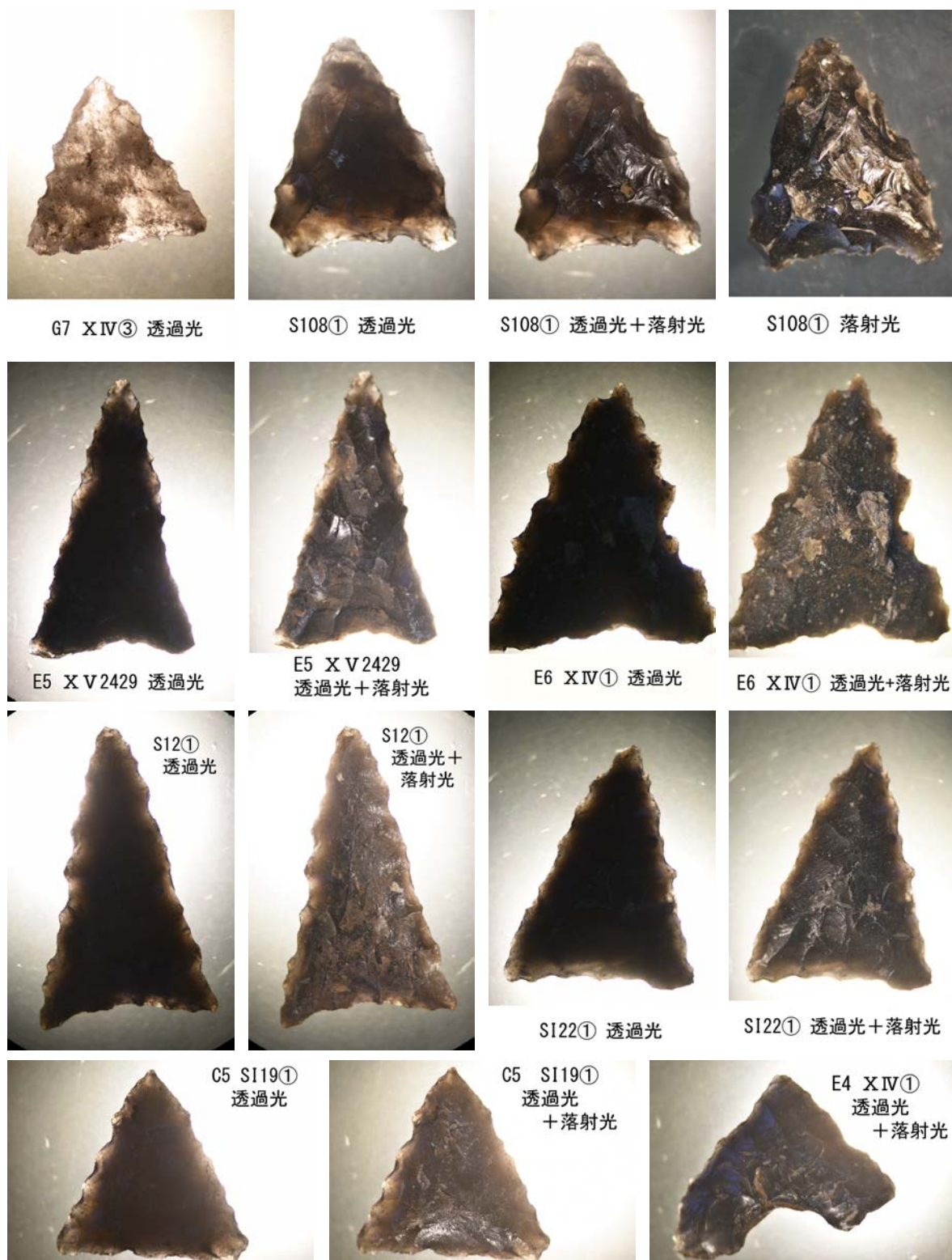


図3 桑木津留産黒曜石のうち混濁して透過の悪いタイプの透過光・落射光での状況

③ 混濁した基質を持ち光の透過の悪いもの（図3）。

実際には、①～③が同じ石鏃の中で漸移する試料もあり、目視や顕微鏡観察では、それらを分離して考えることが困難であった。観察での印象は、①～③は同質のマグマから供給された黒曜石が分化などで漸移的に変化しているものではないかと考えられた。③については、光を透過しな

器種	Rb判定	Sr判定	総合	注記番号	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	LogFe/K	顕微鏡観察所見（桑木津留のうち黄緑色は濁りの強いもの）
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D4XIV73	43.92	7.30	11.58	0.16	きれいな透明、気泡わずか
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D3XV5067	37.09	7.18	9.90	0.16	ほとんど透過しないが薄いところで濁る石英粒わずか
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D3XIV①	44.30	6.61	8.67	0.17	濁り強くほとんど透過しない薄いところで石英粒わずか
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D7XIV1897	38.78	6.53	12.77	0.18	きれいな透明、気泡
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D6XIV①	41.46	6.50	12.35	0.16	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平カワ2XV②	40.68	6.44	10.62	0.17	きれいな透明、明瞭な縞模様、クリスタライト粒1～2mm複数
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E4XIV480	41.76	6.43	14.95	0.17	腰岳風毛状縞ありクリスタライト粒2
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C7XIV1720	38.91	6.40	11.09	0.16	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E6XIV286	40.88	6.35	8.99	0.19	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E7XV3371	49.08	6.35	7.90	0.16	やや濁る、強い縞と毛状、表面サビ
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E4XV3228	37.95	6.34	8.47	0.17	きれいな透明、一部薄い濁り、太い針1本
石鏃	桑木・小国	桑木津留	桑木津留	上平C6XIV438	34.49	6.28	15.97	0.16	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平G7XIV3722	39.84	6.25	14.62	0.16	濁り縞、気泡多数
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E6XIV149	37.87	6.24	14.60	0.27	きれいな透明、気泡1
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E7XIV451	35.44	6.23	12.01	0.02	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E3XIV492	44.44	6.20	14.21	0.02	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E5XV2429	36.80	6.18	13.82	0.21	濁り多い周辺のみ透過艶消しサビ
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平G8XIII274	39.25	6.18	12.59	0.22	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C3XV4419	42.39	6.17	9.30	0.17	ほとんど透過しない周辺わずかに濁る表面なめらか斑晶なし
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D3XV2735	43.80	6.17	12.35	0.15	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C4XIV699	42.58	6.12	10.36	0.16	半分きれいな透明、半分濁りクリスタライト粒あり、境界型
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E2XV3168	40.92	6.04	12.35	0.17	きれいな透明、毛状縞4本、気泡1
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F6XIV281	41.77	6.03	10.81	0.14	きれいな透明、紺色
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平G8XIV1848	37.17	6.01	14.65	0.21	きれいな透明
石鏃	桑木・腰岳	桑木津留	桑木津留	上平G7XV2742	37.90	5.96	12.90	0.24	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E3XV2734	40.70	5.94	14.01	0.08	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F6XIV270	38.17	5.94	12.52	0.18	きれいな透明、縞
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F7XV2740	39.74	5.93	17.70	0.14	きれいな透明、気泡2
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F3XV2863	39.45	5.91	15.73	0.16	きれいな透明、気泡1
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D2XIV52	46.68	5.91	10.19	0.17	明瞭な縞
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E2XIV3187	43.36	5.88	14.47	0.14	きれいな透明、帯状の濁り
石鏃	桑木・腰岳	桑木・小国	桑木津留	上平F7XV2739	36.85	5.86	11.30	0.19	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平D2XIV1181	41.32	5.83	12.19	0.14	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平S122	40.16	5.83	22.88	0.16	不透明、濁りあり
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平G3XV2862	30.78	5.78	15.22	0.15	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C5XIV1074	40.61	5.76	13.54	0.16	きれいな透明、気泡2
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C8XIV344	38.46	5.73	15.12	0.22	きれいな透明、気泡2
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C3XV2716	43.74	5.68	9.81	0.10	きれいな透明、スジ2本
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C5XIV48	41.09	5.62	13.12	0.20	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C5XIV41	40.96	5.58	10.06	0.20	ほとんど透けない周囲わずかに濁る、流理構造あり
石鏃	桑木津留	桑木・小国	桑木津留	上平F3XV2861	35.47	5.55	14.10	0.18	きれいな透明、毛状帯2本、目視で縞状、石英粒1mm
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C8XIV347	37.94	5.52	14.67	0.18	やや濁る、気泡1
石鏃	桑木津留	桑木津留下外	桑木津留	上平C4XIV②	43.35	5.50	11.12	0.01	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E7XIV2217	42.99	5.43	16.45	0.15	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C8XIV346	43.65	5.42	11.75	0.19	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E4XV②	43.14	5.39	22.57	0.17	ほとんど透過しない薄い端部でわずかに毛状、石英粒なし
石鏃	桑木・日東	桑木・腰岳	桑木津留	上平E7XV3372	46.20	5.30	18.96	0.18	透き通るがうすい毛状がびっしり、濁り始め
石鏃	桑木津留	桑木・小国	桑木津留	上平E7XV3233	37.21	5.30	25.39	0.18	きれいな透明
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F2XV④	37.00	5.17	17.48	0.17	極小石鏃、濁る
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平S108①	40.91	5.14	16.84	0.19	濁るが透過する
石鏃	桑木津留	桑木津留下外	桑木津留	上平G7XIV③	38.81	5.07	20.25	0.06	透き通るがやや濁る
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平E6XIV292	42.97	5.05	19.41	0.18	筋状の縞
石鏃	桑木津留	桑木・小国	桑木津留	上平E6XV3230	36.94	5.02	17.35	0.19	きれいな透明
石鏃	桑木・日東	桑木・腰岳	桑木津留	上平G7XV2744	39.17	4.95	15.47	0.15	透き通るがやや濁る、中間型
石鏃	桑木津留	桑木・腰岳	桑木津留	上平C8XIV1321	39.28	4.90	22.97	0.09	濁り強い、石英粒1
異形石器	桑木・腰岳	桑木・日東	桑木津留	上平C6XIV439	40.13	4.81	23.03	0.19	濁り強い縞、クリスタライト粒1
石鏃	桑木・針尾	桑木・日東	桑木津留	上平E6XIV②	39.92	4.80	23.41	0.15	濁り強いクリスタライト粒あり
石鏃	桑木・針尾	日東	桑木津留	上平S15①	34.92	4.73	22.60	0.21	濁り強いが透過する、サビ状
石鏃	桑木・針尾	日東	桑木津留	上平F2XV⑤	35.44	4.53	22.28	0.21	濁り強いが透過する石英粒なし
石鏃	桑木・針尾	桑木・日東	桑木津留	上平C4XV4163	34.77	4.41	21.73	0.20	濁りはやけた縞、淡く透過、微細粒多、針状1本表面なめらかの2粒なし
石鏃	桑木・針尾	桑木・日東	桑木津留	上平F2XV2859	36.24	4.23	21.90	0.21	濁り強い縞わずかに透過、微細粒多
石鏃	針尾上	日東石	桑木津留	上平S14①	33.89	4.12	21.67	0.19	濁り強いが透過する石英粒わずか
石鏃	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C5S119	33.05	4.10	21.79	0.16	にごり周辺わずかに抜け晶子さつ々微小もの多表面なめらかの2粒なし
異形石器	桑木・針尾	桑木・日東	桑木津留	上平E3XV②	34.67	4.06	16.76	0.22	濁り強いがわずかに透過
石鏃	桑木・針尾	桑木津留	桑木津留	上平E4XIV①	43.03	3.83	8.57	0.22	にごり周辺わずかに抜け表面なめらかサビ少、石英粒なし
石鏃	針尾	日東	桑木津留	上平S12①	38.87	3.83	19.61	0.24	濁り強いが透過、0.1mmクリスタライト粒2、表面斑晶なしサビ状
石鏃	針尾	針尾	針尾島	上平G5XIV506	29.33	3.69	21.31	0.44	微細な斑晶あり、薄い縞状、暗青灰色
石鏃	針尾	針尾	針尾島	上平E7XIV	29.20	2.75	26.17	0.45	磨製石鏃、不透明、微細な白色晶子多なめらかな暗青灰色
石鏃	多久	Ry?	多久G-An	上平E7XV4514	29.23	0.59	12.57	1.15	不透明、表面サビ状、白色風化少ない
石鏃	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平H7XIV1953	28.27	1.51	33.62	0.73	粉吹き状ガラス質
石鏃	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平E2XV②	26.08	1.39	32.84	0.96	磨製石鏃、白色風化、破断面黒色、1mm黒色柱状斑晶あり
石鏃	多久左	上牛鼻	多久G-An	上平C6XIV①	18.52	1.39	45.97	1.00	磨製石鏃、不透明、風化白色表面なめらか、柱状斑晶あり
石鏃	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平C4XIV28	21.36	1.09	31.46	0.74	粉吹き状白色風化
石鏃	腰岳・上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平E7XV3234	4.13	0.88	72.54	0.83	不透過
石鏃	姫島	針尾島	姫島	上平G8XIV1855	29.75	8.03	15.03	0.40	ザクロ石斑晶あり
トロトロ石器	腰岳	腰岳左	腰岳	上平S152	52.63	3.98	3.03	0.22	濁り強い
石鏃	針尾・多久	日東・多久	流紋岩類	上平D3XIV417	38.43	1.62	19.97	0.52	目視では多久に見える粉吹き状白色風化
石鏃	多久・針尾	該当なし	流紋岩類	上平H5XV2828	26.27	2.41	31.56	0.20	不透過
石鏃	流紋	流紋	流紋岩類	上平E2XIV1190	35.10	0.29	17.25	0.87	磨製石鏃、不透過・暗黒褐色
石鏃	該当なし	該当なし	流紋岩類	上平D3XIV996Ry	6.69	5.11	56.20	1.20	不透過・暗黒褐色
石鏃	該当なし	該当なし	流紋岩類	上平D7XIV203②Ry	9.88	0.65	33.16	1.26	不透過・暗黒褐色
石鏃	該当なし	該当なし	流紋岩類	上平D7XIV203Ry	7.59	0.19	40.36	1.15	不透過・暗黒褐色
石鏃	該当なし	該当なし	流紋岩類	上平E7XIVRy	7.66	0.38	17.46	1.58	不透過・暗黒褐色

表1 上平遺跡出土の石鏃類における蛍光X線分析のパラメータと顕微鏡観察の結果



図4 蛍光X線分析による石鐺のRb 分率ダイアグラム

い他地域の黒曜石との相違点を指摘しにくく、蛍光X線分析で確認する必要が生じた。

4 桑木津留産黒曜石群の蛍光X線分析の結果

前述の桑木津留黒曜石製と判断した石鐺のうち①、②については、顕微鏡による晶子観察で判定できたため抽出による蛍光X線分析を実施した。③の基質が混濁しており光の透過の悪い一群は、全点分析を実施した。分析結果の解析は、データを視覚的に判定できる望月明彦氏の考案したダイアグラム（望月ダイアグラム）を使用した。蛍光X線分析は、測定機材が変わると、比較しにくいとされているが、望月ダイアグラムは機材特性の影響が少なく、類似のパターンを示すことが知られている。表1には、蛍光X線分析の結果から望月氏の計算式を用いた4つのパラメータ（ダイアグラムのXY軸の値）であるRb分率： $\text{Rb 強度} \times 100 \div (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$ とMn $\times 100/\text{Fe}$ 、Sr分率： $\text{Sr 強度} \times 100 \div (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$ と

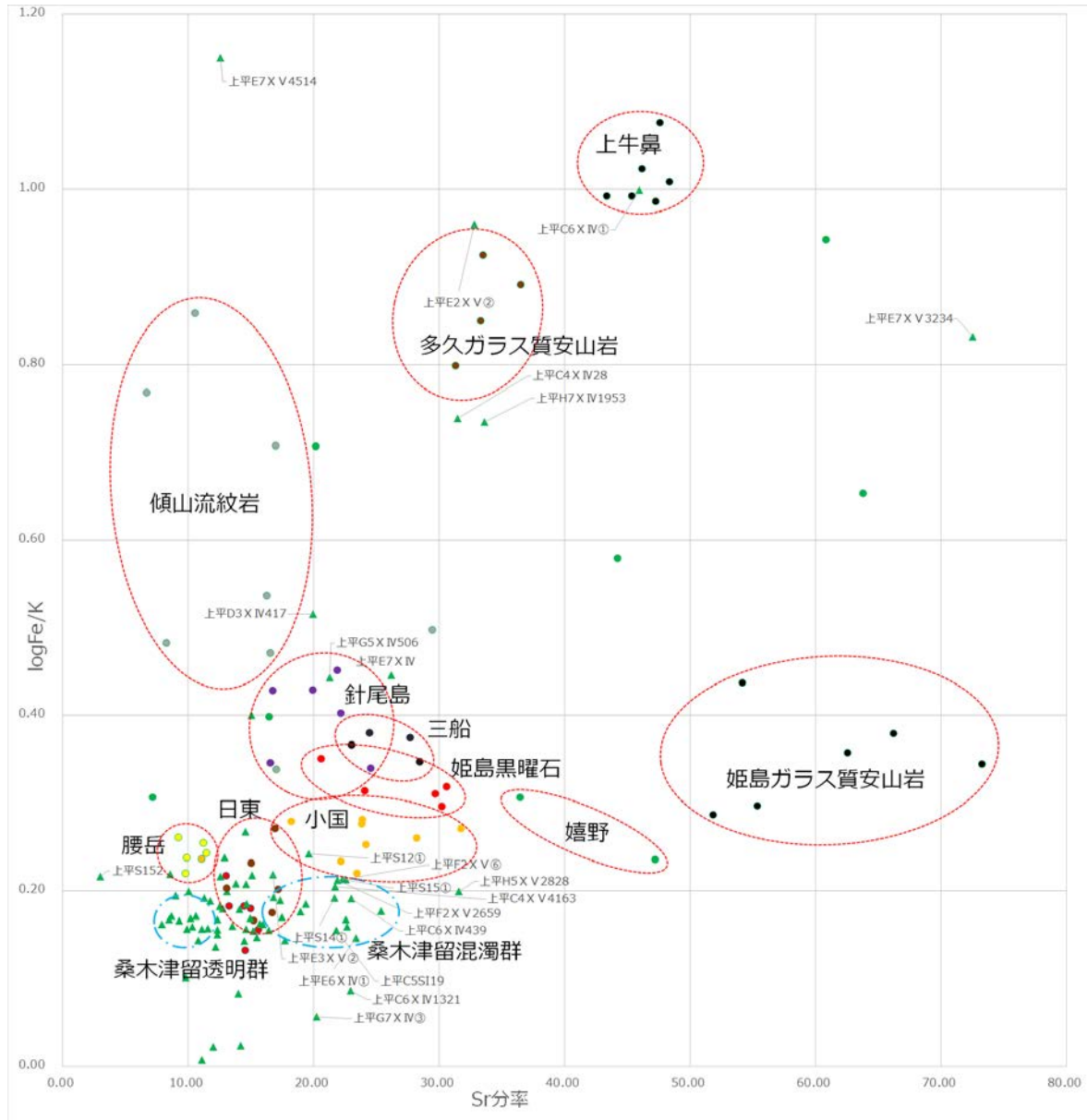


図5 蛍光X線分析による石鉄のSr分率ダイアグラム

LogFe/Kを示した。また、この値をからRbとSr分率のダイアグラムによって判定したそれぞれの結果と総合的な判定結果および、双眼実体顕微鏡により透過光で観察をした所見を記した。図4、5は、分析結果のパラメータを当センターの標準試料のデータで作成したRbとSr分率ダイアグラムの判定パターンにプロットした結果で、緑の△が上平遺跡の石鉄データである。これによると、目視による分類で桑木津留産と考えていた試料の中に、これまで当センターで桑木津留産黒曜石の領域と判定していた領域に入らない試料が多数見られた。これまで当センターの分析試料は①の透明な基質を持つグループのみのデータで構成していたが、②、③のグループは目視の状況の変化が成分の変化に繋がっている可能性がある。図4のRbダイアグラムで、水色の楕円で囲んだ領域が、顕微鏡観察で桑木津留産黒曜石と判定したもの、想定する判定領域の左下側に連続してプロットされた一群である。この領域には、現在、当センターが収集している試料での産地情報がない。表1で緑色に塗った分析データは、③の混濁して不透明な試料である。Rbダイアグラムの $Mn \times 100/Fe$ の値が、概ね5.2以下となり、水色の楕円の範囲内の数値を示して

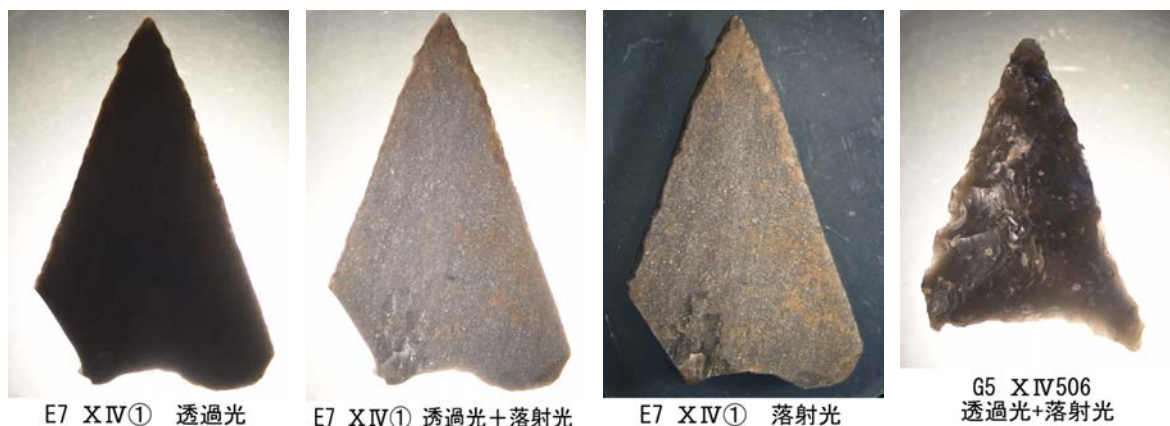


図6 針尾島産黒曜石製石鏃の透過光・落射光での状況



図7 上牛鼻産黒曜石製石鏃等の透過光・落射光での状況

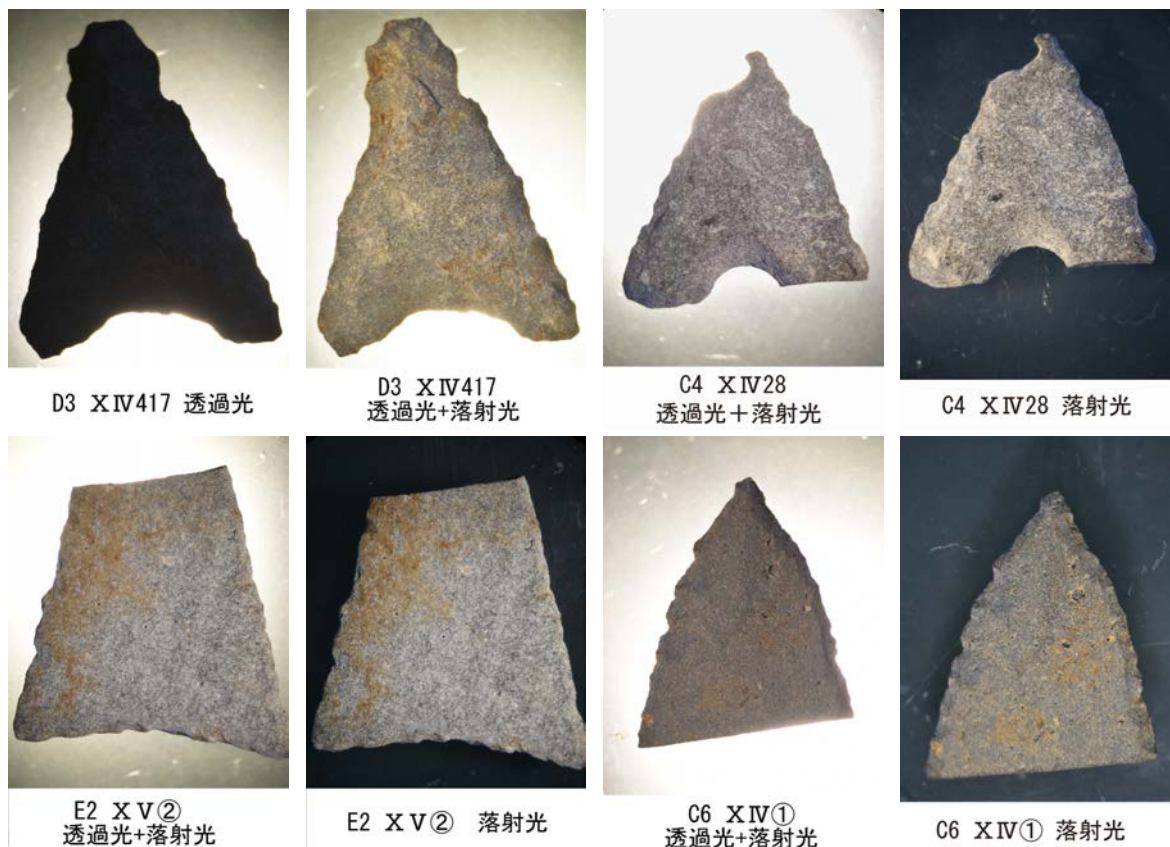


図8 多久産ガラス質安山岩製石鏃製石鏃の透過光・落射光での状況

いる。図5のSrダイアグラムでは、Sr分率が想定判定エリアの右側の水色の楕円内に③の混濁する一群が分布する。想定域の左側にも分布が広がったがこれらは①、②の様相を呈するものが多かった。③については、別の産地として分離することも検討したが、ダイアグラム上でのプロット域に明瞭な境界がなく、①、②、③が連続的に出現し、①の透明なグループ中に③の混濁する試料がプロットされたり、③の混濁するグループに①の透明な試料がプロットされるなど、これらを区別することは困難であった。②の縞状の様相を①と③が混在するパターンと考えれば、①～③は同質のマグマが漸移的に分化している黒曜石の一群と考えられる。以上の観察と分析結果の検討により、今回は、①～③の様相を呈する黒曜石をすべて「桑木津留産黒曜石」と判定した。当該の数値データを持つ一群を菱刈産黒曜石とする研究（東京航業2020）がある。筆者も菱刈産黒曜石の産地とされる鹿児島県伊佐市楠元川流域を踏査したが、試料を採集できていない。また、提供を受けた菱刈産とされる黒曜石は①の透明な基質で晶子の少ない様相を呈していたため、現状では、③の混濁する黒曜石群を積極的に「菱刈産黒曜石」とすることは出来なかった。

5 このほかの石鏃等の石材となる黒曜石類

・長崎県針尾島産黒曜石（図6）

不透過な石鏃であり、表面は風化した青灰色を呈し、発掘時の破断面や調整面に青灰色のガラス光沢のが見られる。目視では、佐賀県多久産のガラス質安山岩にきわめて類似しており、わずかな色調の違いや蛍光X線分析のデータが針尾島産黒曜石の値を示すことで分類できる。2点のうち1点は、磨製石鏃であった。

・鹿児島県上牛鼻産黒曜石（図7）

剥片では、複数確認されたが、石鏃としては1点（3234）のみが確認された。黒色不透明で表面に茶褐色のサビ様の付着物がある。蛍光X線分析の結果でも鉄成分を多く含有することが確認でき、風化表面に鉄成分由来の色調が見られるものも多い。上平遺跡では、黒色不透明な石器が製品、剥片共に一定量存在し、当初それらを、すべて上牛鼻産黒曜石と推定した。これらの石材を分類した経緯については、6項で述べる。

・佐賀県多久産ガラス質安山岩（図8）

不透過の石材で、表面が粉を吹いたような灰白色の風化面を呈し、1mm以下の黒色柱状の斑晶をわずかに含む。5点中2点が磨製石鏃であり、針尾島産黒曜石製の磨製石鏃と類似の形態であるため、同時期に九州北西部から搬入されている可能性も考えられる。

・大分県姫島産黒曜石

石鏃1点（1855）の出土で、剥片等は見つかっていない。このため、製品で遺跡に持ち込まれた可能性が高い。灰色の色調や、赤色微細粒のザクロ石斑晶を確認することが出来る。

・佐賀県腰岳産黒曜石

集石遺構に伴って出土したトロトロ石器1点のみが腰岳産黒曜石であった。これは、一般的に見られる透過性がよく毛状の晶子が広がるタイプではなく、混濁が激しく、ほとんど不透過であったため、蛍光X線分析を実施した結果、分析値が腰岳産のものと一致した。改めて顕微鏡観察すると、石器縁辺の薄い部分の透過光観察では、腰岳産の様相をわずかにみることが出来た。

・チャート

上平遺跡では、桑木津留産黒曜石に次いで、チャート製の石鏃は未成品を含めて52点が出土している。青色、白色、黒色、赤色、灰色など多様な色調を示し、剥片類も含めて425点、重量

器種	Rb判定	Sr判定	総合	注記番号	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	LogFe/K	観察所見
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平C3XIV25	12.62	2.04	45.71	1.01	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平D3XIV976	9.32	2.06	44.80	0.98	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平D5XIV810	8.02	1.80	48.40	1.04	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平D8XIV1114	9.61	1.88	45.72	1.00	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平F6XV4315	6.89	1.84	42.35	0.97	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平SI54	9.17	2.05	47.33	1.00	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平C3-8XIV	8.45	1.91	45.03	1.04	不透過
剥片	上牛鼻	上牛鼻	上牛鼻	上平C3XIV1567	13.20	1.78	48.49	1.01	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F3XV2882	46.59	7.05	11.50	0.16	不透過
剥片	桑木・日東	桑木・腰岳	桑木津留	上平F2一括2	41.34	4.58	19.11	0.22	不透過
剥片	桑木・日東	桑木・腰岳	桑木津留	上平F2一括2-2	42.99	5.12	20.92	0.16	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C2XIV726	43.68	6.44	10.28	0.14	不透過
剥片	桑木・日東	桑木・日東	桑木津留	上平C2XIV764	37.12	6.25	14.20	0.19	不透過
剥片	桑木・針尾	桑木・日東	桑木津留	上平C4XIV659	40.70	3.93	19.82	0.21	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平C6XV5042	38.04	5.36	18.95	0.14	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平S40-1	37.61	6.48	10.22	0.16	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平SI54	42.32	6.16	14.99	0.16	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平B6XIV602	33.64	4.75	15.56	0.21	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C2XIV927	42.80	6.54	12.40	0.18	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平C3XIV693	33.80	4.63	15.92	0.20	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平C3XIV698	37.57	4.85	18.95	0.34	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C3XIV719	41.27	5.68	8.88	0.29	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平C7XIV559	38.17	4.99	19.69	0.17	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平C7XV3267	44.49	6.11	10.10	0.03	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F5XIV474	44.28	5.83	12.38	0.27	不透過
剥片	桑木津留	桑木・日東	桑木津留	上平F7XIV461	36.23	6.25	15.04	0.19	不透過
剥片	桑木津留	桑木津留	桑木津留	上平F2一括1	39.72	5.89	12.20	0.16	不透過
剥片	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平D3XIV999	24.07	1.49	35.62	1.08	不透過
剥片	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平E2XV①	22.99	1.27	37.12	0.75	不透過
剥片	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平E2XV2641	27.29	1.18	36.83	0.79	不透過
剥片	多久G-An	多久G-An	多久G-An	上平F2XV3167	21.92	0.99	40.65	0.75	不透過
剥片	日東	日東	日東	上平D2XIV947	36.70	2.45	19.50	0.23	不透過
剥片	日東	日東	日東	上平D2XV3070	37.60	2.34	15.91	0.22	不透過
剥片	日東	桑木津留	日東	上平D5XIV	47.29	2.29	8.48	0.17	不透過
剥片	日東	日東	日東	上平D6XIV2299	40.18	2.49	16.17	0.18	不透過
剥片	日東	桑木・日東	日東	上平F4XV3932	35.41	2.07	13.50	0.27	不透過
剥片	日東	桑木津留	日東	上平F6XV4224	46.92	2.05	9.29	0.15	不透過
剥片	日東	桑木・日東	日東	上平F7XV3618	42.15	2.20	12.63	0.22	不透過
剥片	日東	桑木・日東	日東	上平S35	47.68	2.89	10.62	0.16	不透過
剥片	日東	桑木・日東	日東	上平G5XIV	45.39	2.64	11.55	0.16	不透過
剥片	針尾	針尾	針尾	上平D3XIV998	32.95	3.38	20.48	0.40	不透過
剥片	針尾	針尾	針尾	上平F7XIV462	36.68	3.44	21.15	0.41	不透過
剥片	左下茶Ry	上牛鼻右上	流紋岩類	上平C8XV3281Ry	15.55	0.06	55.73	1.13	不透過

表2 上平遺跡出土の不透過剥片における蛍光X線分析のパラメータ

約1.2 kgに達している。今回、これらのチャート製石鏃も赤色、黒色を中心に抽出して蛍光X線分析を実施した。本稿では、分析結果のデータを掲載しなかったが、チャートは、ダイアグラム上の特定の位置に集中を見せず、同じ色でも分散したり、特定の元素が検出されないためパラメーターがゼロになってしまうなどの結果となった。チャートについては、望月ダイアグラムで分類を試みるのが困難だと思われる。



図10 蛍光X線分析による不透過剥片のSr分率ダイアグラム

によるRb分率と $Mn \times 100/Fe$ 、Sr分率と $LogFe/K$ のパラメーター（ダイアグラムのX Y軸の値）を示している。データをRbとSr分率のダイアグラムにプロットすると図9、10のように各地の黒曜石やガラス質安山岩などの判定領域に分類することが出来た。不透過黒色の剥片43点の内訳は、黒曜石が桑木津留産19点、日東産9点、上牛鼻産8点、針尾島産2点であり、このほか多久産ガラス質安山岩4点、流紋岩類1点であった。桑木津留産黒曜石が半数をこえており、遺跡の特徴をよく反映していた。石鏃の検討において桑木津留透明群と混濁群としたエリアに19点がプロットされた。このうち7点は、表1の石鏃のデータにおいて混濁群に顕著に見られた $Mn \times 100/Fe$ の値が5.2以下の値を示し、水色の円内にプロットされるものであった。残りの11点は透明群としたエリアにプロットされており、前述した透過光観察でのバリエーション③の混濁群にあたる様相を示すものがもの①の透明群のエリアにプロットされたことになる。Sr分率のダイアグラムではこれら19点のプロットエリアが透明群のエリアを挟んで左右にほとん

ど一体化しており分離が困難である。Rb 分率のダイアグラムにおいて水色の円内にプロットされた試料は、Sr 分率の値が 15 を超えており、透明群の右側の水色の円内にプロットされた。

日東産黒曜石と判定した一群は、Sr 分率のダイアグラムでは、桑木津留産の判定エリアとオーバーラップしており分離できないが、Rb 分率のダイアグラムで $Mn \times 100/Fe$ の値が 3 以下になり、明瞭に桑木津留産と分離された。

7 まとめ

上平遺跡出土の石鏃、剥片類を中心に石器石材の分類を行った。黒曜石などのガラス光沢をもつ石器の多くは、透過光による観察が可能で、包有する晶子や表面の発泡などの状況によって、分類することができる。また、ガラス質安山岩などは、不透過であっても特徴的な風化面が、有効な分類基準となる。これらの顕微鏡観察による目視での分類結果から抽出的に蛍光X線分析によるクロスチェックを行うことで精度の高い石材鑑定を実施することができている。この目視による分類方法で課題となる試料は、黒色でガラス光沢があり光を透過せず、風化面もほとんどない剥片などである。これらから得られる情報は極端に少なく、分類そのものが困難である。今回の上平遺跡の場合は、約 16000 点におよぶ黒曜石製石器のうち、黒色ガラス質光沢で光を透過しないものは石鏃が 31 点、剥片類が 43 点の総数 74 点であった。出土したすべての黒曜石製石器の約 99.5% のについては透過光観察でグループとして仕分けることができた。これらの各分類群から 100 点程度を抽出して蛍光X線分析でクロスチェックを実施し、判定の確度を検討した。残る約 0.5% が目視での分類が困難であった不透過の試料であり、全点を蛍光X線分析を実施して分類することとなった。これにより、複数の産地を検出した。目視で分類した中に、これらの産地の試料が混在していることも否定はできないが、蛍光X線分析を実施できる試料数に限りがあり、今回の分類結果をもって、出土資料の産地推定に一定の成果が得られたと考えたい。

8 謝辞

本稿をまとめるにあたり、宮崎県工業技術センターの下池正彦主任技師には分析機器の使用について便宜をはかっていただいた。財団法人埼玉県埋文調査事業団の大屋道則氏には、菱刈産黒曜石の試料を提供していただいた。当センター上平遺跡主任の吉行真人主査には報告書整理作業段階での試料分析の実施や、出土状況や分類作業における各種の情報提供をいただいた。記して感謝いたします。

引用文献

- 赤崎広志 2021 「宮崎県出土の黒曜石・ガラス質安山岩製石器の産地推定」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』 6
- 株式会社東京航業研究所地球化学分析室 2020 「日本の黒曜石」『株式会社東京航業研究所研究紀要』 1
- 望月明彦ほか 1994 「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について」『静岡県考古学研究』 26
- 望月明彦 1997 「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」『X線分析の進歩』 28
- 杉原重夫ほか 2009 「蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定」『基礎データ集』 1
- 杉原重夫ほか 2011 「蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定」『基礎データ集』 2
- 杉原重夫ほか 2014 「蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定」『基礎データ集』 3
- 川道 寛ほか 2018 「長崎県における黒曜石原産地研究の進展 2」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』 8

日向における近世土師器の出土事例

堀田 孝博

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

筆者は以前、宮崎平野部の土師器杯・皿を主な対象として、それらの使用および廃棄・埋置などの時点における同時存在を検討して一括遺物を抽出し、編年を試みたことがある。資料的限界も多分にあり、各時期の年代幅は約 30 ～ 130 年程度と広く粗いものにとどまったが、8 世紀末から 17 世紀までの一応の編年案を提示した（堀田 2012・2016）。ただし、16 世紀末に始まる第 XⅡ期の下限を明確に示すことができなかったため、17 世紀以降に属する近世土師器の出土事例について関心を持ってきたが、残念ながら後続の編年案を検討できるほどの十分な資料数は今のところ得られていない。そこで、筆者の管見に触れた注目される事例を紹介し、今後の資料増加を期待しつつ、当面の発掘調査や報告書作成等に資することとしたい。

2 出土事例の概要と帰属年代の推定

これまでの拙稿では、対象を宮崎平野部に所在する遺跡に限定していたが、本稿では県内全域の遺跡を対象とし、できるだけ多くの出土事例について紹介する。

（1）延岡城内遺跡（第 3 次）

延岡城の大手口である城の北側に近接する武家屋敷地の調査であり、近世には延岡藩領の中核部に位置する。石垣遺構・井戸遺構・溝状遺構などとともに土壌 4 基が検出され、廃棄遺構と推定されている。このうち土壌 4 からは多量の陶磁器類や土師器が出土し、54 点の実測図が掲載されている（延岡市教委 2002）。廃棄行為により形成されたと考えられる資料群である以上、同時に使用されていた個体の抽出は困難であるが、陶磁器類 36 点の年代は 16 世紀末～17 世紀代に収まり、肥前磁器の荒磯文碗・色絵碗・芙蓉手皿、肥前陶器の呉器手碗など、17 世紀後半代のものが目立つ。土師器は杯 16 点、小皿 2 点の計 18 点が掲載され、うち杯 6 点が完形ないしほぼ完形である。法量は杯が口径 10.7 ～ 11.8 cm、底径 5.4 ～ 6.8 cm、器高 2.4 ～ 3.1 cm で、小皿が口径 6.6 ～ 8.4 cm、底径 4.0 ～ 4.6 cm、器高 2.3 ～ 2.4 cm で、ほぼ全点が糸切り底である（図 1）。

土壌 4 は底面に近い 8 層中に腐植土が多く混入し、ある程度の期間開口していた可能性がある。また 2 層と 8 層には大量の炭化物・焼土粒が混入する一方で、7 層は炭化物が少ないなど、短期間での埋没を想定しづらい。全ての遺物について出土位置や層位を精査することで、少なくとも廃棄における一括性の確認は可能と思われるが、その作業に至っていない。ただし、上述したように掲載された陶磁器類には 18 世紀代に下るものが含まれず、土師器類の形態や法量がよく揃うことから、現時点では 17 世紀後半代に属する可能性が高い資料群と考える。

（2）延岡城内遺跡（第 39 - 2 次）

第 3 次調査地点から北西に約 130 m 離れた位置にあり、やはり武家屋敷地である。トレンチ 3 箇所の調査であるが、トレンチ 2 で検出された廃棄土坑から出土した土師器・陶磁器類 40 点の実測図が掲載されている（延岡市教委 2017）。磁器碗は肥前産と考えられる腰が張り高台の低い丸碗が主体をなし、いわゆる望料碗も含まれるが、広東碗や小広東碗は 1 点も見られない。陶器碗では京・信楽系の半球碗と小杉碗があるが、小型の端反碗はやはり 1 点もない。小杉碗は口

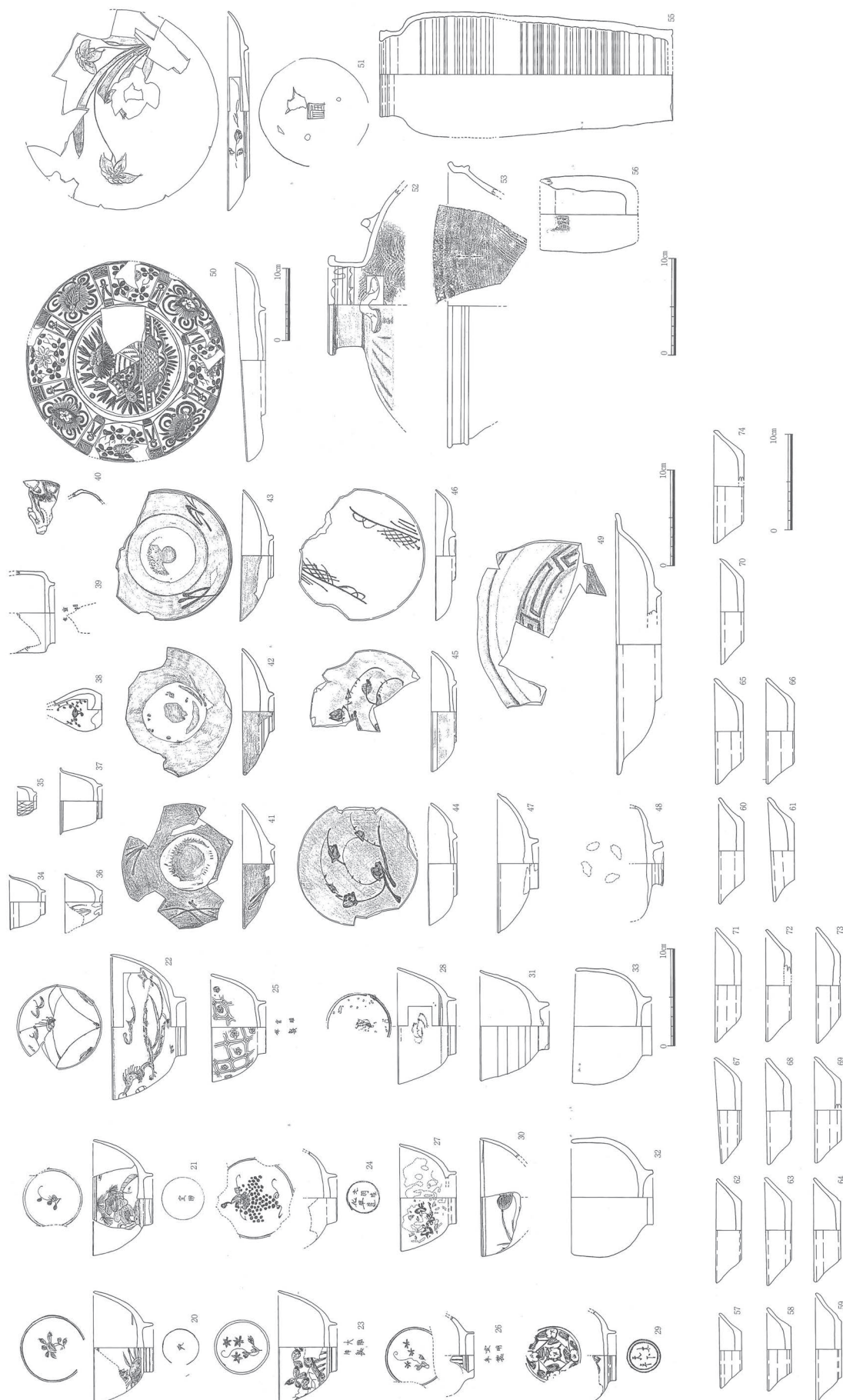


図1 延岡城内遺跡(第3次)土壙4出土遺物(S=1/6, 50のみ S=1/8)

径 10.0 ～ 10.6 cm とやや大ぶりで、若松文は簡略化しつつも松葉の表現が残っている。上記の点を総合すると、18 世紀中頃を中心とし、第 4 四半期までは下らない年代が導き出される（九州近世陶磁学会 2000、鈴木 2001、畑中 2003）。土師器は杯 3 点、小皿 2 点の計 5 点が掲載され、全て完形ないしほぼ完形である。法量は杯が口径 9.5 ～ 10.0 cm、底径 4.2 ～ 5.0 cm、器高 1.9 ～ 2.2 cm、小皿が口径 6.4 ～ 6.5 cm、底径 2.8 ～ 3.2 cm、器高 1.1 ～ 1.3 cm、全点が糸切り底で、うち回転方向の判別できる 3 点は右回転糸切りである。掲載番号 9・10 は施釉されている（図 2）。

報告書によると、出土遺物は一括廃棄されたものと評価されている。掲載された遺構実測図や写真から埋没過程を検討することは難しいが、上述したとおり陶磁器類の年代がよく揃い、土師器類の形態や法量も共通性が高い。そして、写真図版によるとほとんどの資料が完形に復元されている。第 3 次調査の土壌 4 と同様に、同時使用個体の抽出は困難ながらも廃棄における一括性の確認は可能と思われるが、現時点では 18 世紀中頃に属する可能性が高い資料群と考える。

（3）中山遺跡

日向市大字塩見字上ノ坊に所在する。中世日向北部の拠点城郭である塩見城跡の南端部に位置するが、中世の遺構は明確ではなく、23 基の墓穴と 28 基の墓石が検出されている。それらは副葬品や墓石の紀年銘から 17 世紀～ 19 世紀末のものと判断され、近世を通じて墓地が営まれていたようである。塩見を含む日向市域の多くは近世初期には延岡藩領であったが、1692（元禄 5）年に有馬氏が越後国糸魚川に転封されて後は幕府領となった。これらの近世墓のうち、S X 21 の墓穴内から土師器小皿 2 点が出土している（宮崎県埋文セ 2004）。掲載番号 24 が 1 / 2 強の破片で口径 8.25 cm、底径 4.3 cm、器高 1.5 cm、同 25 が 1 / 2 弱の破片で口径 6.8 cm、底径 2.6 cm、器高 1.6 cm に復元されている。どちらも糸切り底で、24 は右回転糸切りである（図 4）。

報告書掲載の写真図版を見ると、S X 21 および隣接する S X 22 の台石・敷石は原位置を保つ



図 2 延岡城内遺跡（39-2 次）トレンチ 2 廃棄土坑出土遺物（S=1/6）

ている可能性が高い。墓穴が墓石の設置箇所より後ろにずれているのは、これらが逆修墓であることに関係するかもしれない。上述したように資料の残存状態が良くないので、墓の副葬品とは考えづらく、使用または埋置の同時性は認めたいが、墓穴の埋め戻し時期を下限とすることはできる。S X 21 の墓石は破損により没年を確定できないが、報告書では墓石 28 基のうち S X 21・22 の 2 点のみが同一型式（駒形）で、S X 22 の没年が 1736（享保 21）年であることや、大分県女狐近世墓地の調査成果（大分県教委 1996）などから、当該型式の帰属年代を 1720～30 年代と推定しており、これらの土師器小皿は 18 世紀前半頃に属する可能性が高いと考える。

（４）宮ノ東遺跡

西都市大字岡富に所在する。近世段階は岡富村にあたり、延岡藩領を経て 1692（元禄 5）年に幕府領となった。旧石器時代から近現代まで夥しい量の遺構・遺物が確認されたが、そのうち集石墓とされる S 3222 から土師器小皿が 4 枚重なった状態で出土している（宮崎県埋文セ 2008）。法量は口径 5.2～6.0 cm、底径 3.0～3.4 cm、器高 1.0～1.1 cm で非常に小さい。報告書には全て施釉されていると記されているが、掲載番号 4981・4982 は内面から口縁部外面にかけて明瞭に透明釉がかかるものの、同 4983・4984 には透明釉はかからない。胎土は淡褐色だが器面の一部が橙褐色を呈する部分があり、塗土のようなものかもしれないが、少なくとも 4981・4982 と 4983・4984 とは別種と判断できる。全て右回転糸切り底である。胎土は赤色粒子を少量含み、在地の土師器に類似する（図 4）。

4 枚が重ねられていたので、使用や埋置における同時存在は確実である。報告書では 17 世紀代に位置づけられているが、江戸遺跡において透明釉を施した土師器小皿が出現するのは 18 世紀後葉以降とされており（小川 2001）、本事例も 18 世紀後葉以降と捉えておきたい。

（５）佐土原城跡（第 6 次）

佐土原城の築城年代は明らかではないが、南北朝期に伊東氏の庶流である田島氏が築城したとの伝承があり、その後は伊東氏・島津氏の拠点城郭として存続した。近世段階には山下の二ノ丸に藩庁が設置され、佐土原藩領の中核部であり続けた。調査地点は『日向国佐土原城』（国立国会図書館所蔵）によると三ノ丸、幕末の城下を描いた『佐土原御城下細見之図』（宮崎県総合博物館所蔵）によると、佐土原藩の寄合格である渋谷直記および騎馬格である郡司篤之助の屋敷地に相当すると考えられ、発掘調査の結果、溝状遺構に区画された屋敷地の中に多数の建物跡・井戸跡・土坑などが検出された（宮崎市教委 2016）。多くの遺構から遺物が出土しているが、そのうち渋谷氏土坑 54・91・121・146 は土師器と陶磁器類が共に出土しており、ある程度の年代推定が可能であると判断した（図 4）。

渋谷氏土坑 54 からは多くの遺物が出土したが、密集するような状況ではなかったとされる。ただし、検出面からの深さは 0.24 m で埋土は 3 層に分けられており、土層注記や調査時の写真によると遺物のほとんどは最上層の 1 層から出土しているようである。報告書に陶磁器類 8 点と土師器 4 点が掲載されているが、磁器は徳化窯産と考えられる型成形の白磁碗のほか、肥前磁器では見込みに手描の五弁花がある小皿や二重格子目文に見込蛇ノ目釉剥ぎの皿などがあり、陶器は京・信楽系の半球碗やせんじ碗があり、18 世紀中頃を中心とする年代が想定できる（九州近世陶磁学会 2000、鈴木 1999）。土師器は焙烙 1 点のほかに杯 3 点が掲載されるが、完形の個体はない。法量は口径 10.2～12.5 cm、底径 5.0～6.4 cm、器高 2.0～2.4 cm で、底部の完存する 2 点は右回転糸切り底である。形態は底部が厚く口縁部へ向かって先細る掲載番号 423 と底部から口縁部まで厚さがほとんど変わらず、底体部間の屈曲が明瞭ではない同 424・425 とに二分される。



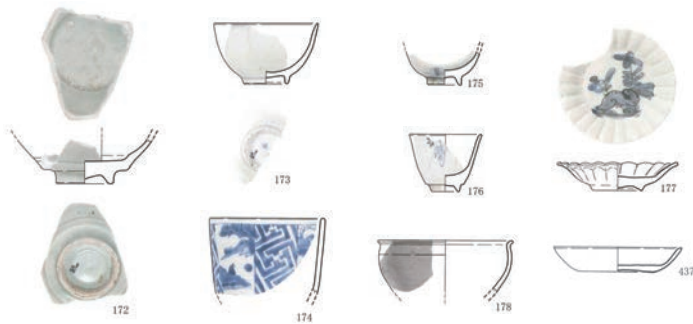
渋谷氏土坑 54



渋谷氏土坑 91



渋谷氏土坑 121



渋谷氏土坑 146

図3 佐土原城跡（第6次）出土遺物（S=1/6）

胎土も赤色粒子を含み中世土師器と類似する前者に対し、赤色粒子があまり見られず金雲母を多く含む土製人形や焙烙など他の近世土器類と類似する後者という差異が認められる。遺構の埋没過程や遺物の出土状況・残存度などからも、同時存在を検証することは難しい事例ではあるが、現時点では18世紀中頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑 91 は土坑 54 に切られており、土坑 54 よりも古いことが確定している。検出面からの深さは0.1～0.03 mと非常に浅く、その中から出土した備前焼播鉢1点、土師器小皿3点が報告書に掲載されている。備前焼播鉢は口縁帯が断面三角形に近いこと、放射状のスリメに斜

方向のスリメが付加されること、器面は暗赤褐色だが胎土は灰色に発色していることなどの特徴から、概ね17世紀第1四半期頃に位置づけられる(乗岡2000)。土師器小皿の法量は口径8.4～9.1 cm、底径5.1～5.6 cm、器高1.4 cmである。いずれも口縁部がほとんど残っておらず、残存状態は良くないが、掲載番号427・428は形態が類似し、底部はいずれも右回転糸切り底である。底径の大きい掲載番号429は器面の摩滅により不明瞭な部分もあるが、ヘラ切り底の可能性が高い。渋谷氏土坑54と同じく、同時存在を検証することは難しい事例ではあるが、現時点では17世紀初頭頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑121も検出面からの深さが0.11 mと非常に浅いが、報告書に掲載された出土状況では底面に接する遺物がほとんどなく、周囲から中央部に向かって流れ込んだような様相を示している。報告書に陶磁器類7点と土師器2点が掲載されているが、磁器ではやや粗雑な色絵が施された碗蓋や端反の小杯などが完形品である。陶器には口縁部の大半を欠くが、関西系の土瓶蓋などが含まれる。土師器はいずれも小皿で、完形品である。法量は口径7.35～7.4 cm、底径3.9～3.95 cm、器高1.2～1.3 cmである。底部は左回転糸切り底であり、墨で「中」と書かれている。胎土は赤色粒子が少なく、金雲母を多く含む。器壁は全体的に薄く、底体部間は内面が圈線状にくぼんでいる。特筆されるのは左回転糸切り底で、宮崎県内の資料としては極めて珍しい。この点や形態的特徴をふまえて検討したところ、江戸遺跡における18～19世紀頃の資料(小林1992)に類似するように思われた。年代的に幅を持つことが確実な事例ではあるが、完形資料の年代観を考慮し、現時点では18世紀後半～19世紀頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑146も検出面からの深さが0.09 mと非常に浅い。報告書に陶磁器類7点、土師器杯1点が掲載されている。磁器は祥瑞と呼ばれる明末の景德鎮窯産青花碗があるほか、肥前磁器の青磁碗や高台内に「太明」銘の碗、菊花形手塩皿、高台無釉の小杯などがあり、ほぼ1630～50年代に収まる(九州近世陶磁学会2000)。土師器杯は口径10.1 cm、底径5.9 cm、器高1.9 cmである。1/2弱の破片で焼成は非常に甘く、摩滅が著しいため調整等は判別できない。胎土には赤色粒子を多く含み、金雲母は僅かに見られる程度である。他の渋谷氏土坑と同じく、同時存在の検証は難しいが、掲載された陶磁器類の年代がよく揃うことから、土師器杯も同時期と想定し、17世紀第2四半期頃の資料群と考える。

(6) 中小路遺跡

宮崎市の北東部、大字島之内に所在する。近世初期には佐土原藩領であったが、1690(元禄3)年に藩主島津惟久が従弟島津久寿に島之内など三千石を分知し、以後は旗本領となった。発掘調査では近世の土坑や溝状遺構が検出されたが、そのうちの土坑9において土師器と磁器皿が一部重なった状態で出土し、地鎮など祭祀的な遺構の可能性も想定されている(宮崎市教委2019)。報告書には土坑9出土遺物として磁器1点、土師器5点が掲載されている(図4)。磁器は肥前産で、削り出し高台である。高台畳付以外は施釉され、内面に呉須で寿字文を三箇所描く。1640～50年代と想定される製品である(九州近世陶磁学会2000)。土師器のうち掲載番号8～10の小皿は口径8.1～8.9 cm、底径4.2～6.2 cm、器高1.4～1.9 cmで、明瞭な平底をなす10に対し、8は全体的に丸みを帯びており、9はそれらの中間的な形態である。底部はいずれも右回転糸切り底である。10は口唇部上面に沈線を施したかのように、溝状のくぼみが認められる。胎土は赤色粒子が多く、金雲母を僅かに含む。

本事例で注目されるのは掲載番号6・7の土師器である。外面には指頭圧痕が残るが、内面は



図4 各遺跡出土遺物 (S=1/6)

平滑で光沢すら帯び、7の内面には体部から口縁部にむかってナデ上げた痕跡が残るほか、口縁部のナデ調整に伴うと考えられる凹線が底部の周縁に巡る。器面は全体的に黒みがかったり、6にある新しい割れ面で見ると淡黄白色を呈しており、混入物をほとんど含まない精良な胎土である。6・7は特徴がよく似ており、同一個体の可能性もある。上記のような形態的特徴を備えているものとして京都の土師器皿が思い浮かぶが、仮に磁器皿の年代である1640～50年代を想定して近年の編年（平尾 2019）に照らした場合、器壁の厚みや体部～口縁部の形態に違和感もあり、これ以上の検討は今後の課題としたい⁽¹⁾。報告書によれば、意図的に埋置された資料となるが、上記の点や各資料の残存度など検討を要する部分もある。現時点では磁器皿と在地の土師器小皿について、17世紀中頃に属する可能性が高い資料群と捉えておきたい。

(7) 宮崎城跡

南北朝期から近世初期にかけて存続した宮崎平野部の拠点城郭で、戦国時代末期には島津家老中の上井寛兼が居城としたが、1587（天正 15）年の豊臣秀吉による九州征伐の結果、豊前国香春から縣（現在の延岡市）に移封された高橋元種が領有するところとなり、延岡藩の飛び地である宮崎の支配拠点となったが、高橋氏の改易、有馬氏の移封を経て、1615（元和元）年のいわゆる一国一城令により廃城となった。2017・2018（平成 29・30）年度に遺構・遺物の保存状態確認を目的とするトレンチ調査が実施され、主郭に設定されたH 30－1 B調査区において造成面の上に土師器杯・小皿の集中出土が確認されており、うち 13 点の実測図が掲載されている（図 4）。これらの土師器類には灯火具としての使用痕跡が見いだされず、献杯儀礼に伴う一括廃棄と推定されている。口縁部まで残存する 4 点のうち、杯は 3 点、小皿は 1 点で、残りの 9 点については杯と小皿の厳密な分類は難しい。法量は杯が口径 10.3～11.1 cm、底径 7.0～7.6 cm、器高 2.65

～2.8 cmで、小皿が口径7.4 cm、底径6.0 cm、器高2.1 cmで、切り離し方法の明確な5点は全てへう切り底であり、その他に2点もへう切り底の可能性がある。造成面下の土中に瓦片が含まれることから、この造成を1587年以降と判断されており、それに伴い土師器類の帰属年代も1587～1615年に限定されている（宮崎市教委2020）。各個体の残存状況は良くないが、主郭の造成面上での集中出土であり、形態や法量の類似性も認められることから、同時使用・廃棄の可能性を有するものとして、16世紀末～17世紀初頭頃に属する資料群と判断する。

（8）飢肥城下町遺跡

日南市に所在する飢肥城は中世日向南部の拠点城郭である。築城年代は不明であるが、南北朝期に築城されたとの伝承があり、室町時代以降は伊東氏と島津氏の激しい抗争の舞台となり、近世には飢肥藩主の居城として存続した。調査地点は飢肥城に近接する標高約27 mの河岸段丘上にあたり、絵図との照合から近世段階には飢肥藩上級家臣の屋敷地であったと推定されている。発掘調査では礎石建物・池状遺構・井戸・土坑などが検出されており、そのうちのS 189とされる土坑から出土した磁器5点と土師器杯4点が掲載されている（図4）。出土遺物としてはその他に鉄製鎌や煙管の吸口があった。S 189は直径1 m程度の円形プランで、全体を検出面から約0.3 mの深さまで掘削した後に、西側の一部のみ柱穴状に深さ約1.1 mまで掘り込んでいるが、周囲に同規模の遺構がなく、建物の柱穴にはならない。このような遺構の状況に加え、遺物の残存度などから地鎮に関係する遺構と推定されている（宮崎県埋文セ2012）。

磁器は肥前産と考えられる外面二重網目文、内面網目菊花文、高台内渦福銘の丸碗のほか、厚手でやや灰色がかった素地の染付丸碗や白磁小杯などがあり、概ね18世紀代と考えられそうである。土師器杯のうち掲載番号339は完形で、他の3点は1／2あるいはそれ以下の残存である。法量は図上の計測によるが、口径10.3～11.9 cm、底径6.4～6.8 cm、器高1.9～2.2 cmで、切り離し方法の明確な3点は右回転糸切り底である。胎土は掲載番号337・338が赤色粒子をほとんど含まず金雲母に富み、同339・340には金雲母はあまり見られないが赤色粒子も少ない。

報告書では地鎮関係の遺構と推定されているが、掲載番号339以外は残存状態が良いとは言えず、意図的な配置があったなどの根拠が無い限り、使用・埋置の同時存在は認定しがたい。ただし、埋土は2層に分かれるのみで、自然埋没とは考えづらいため、廃棄行為の時間幅を広くとる必要はない。よって、現時点では18世紀頃に属する可能性が高い資料群と捉えておきたい。

（9）前畑遺跡

日南市の市街地から西方へ約8 km、串間市との境に近い山間部に所在する。近世段階は飢肥藩領であり、平部嶺南の『日向地誌』によると、飢肥の真言宗願成就寺の末寺である長禅寺があったが、1872（明治5）年に廃寺になったとされる。発掘調査では溝状遺構による区画の内部に墓坑と考えられる土坑が多数検出され、溝状遺構の埋土から五輪塔の残欠も出土している（宮崎県教委1990、宮崎県埋文セ2014）。SD 2とされる土坑から完形の土師器杯2点が出土した（図4）。

土師器杯の法量は図上の計測によるが、口径10.2～10.3 cm、底径6.0～6.4 cm、器高2.4～2.5 cmである。底部はどちらも右回転糸切り底である。墓坑から出土した六道銭は洪武通寶や寛永通寶であり、発掘調査区外にある石塔群には1662（寛文2）年～天保年間（1830～1844年）にわたる紀年名があったとのことであり、近世を通じて営まれた墓地と考えられる。SD 2出土の土師器杯は完形品であり、報告書に記載された出土状況からも副葬品として埋置されたことは確実であるが、出土遺物が土師器以外になく、帰属年代を推定することが困難である。

3 若干の考察

前節で9遺跡12遺構の近世土師器出土事例を紹介した。冒頭で述べたように編年を検討する段階には至っていないが、現在までに把握できた資料から読み取れることを整理したい。まずは各事例のうち、前畑遺跡例を除く11遺構について推定した時期順に並べると以下ようになる。

- 16世紀末～17世紀初頭 宮崎城跡H 30－1 B
- 17世紀初頭 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 91
- 17世紀第2四半期 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 146
- 17世紀中頃 中小路遺跡土坑 9
- 17世紀後半 延岡城内遺跡（第3次）土壙 4
- 18世紀前半 中山遺跡S X 21
- 18世紀代 飢肥城下町遺跡S 189
- 18世紀中頃 延岡城内遺跡（第39－2次）トレンチ2廃棄土坑
- 18世紀中頃 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 54
- 18世紀後半～19世紀 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 121
- 18世紀後葉以降 宮ノ東遺跡S 3222

最も古く位置づけられる宮崎城跡H 30－1 Bは拙稿（堀田 2016）の第XⅡ期に属する。報告書で指摘されているとおり、体部が直線的に立ち上がる器形と、緩やかに内湾しながら立ち上がる器形が併存していることが新たに判明した（宮崎市教委 2020）。宮崎城跡例が杯と小皿の2器種に分かれているため、拙稿で予測したように直線的な器形の小皿も存在する可能性が高い。この段階では回転糸切り底の個体を確認できていない。そして、佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 91ではヘラ切り底と回転糸切り底の個体が併存しており、17世紀中頃～後半の中小路遺跡土坑 9と延岡城内遺跡（第3次）土壙 4では、確認できるものは全て回転糸切り底である。ヘラ切りから糸切りへの転換が17世紀前半頃に進行したと考えられる。18世紀中頃の佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 54では、底部から口縁部まで厚さがほとんど変わらず、底体部間の屈曲が明瞭ではない新たな器形が出現しており、ほぼ同時期かやや後出の延岡城内遺跡（第39－2次）トレンチ2廃棄土坑でも類似する器形の土師器杯・小皿が主体をなしている。これらは器形のみならず、胎土に金雲母を多く含む点も前代と異なっている。法量については、時代が下るにつれ縮小化の傾向が認められそうであるが、より多くの個体による詳細な分析を必要とする。また、18世紀後葉以降は現時点では明瞭な杯が確認できておらず、小皿は著しく小型化している。この段階には施釉された土師器もみられるが、胎土からは在地生産の可能性も想定できる。

上述した諸変化については、小藩が分立している日向の場合、地域差が看取できそうなものであるが、今のところはむしろ地域を超えてシンクロしているようにも思われる。この点をふまえ、生産体制や供給範囲の検討を進めたい。また、変化の背景としては用途や競合商品の問題も検討すべきであるが⁽²⁾、本稿の検討はそこまで及ばなかった。

謝辞

宮崎市教育委員会の秋成雅博氏には、資料調査に対応いただき、佐土原城跡の調査所見についても貴重な御教示を賜った。文末ではあるが、記して感謝申し上げたい。

註

(1) なお、本遺跡ではこの他にも京都産の可能性のある土師器が出土しており（報告書掲載番号 33）、さらには明らかに在地の胎土を用いているが、京都系の製作技術による手づくね土師器（同 16・30・32・34・35）もあり、それらを含めた検討が必要と考えている。

(2) 報告事例の多くに油煙が付着しており、近世段階には主に灯火具として使用されたと考えられる。

引用・参考文献

- 小川 望 2001「灯火具 1 油皿」『図説 江戸考古学研究事典』、柏書房、338～339 頁
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小林謙一 1992「皿形土器類」『江戸在地系陶磁器・土器の諸問題』、江戸陶磁土器研究グループ、106～131 頁
- 鈴木裕子 1999「京焼出土資料の変遷」『京焼—消費地出土の様相—』、関西近世考古学研究会・考古フォーラムとくしま、35～56 頁
- 鈴木裕子 2001「江戸遺跡出土の信楽焼」『近世信楽焼をめぐって』、関西陶磁史研究会、128～139 頁
- 乗岡 実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会、61～69 頁
- 畑中英二 2003「信楽焼の編年と技法」『信楽焼の考古学的研究』、サンライズ出版、49～77 頁
- 平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、9～150 頁
- 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について—土師器供膳具を中心に—」『宮崎考古』第23号、宮崎考古学会、55～78 頁
- 堀田孝博 2016「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』、宮崎考古学会、35～44 頁

報告書一覧

- 大分県教育委員会 1996「机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』
- 延岡市教育委員会 2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書』第26集
- 延岡市教育委員会 2017「市内遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第56集
- 宮崎県教育委員会 1990「前畑遺跡（長禅廃寺墓地推定地）調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第33集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004「中山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「宮ノ東遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第173集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012「飢肥城下町遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第220集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014「置県130年記念 埋蔵文化財資料活用推進事業報告書」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第232集
- 宮崎市教育委員会 2016「佐土原城跡第6次調査」『宮崎市文化財調査報告書』第109集
- 宮崎市教育委員会 2019「中小路遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第127集
- 宮崎市教育委員会 2020「宮崎城跡」『宮崎市文化財調査報告書』第132集

古代・中世・近世の日向における火打石 ～基礎資料の報告（１）～

藤木 聡

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

火は、人の暮らしにおいて不可欠なものであり、マッチが登場する前までは、火を得る方法として打撃式発火法と摩擦式発火法の２つがみられた。打撃式発火法は、火打石と鉄製の火打金を打ち付けて火花を発生し、火口¹⁾に火花を落として火種を得るものであり、それらの研究をとおして人と火の関係史を紐解くことが可能となってくる。

たとえば九州地方では、火打石・火打金を用いた打撃式発火法が遅くとも８世紀には採用されていることや、古代から近代までの火打石の石材が地域ごとに時期別に変化すること、近世には広域流通品と在地産火打石がともに用いられること、火打金の変遷の総体等について明らかとなっている²⁾（藤木 2020a・2020b ほか）。このうち、宮崎県域においては、中世以降の火打金 20 点・民具資料 4 点によって、火打金の型式的な変遷や考古資料と民具資料の連続性が明らかとなり（藤木 2017）、15 年前の集成では 2 点のみであった火打石も、2020 年度末には 284 点の出土が知られるまでに増加した。宮崎県域における火打石出土例の増加は、考古資料としての火打石への認識が深まったことによる大きな成果である。

しかし、この 284 点の内訳を見ると、特定の遺跡や地域へ集中していることや年代の絞り込める遺構出土品が少ないこと等により、宮崎県域における火打石の石材やその変遷、消費・流通の状況等を知る上では、未だ資料の不足や偏りがあると言わざるを得ない。この現状の解消に向けて、新資料の出土を待つとともに、すぐに着手できるのが、各地の収蔵庫に赴いて膨大なコンテナ群を悉皆的に検索し、発掘調査報告書に未掲載のままとなっている資料を“再発掘”していくことである。本稿は、その途中経過として宮崎県内の遺跡出土火打石 61 点を新たに報告し、今後の研究の基礎資料とするものである。

火打石は、その獲得から廃棄までのライフサイクルの視点から、採集・購入されて使用に至る前の“未使用の火打石”、使用過程にある“火打石”、使用による打ち欠けや鋭い稜線の再生により生じた“火打石の欠片”の３つに分類される（図 1）。以下の報告では、個々の資料を分類の上で法量や石材、消費・使用状況等の所見を述べるとともに、資料に付された注記やラベル書き等から出土状況を復元し、出土遺構や包含層の位置づけでもって火打石の年代を推していく。

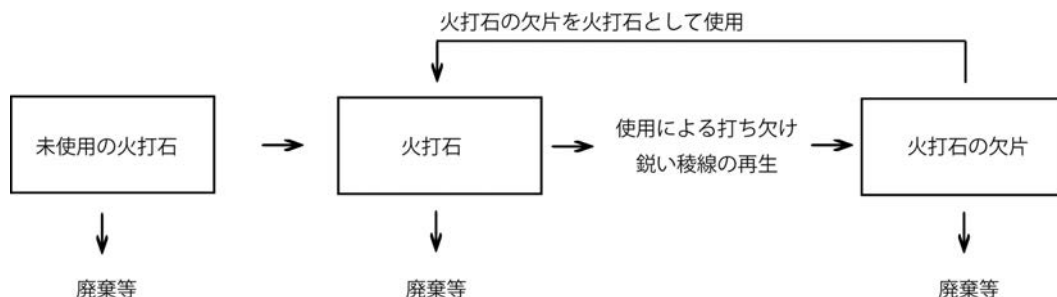


図 1 ライフサイクルからみた火打石の分類

- 本稿で火打石が新たに資料化された遺跡
- これまでに知られている火打石出土遺跡
- △ 【参考】 民俗資料としての火打石が収集された地点

※ 地図中の 1 ～ 97・A ～ D は右下の遺跡一覧表と対応する

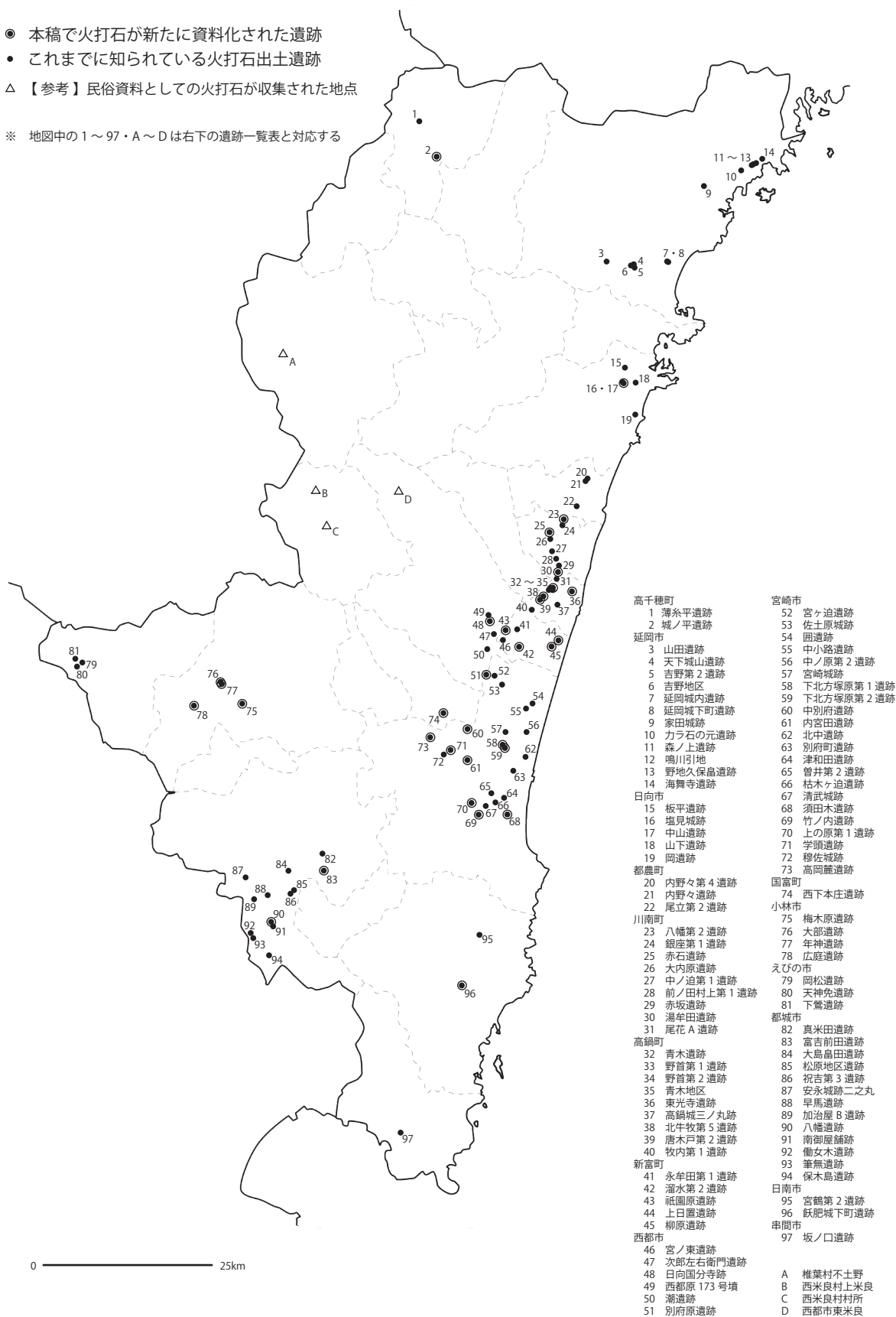


図2 火打石の出土した宮崎県域の遺跡分布図

2 資料報告

今回取り上げる火打石等 61 点は以下の①から⑤のとおりであり、いずれも詳細報告は今回が初出となる。図 3～5 で実測図を、図版 1・2 でカラー写真を示し、1～61 の番号は図・図版間で対応させている。遺跡の位置は図 2 に示した。

- ① 宮崎県文化課及び宮崎県埋蔵文化財センターが 2009 年までに刊行した発掘調査報告書所収の遺跡分で未掲載の火打石等 28 点

遺跡名（所在地）：城ノ平遺跡（高千穂町）、中山遺跡（日向市）、日向国分寺跡（西都市）、別府原遺跡（〃）、湯牟田遺跡（第一次）（川南町）、八幡第 2 遺跡（〃）、北牛牧第 5 遺跡（高鍋町）、唐木戸第 2 遺跡（〃）、柳原遺跡（新富町）、祇園原遺跡（〃）、内宮田遺跡（宮崎市）、中別府遺跡（〃）、学頭遺跡（〃）、高岡麓遺跡（〃）、上の原第 1 遺跡（〃）、竹ノ内遺跡（〃）、西下本庄遺跡（国富町）、八幡遺跡（都城市）

- ② 宮崎県埋蔵文化財センターが 2010～2020 年までに刊行した発掘調査報告書の本文中で、出土があった旨の記載や写真掲載までされたものの法量等が不明であった火打石等 11 点

遺跡名（所在地）：赤石遺跡（川南町）、東光寺遺跡（高鍋町）、青木遺跡（〃）、富吉前田遺跡（都城市）、飫肥城下町遺跡（日南市）

- ③ 小林市教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 8 点

遺跡名：梅木原遺跡・年神遺跡・大部遺跡・広庭遺跡（全て小林市内に所在する遺跡）

- ④ 新富町教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 3 点

遺跡名：溜水第 2 遺跡・上日置遺跡・（新富町内）（全て新富町内に所在する遺跡）

- ⑤ 宮崎市教育委員会が所蔵している資料中の火打石等 11 点

遺跡名：下北方塚原第 1 遺跡・下北方塚原第 2 遺跡・須田木遺跡・高岡麓遺跡（全て宮崎市内に所在する遺跡）

①については、発掘調査報告書の発行年の古い方から順に紹介する（図 3-1～21・図 4-22～28）。日向国分寺跡（図 2-48）では、宮崎県教育委員会による 1989 年度の試掘調査（宮崎県教育委員会 1991）トレンチ 5 のⅠ～Ⅱ層より 1 点（図 3-1）、同じくトレンチ 5 のⅡ～Ⅲ層より 1 点（図 3-2）の計 2 点の火打石が確認された。図 3-1 は、石英の小さな円礫が打ち割られ、その礫面と剥離面がなす稜線に潰れがあるので、法量 $2.5 \times 2.2 \times 1.5\text{cm}$ ・重量 7.8 g である。図 3-2 は淡灰色に茶黒色の節理が入るチャート製で、法量 $1.6 \times 1.3 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 1.1 g である。1989 年度調査トレンチ 5 周辺では、西都市教育委員会により 2001 年度の第 7 次調査が追加され、中心伽藍北東側の寺域内にあたること、2 時期にわたる掘立柱建物跡の存在等が確認されている（西都市教育委員会 2009）。火打石 2 点の年代について、国分寺跡に伴うものなのか注目されるものの、トレンチ 5 が遺構分布の稀薄な箇所にあたることや、2001 年度調査で近世の溝等も確認されたことから、その絞り込みは難しい。城ノ平遺跡（図 2-2）では、A 区包含層から火打石 1 点を確認された（図 3-3）。火打石は淡いピンク色を帯びた粗質の石英製で、法量 $3.5 \times 3.5 \times 2.6\text{cm}$ ・重量 27.5 g である。同遺跡 A 区では縄文時代後期・晩期を中心とする包含層が調査され（宮崎県教育委員会 1993）、未掲載資料中に、火打石とともに方孔を中央にもつ銅銭（銭種不明）1 点も確認された。火打石の年代の絞り込みは難しいものの、銅銭と関連付けるならば中世～近世等であろうか。柳原遺跡（図 2-45）では、火打石 2 点を確認された（図 3-4・5）。図 3-4 は、近隣で採集される石材ではない半透明オレンジ色のメノウ製で、法量 $2.1 \times 1.6 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 3.3 g である。



図版1 火打石 (宮崎県埋蔵文化財センター所蔵)



図版2 火打石（宮崎県埋蔵文化財センター、小林市・新富町・宮崎市教育委員会所蔵）

図3-5は灰白色チャート製で、法量 $1.6 \times 2.2 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 10.7g である。同遺跡Ⅱ区では中世～近世の陶磁器・銅銭等が出土しており（宮崎県教育委員会1994）、火打石もそれらに関係するものか。**学頭遺跡**（図2-71）では、3次調査東区の柱穴P28から1点（図3-6）、5次調査1区から1点（図3-7）の計2点の火打石が確認された。図3-6は大田井産チャート製で³⁾、法量 $1.7 \times 1.4 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 2.2g である。図3-7はヒスイのような色合いを合わせ持つ乳白色チャート製で、法量 $3.6 \times 1.5 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 4.7g である。同遺跡では、縄文時代から古墳時代の多くの遺物がある一方で、遺構の大半は近世以降のものと報告されている（宮崎県教育委員会1995）。**高岡麓遺跡**（図2-73）では、10号土坑から火打石1点が確認された（図3-8）。火打石は白色不透明の珪質岩製で、法量 $1.7 \times 2.7 \times 1.7\text{cm}$ ・重量 9.4g である。10号土坑の埋土中からは陶磁器・瓦・瓦塔・瓦堂片・フイゴ羽口・鉄滓・獣骨等が出土し、陶磁器には、17世紀代のものも含まれるが、多くは18世紀後半～19世紀代の広東碗・端反碗・蛇ノ目釉剥ぎの碗等である（宮崎県教育委員会1996）。火打石もまた18世紀後半～19世紀代のものとみられる。**西下本庄遺跡**（図2-74）では、包含層中から火打石1点が確認された（図3-9）。火打石は黒い節理の走る灰緑色チャート製で、法量 $2.9 \times 2.3 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 7.5g である。同遺跡からは縄文時代～近世までの遺構・遺物が確認され（宮崎県埋蔵文化財センター1999）、現状で宮崎県域最古となる12世紀中葉から末の火打金も出土している（藤木2017）。**上の原第1遺跡**（図2-70）では、2号溝から1点（図3-10）・4号溝から1点（図3-11）の計2点の火打石が出土した。図3-10は玉髓製で、法量 $2.2 \times 1.4 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 3.2g である。図3-11もまた玉髓製で、欠損著しく、法量 $1.8 \times 1.5 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 1.3g である。4号溝は近世末以降の比較的新しい時代の所産とされ（宮崎県埋蔵文化財センター2000a）、火打石の年代根拠とできる。**竹ノ内遺跡**（図2-69）では、A-Ⅱ区のグリッド一括取上げ資料中に火打石1点が確認された（図3-12）。火打石は玉髓製で、法量 $1.1 \times 1.5 \times 1.0\text{cm}$ ・重量 2.9g である。同遺跡では、A-Ⅱ区ほかにおいて中世～近世の遺構・遺物が確認されており（宮崎県埋蔵文化財センター2000b）、火打石もそれに関連するものであろう。**内宮田遺跡**（図2-61）では、表土中から火打石1点が確認された（図3-13）。火打石は、透光性のあるオレンジ色のメノウ製で、法量 $2.8 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 0.6g である。表土中には縄文時代～近世の遺物が含まれている（宮崎県埋蔵文化財センター2001）。**中別府遺跡**（図2-60）では、Ⅱ層中から火打石の欠片1点が確認された（図3-14）。火打石の欠片は大田井産チャート製で、法量 $0.7 \times 1.1 \times 0.4\text{cm}$ ・重量 0.2g である。Ⅲ層が近世以降の耕作土であることから（宮崎県埋蔵文化財センター2001）、火打石もまた近世以降のものとみてよい。**別府原遺跡**（図2-51）では、A区の攪乱から火打石1点が確認された（図3-15）。火打石は玉髓製で、法量 $1.8 \times 1.5 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 4.3g である。同遺跡では、近世の道路状遺構2条や15～19世紀代までの陶磁器等が遺構内および攪乱から出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター2002）、火打石もその年代幅の中で理解してよからう。**八幡遺跡**（図2-90）では、8号土坑から火打石の欠片1点（図3-16）、第一次調査の南北トレンチから火打石1点（図3-17）が出土した。図3-16は大田井産チャート製で、法量 $2.2 \times 1.2 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 2.2g である。図3-17はやや黄みがかった白色に赤紫・薄茶色の縞の入るメノウ製で、法量 $2.6 \times 2.9 \times 1.2\text{cm}$ ・重量 14.4g である。八幡遺跡は、元和元年の一国一城令による都之城の破却後の領主館を取り巻く武家屋敷跡と比定され、18世紀後半～19世紀代の磁器染付碗・色絵碗・皿・瑠璃釉瓶等が出土した8号土坑は廃棄土坑と推定されている（宮崎県埋蔵文化財センター2003a）。大田井産チャート製火打石の欠片は、8号土坑の年代を根拠に、18世紀後半～19世紀代のものであろう。祇園

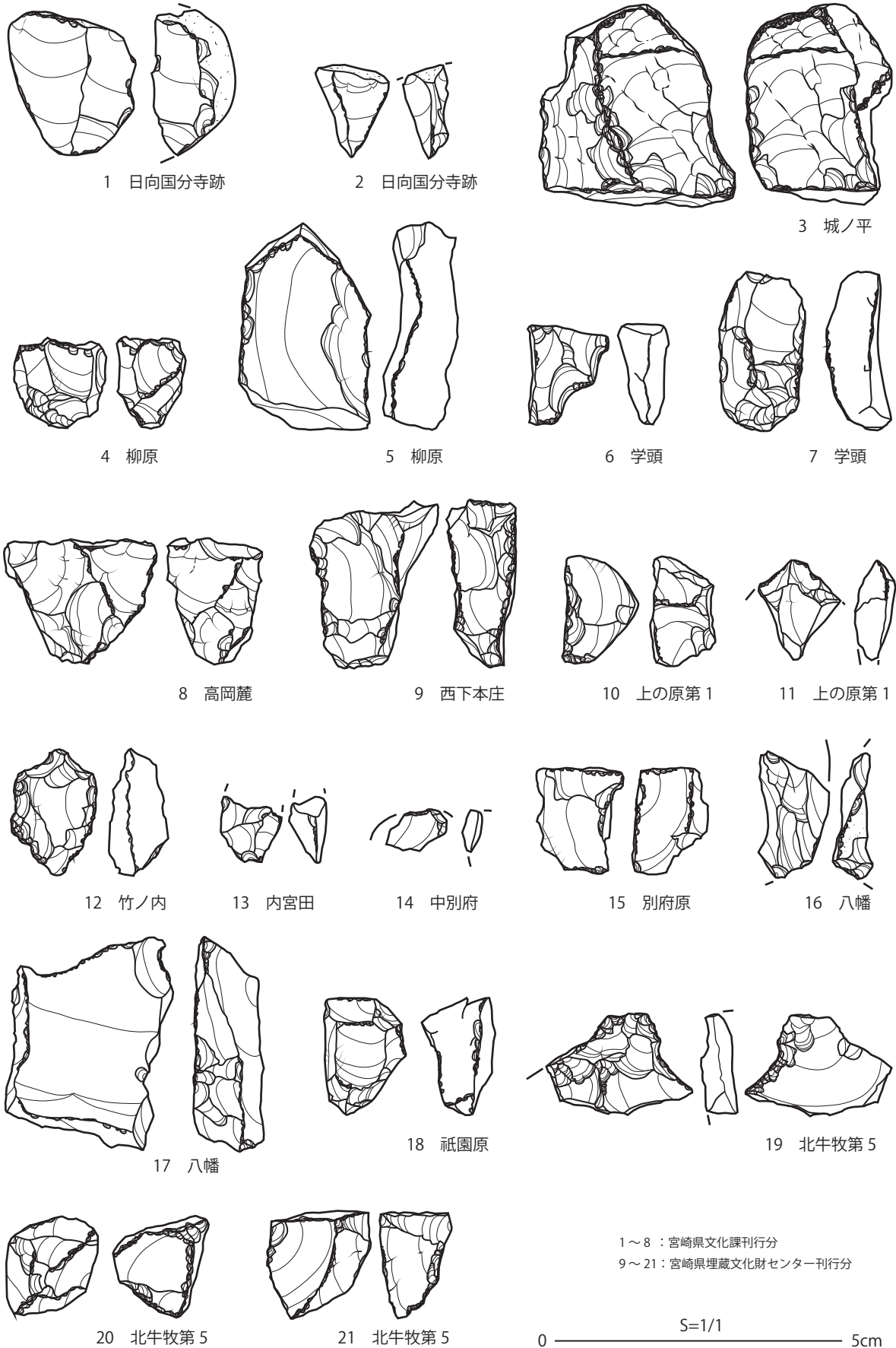


図 3 火打石実測図（１）

原遺跡(図2-43)では、A区から火打石1点が確認された(図3-18)。火打石は玉髓製で、法量 $2.0 \times 1.4 \times 1.3\text{cm}$ ・重量3.9gである。A区では18～19世紀の陶磁器が出土しており(宮崎県埋蔵文化財センター2003b)、火打石もこれらに伴うものであろう。**北牛牧第5遺跡**(図2-38)では、報告書に掲載されたB区出土の“石核”2点について正しくは火打石であると後に修正されたが(藤木2004)、新たにB区I層から火打石2点(図3-20・21)・同攪乱から火打石の欠片を再利用した火打石1点(図3-19)・D区I層から火打石2点(図4-22・23)、火打石の欠片1点(図4-24)の計6点が確認された。図3-20が白色の珪質岩製であるほかは玉髓製であり、法量は、図3-19: $1.7 \times 2.6 \times 0.6\text{cm}$ ・重量2.3g、図3-20: $1.7 \times 1.6 \times 1.7\text{cm}$ ・重量4.0g、図3-21: $1.9 \times 1.8 \times 1.3\text{cm}$ ・重量4.0g、図4-22: $1.9 \times 1.7 \times 1.3\text{cm}$ ・重量4.0g、図4-23: $2.1 \times 2.4 \times 1.4\text{cm}$ ・重量9.2g、図4-24: $3.0 \times 1.7 \times 0.9\text{cm}$ ・重量2.8gである。図3-20・21、図4-23は二次的に火を受けたことで器面に無数のひびが生じており、特に図3-20はひびが顕著で一部が剥落している。同遺跡B・D区では、埋土からみて近現代のものと判断された溝状遺構や近世以降の陶磁器等が確認されており(宮崎県埋蔵文化財センター2003c)、火打石等もまたその年代のものとみてよからう。**中山遺跡**(図2-17)では、A区一括取上げ品中に火打石1点が確認された(図4-25)。火打石は白色チャート製で、法量 $2.7 \times 2.4 \times 1.7\text{cm}$ ・重量11.2gである。A区は17～19世紀末の墓域となっているほか、縄文時代等の遺物が若干出土している(宮崎県埋蔵文化財センター2004)。**唐木戸第2遺跡**(図2-39)では、H5グリッドの包含層中から火打石1点が確認された(図4-26)。火打石は玉髓製で、法量 $3.1 \times 2.6 \times 2.0\text{cm}$ ・重量14.3gである。H5グリッド周辺には12～13世紀代とされる掘立柱建物群や土坑等ならびに弥生時代以降の遺物を含む溝状遺構等が分布し、最も年代の新しい遺物には近世陶磁器や寛永通宝がみられた(宮崎県埋蔵文化財センター2005a)。火打石の年代を絞り込むのは難しいものの、石材が他遺跡と共通した玉髓である点は年代を推す根拠とできよう。**湯牟田遺跡(第一次)**(図2-30)では、B区I層から玉髓製火打石1点が確認された(図4-27)。火打石は、法量 $1.4 \times 1.0 \times 0.8\text{cm}$ ・重量0.9gである。同遺跡B区について、I層は耕作土であり、その下位のアカホヤ火山灰上面で近代磁器片を伴う道路状遺構1条が確認されていることから(宮崎県埋蔵文化財センター2005b)、火打石もまた近代以降の可能性がある。**八幡第2遺跡**(図2-23)では、確認調査トレンチ8(A-1区)の表土中から火打石1点が確認された(図4-28)。火打石は灰白色チャート製で、法量 $4.0 \times 4.3 \times 3.2\text{cm}$ ・重量62.3gである。よく転磨された円礫の一端を輪切りするように打ち割られ、礫面・剥離面間の稜線に潰れがみられる。A-1区では、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の竪穴住居および時期不明の溝状遺構等が分布している(宮崎県埋蔵文化財センター2007)。

②の火打石の実測図・法量等の情報は、今回が初出である(図4-29～39)。**赤石遺跡**(図2-25)では、包含層中から近世のものが出土したと報告され(宮崎県埋蔵文化財センター2009)、法量 $1.7 \times 1.1 \times 1.0\text{cm}$ ・重量1.3gの玉髓製火打石の欠片1点である(図4-29)⁴⁾。**青木遺跡**(図2-32)では、近世以降のものが遺構に伴わず出土したと報告され(宮崎県埋蔵文化財センター2019)、法量 $2.5 \times 2.7 \times 1.8\text{cm}$ ・重量12.1gの玉髓製火打石1点である(図4-32)。**東光寺遺跡**(図2-36)では、包含層出土の“火打石の可能性のある石英”2点の写真が掲載され(宮崎県埋蔵文化財センター2011a)、図4-30が白色の石英製で法量 $2.1 \times 1.4 \times 1.4\text{cm}$ ・重量3.4gである。図4-31がやや黄みを帯びた白色のチャート製で法量 $2.8 \times 2.2 \times 1.7\text{cm}$ ・重量14.0gである。図4-31は転磨された礫面が残っている。古代から中世まで年代幅を持った包含層出土であることから、火打石の年代の絞り込みは難しい。**富吉前田遺跡**(図2-83)では古

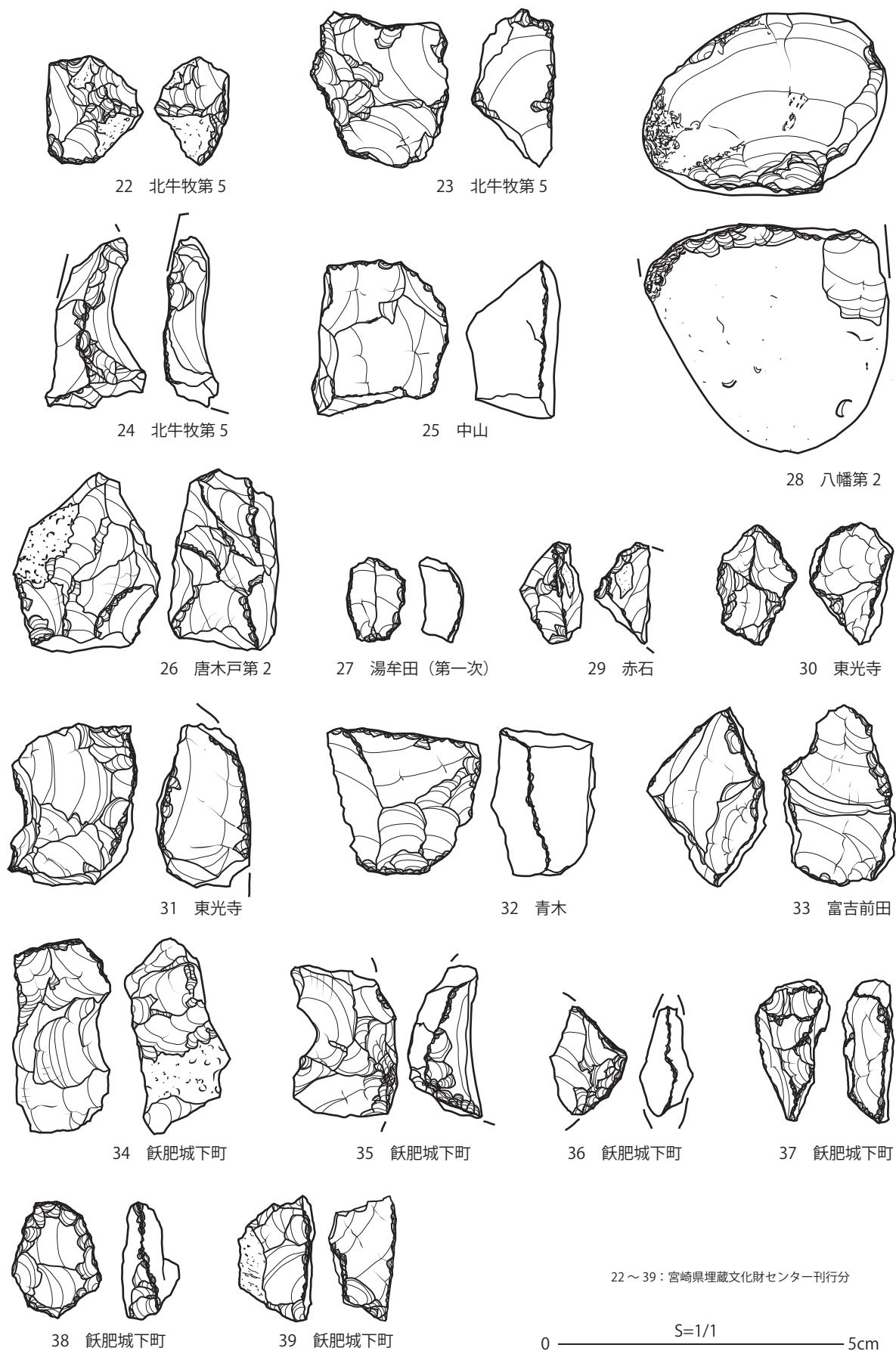


図 4 火打石実測図（2）

代から中世の包含層から火打石1点が出土した旨の本文と写真掲載があり（宮崎県埋蔵文化財センター 2011b）、白色の石英製で法量 $3.1 \times 2.1 \times 2.0\text{cm}$ ・重量 11.5g である（図 4-33）。**飢肥城下町遺跡**（図 2-96）では写真が掲載されており（宮崎県埋蔵文化財センター 2012）、その内訳は大田井産チャート製火打石3点（図 4-35・36・39、このほか図化していない火打石の欠片1点がある）、玉髓製火打石1点（図 4-34、このほか図化していない火打石の欠片1点がある）、乳白色のチャート製火打石1点（図 4-38）、石英製火打石1点（図 4-37）である。出土位置とその年代に注目すると、大田井産チャート製の図 4-36 は 19 世紀前半を中心に 19 世紀後半までの廃棄土坑 S125、同石材の図 4-39 は近代の整地土層Ⅲ層、未図化1点も近代のⅢ層出土である。玉髓製のうち未図化の火打石の欠片は池1の一部を掘り込んだ S40 出土で 18 世紀後半以降になる。石英製の図 4-37 は近代のⅢ層出土である。図 4-34 は S186、図 4-35 は攪乱、図 4-38 は暗渠3層からそれぞれ出土しており、時期の絞り込みが難しい。法量は、図 4-34 : $3.4 \times 1.7 \times 1.9\text{ cm}$ ・重量 10.2 g、図 4-35 : $2.6 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 5.6 g、図 4-36 : $2.6 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 1.7 g、図 4-37 : $2.4 \times 1.3 \times 0.9\text{ cm}$ ・重量 3.0 g、図 4-38 : $2.0 \times 1.5 \times 1.0\text{ cm}$ ・重量 2.9 g、図 4-39 : $2.2 \times 1.4 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 3.6g である。

③の小林市教育委員会所蔵資料の検索は、近世において薩摩藩領である小林市域における火打石関係資料の空白域を埋める目的で実施し、火打石8点が確認された（図 5-40～47）。**梅木原遺跡**（図 2-75）では、3区包含層から玉髓製火打石1点が確認され、法量 $2.8 \times 1.7 \times 1.8\text{ cm}$ ・重量 8.6g である（図 5-40）。3区からは縄文土器、煙管や近代銭貨の出土があり（小林市教育委員会 2000）、遺物の様相からみて火打石は近世以降の可能性があろう。**年神遺跡**（図 2-77）では、3区から火打石2点が確認された（図 5-41・42）。図 5-41 は白色チャート製で、法量 $2.3 \times 1.7 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 6.6g である。図 5-42 はやや粗質でうすい灰緑色チャート製で、法量 $1.8 \times 1.3 \times 1.0\text{ cm}$ ・重量 3.0g である。年神遺跡からは縄文時代～近世の遺物が出土し、3区はとくに中世の竪穴状遺構・柱穴群とともに、土師器・陶磁器・石鍋片等も多数出土している（小林市教育委員会 2001）。遺構・遺物の様相からみて、火打石も中世のものと考えておきたい。**大部遺跡**（図 2-76）では、1-4区で3点の火打石が確認された（図 5-43～45）。図 5-43 は半透明灰黒色のチャート製で、法量 $2.2 \times 1.9 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 4.9 g、図 5-44 は半透明白色のチャート製で、法量 $1.3 \times 1.3 \times 0.8\text{ cm}$ ・重量 1.4 g、図 5-45 は灰白色チャート製で、法量 $2.0 \times 2.0 \times 0.8\text{ cm}$ ・重量 3.7g である。1-4区では中世のものと推定されている竪穴状遺構1基と散漫な柱穴群とともに縄文時代から中世の遺物出土が確認されており（小林市教育委員会 2001）、火打石も同じく中世のものとみておく。**広庭遺跡**（図 2-78）では、1区から1点（図 5-46）、4区から1点（図 5-47）の計2点の火打石が確認された。図 5-46 は灰白色チャート製で、法量 $1.9 \times 1.7 \times 1.3\text{ cm}$ ・重量 7.8g である。図 5-47 はサーモンピンク色の珪質岩製で、法量 $1.6 \times 1.6 \times 1.1\text{ cm}$ ・重量 3.0g である。1区では少量の近世陶磁器、4区では溝状遺構や柱穴群とともに一定量の 18 世紀中頃～19 世紀の陶磁器等が出土しており（小林市教育委員会 2003）、火打石もこれに伴うものとみられる。

④は、新富町教育委員会による遺跡詳細分布調査により採集された資料を検索したものであり、火打石3点が確認された（図 5-48～50）。**溜水第2遺跡**（図 2-42）は旧石器時代の遺跡として知られ、法量 $2.4 \times 1.5 \times 0.9\text{ cm}$ ・重量 3.5 g のチャート製（大田井産チャートの可能性もある）火打石1点が採集されている（図 5-48）。**上日置遺跡**（図 2-44）は旧石器時代から近世の遺跡であり、法量 $1.6 \times 1.3 \times 1.2\text{ cm}$ ・重量 2.7 g の玉髓製火打石1点がある（図 5-49）。残る1点（図 5-50）は地点不明ながら**新富町内**で採集された火打石であり、大田井産チャート製

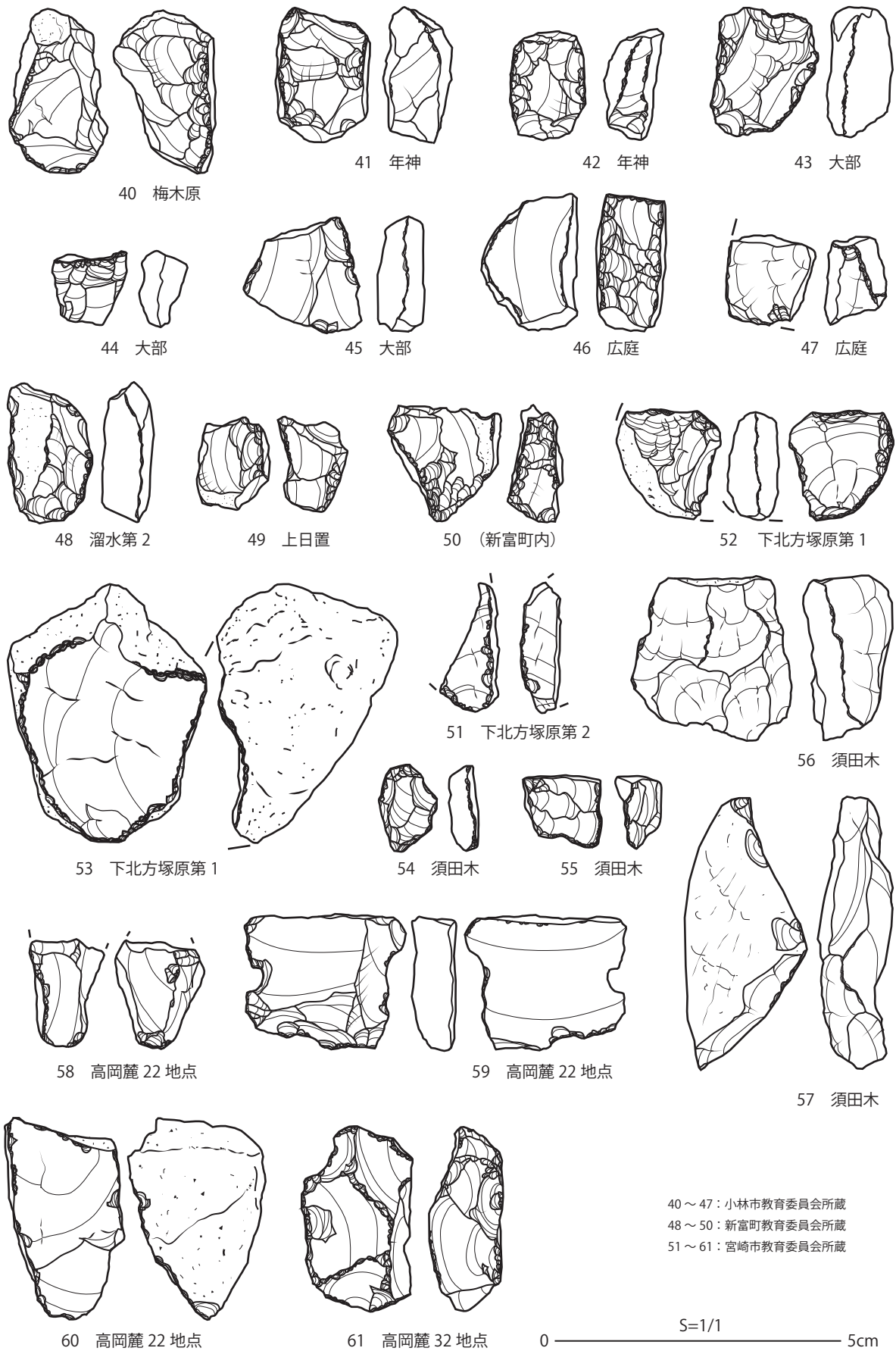


図5 火打石実測図（3）

で法量 $2.0 \times 2.0 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 3.6g である。なお、近世において、溜水第2遺跡は佐土原藩、上日置遺跡は高鍋藩に属する。

⑤の宮崎市（旧清武町・旧高岡町を含む）教育委員会が所蔵されている資料については、下北方遺跡群および須田木遺跡で古代以降の、下鶴遺跡で中世以降の、高岡麓遺跡で近世以降の資料発見を念頭に未掲載石器を検索したものであり、火打石 11 点が確認された（図 5-51 ～ 61）。下北方遺跡群では、**下北方塚原第1遺跡**（図 2-58）Ⅰ区の 13 号ピットから 1 点（図 5-52）、攪乱 B から 1 点（図 5-53）の火打石が確認された。13 号ピット出土火打石は、節理等も多く石質のあまりよくない不透明で黒みの強い灰白色チャート製であり、法量 $2.3 \times 1.8 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 3.1g である。円礫を分割した剥片を火打石として利用している。攪乱 B 出土品は白色不透明の石英製で、法量 $1.9 \times 3.5 \times 3.2\text{cm}$ ・重量 47.4g である。石質は晶洞が目立っておりあまりよくなく、礫面もいびつである。その一端を割って生じた剥離面と礫面との境の稜線に潰れがある。同遺跡Ⅰ区の遺構分布はピットが散漫に広がるもので、遺物も少量小片で遺構の時期特定が難しいとされている（宮崎市教育委員会 2010）。隣接するⅡ区や周辺遺跡の状況からは、古代～中世に収まる火打石の可能性が考えられる。**下北方塚原第2遺跡**（図 2-59）は、古代寺院に伴うとみられる瓦葺の大型掘立柱建物跡をはじめ、9 世紀後半までに収まる 1 号溝状遺構等が確認されている（宮崎市教育委員会 2011）。この 1 号溝状遺構の下層から火打石の欠片 1 点が確認され、遺構年代のとおりに 9 世紀後半までに収まるものとみられる（図 5-51）。火打石の欠片は、節理等の多い粗質かつ不透明で灰～黒みの強い灰白色チャート製で、法量 $1.5 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 1.8g である。**須田木遺跡**（図 2-68）は、飢肥藩士の調練場と伝えられる場所であり、縄文～弥生時代・9 世紀後半等の古代の遺構・遺物等が報告され、近世以降と思われる鉛製弾丸も出土したという（清武町教育委員会 2004）。火打石は包含層出土の 4 点が確認され、玉髓製が 3 点（図 5-54・55・57）、石英製が 1 点（図 5-56）となる。法量は、図 5-54： $4.8 \times 1.0 \times 0.5\text{cm}$ ・重量 0.8 g、図 5-55： $1.5 \times 1.5 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 1.6 g、図 5-56： $1.3 \times 2.8 \times 1.6\text{cm}$ ・重量 13.8 g、図 5-57： $2.4 \times 2.1 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 12.3g である。**高岡麓遺跡**（図 2-73）は、薩摩藩による外城制度により設置された高岡麓の範囲に相当する（高岡町教育委員会 1996）。これまでに高岡麓遺跡 28 地点で 1 点の火打石の出土が報告されているが、8・12・22・25・28・31・32・33・37 地点（高岡町教育委員会 1997・2005、宮崎市教育委員会 2006・2012・2013a・2015、※宮崎県埋蔵文化財センター調査分の図 3-8 は 5 地点に相当）の未掲載資料を検索した結果、新たに高岡麓遺跡 32 地点（宮崎市教育委員会 2012）で攪乱出土の火打石 1 点を確認した（図 5-61）。火打石は灰黒色で良質のチャート製で、法量 $3.3 \times 2.0 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 9.3g である。また、高岡麓遺跡 22 地点（未報告）では、7 号土坑から 2 点（図 5-58・60）、5 号攪乱から 1 点（図 5-59）の計 3 点の火打石が出土していると確認された。図 5-58 は節理の著しい粗質で緑色がかかった乳白色のチャート製で、法量 $1.5 \times 2.1 \times 2.4\text{cm}$ ・重量 18.4g である。図 5-59 は玉髓製で、法量 $1.9 \times 2.8 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 6.0g である。図 5-60 は粗質で透光性がなく部分的に赤色の縞が入るメノウ製で、法量 $3.5 \times 1.3 \times 1.6\text{cm}$ ・重量 3.2g である。同地点は高岡町教育委員会で調査され、現在、宮崎市高岡福祉保健センター穆園館の敷地となっている。高岡麓遺跡 22・32 地点の火打石 4 点の年代は、遺跡の性格からして、いずれも近世以降のものであろう。なお、下北方下郷第4遺跡（宮崎市教育委員会 2009）及び下鶴遺跡（宮崎市教育委員会 2013b）では、火打石の出土は確認されなかった。

		粗質のチャート・ 粗質のメノウ・ 石英	良質のチャート (産地不明)	良質のチャート (大田井産)	玉髄	白色の珪質岩
古 代	下北方塚原第2遺跡 ～9世紀後半	 51				
中 世						
近 世	飫肥城下町遺跡 18世紀後半～ 19世紀代	 37	 38	   35 36 39	 34	
高岡麓遺跡 18世紀後半～ 19世紀代	 58  60	 61			 59	 8
八幡遺跡 18世紀後半～ 19世紀代			 16			
上の原第1遺跡 近世末以降					 11	

図6 本報告における遺構出土品からみた火打石の石材の変遷

3 おわりに

冒頭でも述べたとおり、本稿は、宮崎県域から出土した火打石を題材に人と火の関係史を構築するという目標に向けた、基礎資料の蓄積である。成果をまとめると、まず、宮崎県内では、新たに61点の遺跡出土の火打石が追加されることとなり、97か所の遺跡から合計345点の火打石が出土したと集計できる。管見では、宮崎県分345点を含め九州8県で700点強の火打石が知られていることから、九州の遺跡出土火打石の実に半数近くを宮崎県内資料が占めることになった。

2つめには、高千穂町内に稀少な2点目が見いだされことやこれまで資料が皆無であった小林市域の空白も埋めることができたこと、火打石出土遺跡の分布上の偏りが少しずつながらも解消された点がある。

3つめには、時間軸・編年上の観点で、火打石の変遷等を知る上で年代的な定点としうる遺構出土資料を複数抽出できた点である（図6）。まず、9世紀後半までに収まる遺構出土の火打石が下北方塚原第2遺跡で見いだされた点は、おおむね九州一円において8～9世紀代には火打石を用いた発火法や関連する知識が広まっていたという考えを補うとともに、古代日向における発火具の普及や流通等を知る上で重要な成果の1つとして強調される。また、近世段階の遺構出土品に基づく年代的定点として、飫肥城下町遺跡・高岡麓遺跡・八幡遺跡・上の原第1遺跡が挙げられ、18世紀後半～19世紀代における玉髄・大田井産チャートの利用が特徴的である。大田井産チャート製火打石は、現在の徳島県阿南市大田井で産出したもので、船築紀子氏によると、その市場評価の高まりと販売量の増加を受け、18世紀後半以降には、阿波藩の藩政改革の一環としてその採掘・流通・販売に藩の管理が強化され、阿波藩の管理下で大坂の商人（沢屋徳兵衛）

が火打石流通の委託販売を担っており、さらに、19世紀の初頭には、大田井産チャート製火打石は、京都・大阪のほか近国、西国に出荷され、高値で取引されており、品質のうえでも高評価を得ていたという（船築 2010 ほか）。これまでに、小倉・久留米藩の城下町やその周辺、福岡・小倉両藩の境にあたる黒崎宿、長崎奉行所等において大田井産チャート製火打石の出土が確認されており（藤木 2014 ほか）、今回、飢肥藩領ほかでの流通も明確になってきた。玉髓製火打石は、その判別しやすさにより多く見いだされた可能性もあるものの、大田井産チャートと同様に、近世日向において広域に流通したものとみてよからう。今回報告の竹ノ内遺跡・別府原遺跡・祇園原遺跡・北牛牧第5遺跡・唐木戸第2遺跡・湯牟田遺跡（第一次）・梅木原遺跡・須田木遺跡の玉髓製火打石もまた、状況からみて近世以降となる可能性が高い。また、飢肥城下町遺跡や高岡麓遺跡において、粗質チャートや石英等といった地元産石材とともに、広域流通品である玉髓・大田井産チャートがともに用いられた点は、18世紀以降になって大田井産チャート製火打石等の広域流通品が地元産とともに用いられた小倉城下町等の事例（藤木 2020a ほか）とよく一致している。

次回、宮崎県域から出土した火打石からみた、既出資料等と合わせた総体としての評価・位置づけを進めたい。

謝辞

資料の検索、とくに未掲載資料を収めた膨大なコンテナの出し入れやその検索や手続きにおいて、宮崎県埋蔵文化財センターの関係者のほか、次に挙げる機関や皆様には大変お世話になった。文末ではあるが、お名前を挙げて感謝の意を表したい。

小林市教育委員会 新富町教育委員会 宮崎市教育委員会（旧 清武町教育委員会・旧 高岡町教育委員会を含む）

秋成雅博 石村友規 井上誠二 今城正広 金丸武司 河野裕次 桑村壮雄 島田正浩
西嶋剛広 樋渡将太郎 増谷理絵

註

- 1) 火口は”ほくち”と読み、きわめて脆弱な有機質ということもあり、考古資料で見ることほとんどない。日本列島における民俗資料で知られる火口の材料には、ホクチタケ（シロカイメンタケ）・エブリコ・アカタブ（ハルニレ）・ヨモギ・ヤマボクチ類とホクチアザミ・サクラやキリ及びヤナギ等の消炭・イチビやアサ等の殻の消炭・チガヤやガマ及びガガイモ等の穂や綿等がある（深津 1983）。宮崎県内では、椎葉村において、山の枯れ木に生えるシロナバ（別名ホタナバ）をよく乾燥させて燃やし、粉炭にして用いたほか（泉 1980）、高千穂町五ヶ所では、猟師の携行品（猟具の1つとして通常の火口の代用品で着物のタモト等に溜まったゴミ（タモトクソ）を入れていたことや（田中 1971）、高千穂町・五ヶ瀬町では、サルノコシカケ類を乾燥させ、砕いて粉状にしたものが使われたという（黒木 2010）。
- 2) 火打金は、九州全体で79点（藤木 2020b で77点としたが、その後、新例や遺漏分の追加により79点に増加）が知られている。
- 3) 大田井産チャート製火打石については、後章のまとめの中で解説している。
- 4) 報告書では石英製と記載されている。

参考文献

- 泉 房子 1980「火打ち金」『民具再見』鉾脈社、310-311 頁
- 清武町教育委員会 2004『須田木遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第 12 集
- 黒木秀一 2010「宮崎県のきのこ方言と民俗」『宮崎県文化講座研究紀要』第 37 輯、宮崎県立図書館、69-92 頁
- 小林市教育委員会 2000『梅木原遺跡発掘調査報告書』小林市文化財調査報告書第 11 集
- 小林市教育委員会 2001『市谷遺跡群 餅田遺跡・大部遺跡・杉菌遺跡・年神遺跡』小林市文化財調査報告書第 13 集
- 小林市教育委員会 2003『広庭遺跡』小林市埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 西都市教育委員会 2009『日向国分寺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 56 集
- 新富町教育委員会 2007『新富町の埋蔵文化財（改訂版）』新富町文化財調査報告書第 46 集
- 高岡町教育委員会 1997『高岡麓遺跡第 8 地点』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 15 集
- 高岡町教育委員会 2005『高岡麓遺跡 12 地点』高岡町埋蔵文化財調査報告書第 39 集
- 田中茂 1971「第五章 狩猟習俗」『民俗資料緊急調査報告書－高千穂地方の民俗－』宮崎県教育委員会、175-180 頁
- 深津正 1983『燈用植物』ものと人間の文化史 50、法政大学出版局
- 藤木聡 2014「久留米城下町・小倉城下町・黒崎宿の火打石とその特質」『先史学・考古学論究VI』、301-312 頁、龍田考古会
- 藤木聡 2017「古代から近世の日向における火打金とその変遷～鳥居龍蔵の言及と考古・民俗資料の集成～」『宮崎考古』第 27 号、宮崎考古学会、17-26 頁
- 藤木聡 2020a「九州の火打石－研究の到達点と展望－」『江戸遺跡研究』第 7 号（特集 火打石研究の最前線）、江戸遺跡研究会、11-26 頁
- 藤木聡 2020b「九州における火打金の登場と変遷」『遺跡学研究の地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会、587-596 頁
- 船築紀子 2010「大田井産チャートの流通と大阪近世都市」『財団法人大阪府文化財センター研究調査報告』第 7 集、223-254 頁
- 宮崎県教育委員会 1991『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅲ』
- 宮崎県教育委員会 1993『吾平原第 2 遺跡・宮ノ前第 2 遺跡・城ノ平遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1994『三納代地区遺跡群 城ノ下遺跡 柳原遺跡 志戸平遺跡（二次）』
- 宮崎県教育委員会 1995『学頭遺跡・八兄遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1996『高岡麓遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 15 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000a『上の原第 2 遺跡 上の原第 1 遺跡 上の原第 4 遺跡 白ヶ野第 3 遺跡 A 地区』（第 1 分冊）、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 25 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000b『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 27 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『内宮田遺跡 柳迫遺跡 中別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 30 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 61 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003a『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 70 集

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003b『祇園原遺跡 春日地区遺跡第2地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003c『北牛牧第5遺跡 銀座第3A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005a『唐木戸第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第100集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005b『湯牟田遺跡 (一次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第107集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『八幡第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第148集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『住吉B遺跡 赤石遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第184集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011a『東光寺遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第207集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011b『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第209集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『飢肥城下町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第220集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2019『青木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第248集
- 宮崎市教育委員会 2006『高岡麓遺跡 (25地点)』宮崎市文化財調査報告書第63集
- 宮崎市教育委員会 2009『下北方下郷第4遺跡』宮崎市文化財調査報告書第74集
- 宮崎市教育委員会 2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告書第78集
- 宮崎市教育委員会 2011『下北方塚原第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第82集
- 宮崎市教育委員会 2012『高岡麓遺跡第28・31・32地点』宮崎市文化財調査報告書第90集
- 宮崎市教育委員会 2013a『高岡麓遺跡第33地点』宮崎市文化財調査報告書第95集
- 宮崎市教育委員会 2013b『下鶴遺跡』宮崎市文化財調査報告書第101集
- 宮崎市教育委員会 2015『高岡麓遺跡第37地点』宮崎市文化財調査報告書第105集

【 図表出典等 】 図1～6、図版1・2：遺物実測・製図・写真撮影や作図は全て筆者による。

県指定木花村古墳表採埴輪片 2 例

和田理啓

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

県指定木花村古墳は旧木花村（現宮崎市大字熊野、鏡洲、加江田、学園木花台を含む地域）に所在する古墳で、昭和 12 年 7 月 2 日に前方後円墳 3 基と円墳 5 基が指定されている。

その全てが、大字熊野の所在となっているが、現状で確認できるものは前方後円墳 2 基と円墳 1 基である⁽¹⁾。古墳群は清武川を河口の木崎浜から 3 km 前後遡った南岸に形成されている河岸段丘上に位置している。2 基の前方後円墳は 1 号と 2 号で、1 号では、かつて石棺から鉄剣が出土したとの伝聞（木花郷土誌編纂委員会 1980 p）が残っており、2 号の墳丘上や墳丘周辺では窖焼成の埴輪が表採できる⁽²⁾。

今回報告する埴輪片は、1980 年に表採されたと記録がある円筒埴輪 1 点と、2021 年に陣ノ元遺跡発掘調査前の現地確認時に木花村古墳 2 号周辺で表採した形象埴輪 1 点である。



図 1 県指定木花村古墳位置図（1：3,000,000、1：50,000）

2 埴輪片について

(1) 円筒埴輪片(図2)

資料の円筒埴輪片が保管されたビニール袋内に同封されたボールペン書きのメモは、「木花6号墳 前方後円墳 ハニワ 70800201」と読める。1980年となると、現在から40年以上前のこととなり、その点を考慮すると、ビニール袋に密閉されていたとはいえ紙やインクの劣化が少なく、メモの誤記などの可能性も考えられるが、ここでは1980年2月1日に表採されたものとしておきたい。メモにある「6号墳」であるが、1980年であったとしても、かつての航空写真などからも墳丘が確認できるのは、現在と同じく1、2、4号のみのようである。また、「前方後円墳」と明記されていること、現在、木花古墳群では2号以外の埴輪は知られていないことから、おそらくは2号で表採された資料であると考えられる。

資料は円筒埴輪の胴部で、円孔、タガが確認できる。外面の表面調整は器表の摩耗が激しく判然としない。タガは断面が低い台形状で、内面は工具によるナデ調整が確認できる。色調は明るい橙を成し、指で軽くはじくと高い金属音がするほど焼成は良い。黒斑が確認できないことも含め、窖焼成である可能性は非常に高いと考えられる。残存部位から復元される径は30cm弱である。以前、柳沢一男により2号から川西Ⅴ期の埴輪が表採されているとの報告(柳沢1997)があり、今回の資料の観察結果はこれと矛盾するものではない。

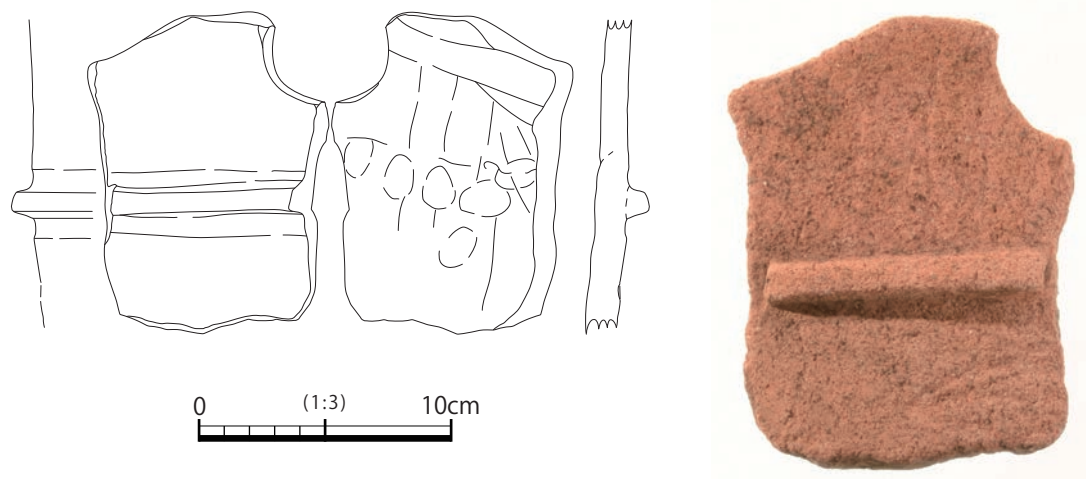


図2 木花村古墳表採円筒埴輪

(2) 形象埴輪片(図4)

2021年2月8日に陣ノ元遺跡発掘調査の事前準備のための周辺確認で、2号周辺を踏査した際に表採したものである。

表採した箇所は、2号墳西側のくびれ部付近に造成されている墓地の敷地内である。状況から、墳丘側からの崩落土に含まれていたものと考えられる。埴輪片は棒状の破片に平たいひれ状の部位が付く。ひれ状の部位は棒状の部分と本体に接続する際の補強となる部分ではないかと考えられ、何らかの形象埴輪の一部であることは確実である。家型埴輪の鯉木などの可能性もあるが、やや反りがあり一方に向かって細くなる形状から、岩橋千塚井辺八幡古墳の武人埴輪が持つ角杯や弓などのように人物埴輪が持つ何らかの道具(大刀、弓など)であると判断した。

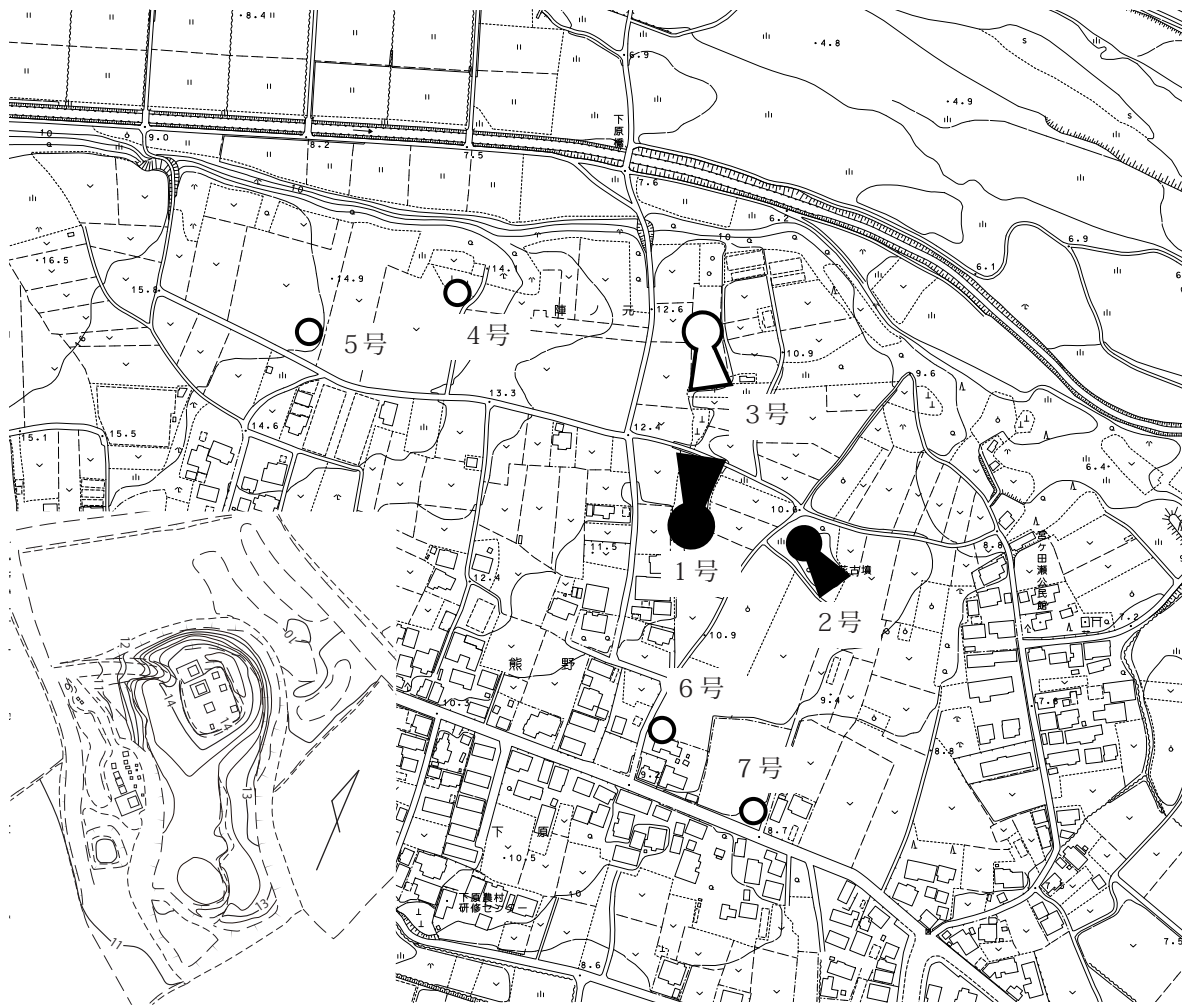


図3 木花村古墳分布図（1：5000）及び2号墳丘測量図（左下1：1000）



図4 木花村古墳表採形象埴輪

3 木花村古墳について

(1) 木花村古墳2号の築造時期について

今回の紹介資料の検討に加え、現状で把握できている情報から2号墳の築造時期を推定した。

墳丘は宮崎大学考古学研究室により詳細な測量が行われており、その結果は『前方後円墳集成』補遺編（近藤義郎 編 2000）に報告されている。墓地の造成や周辺畑地の開墾により墳丘は破壊を受けており、元の墳形を類推するのは難しい状態である。外表施設としては埴輪のほか葺石の敷設がみられる。

築造時期を類推するにあたり、以下の日向の古墳における知見を参考とする。

①日向においては葺石を敷設された後期古墳は現在まで確認されていない。

②日向においては五体を伴った人物埴輪⁽³⁾の出土例は破片を含め、新富町祇園原古墳群の百足塚と宮崎市下北方古墳群の13号墳の2基で、どちらも6世紀前半の大型前方後円墳である。また円筒埴輪は川西Ⅴ期、竹中編年の九州4期（竹中克繁 2003）相当と考えられ後期的な印象が強い。

①からは、中期以前の古墳である可能性が高いこと、②からは逆に後期古墳である可能性型いことが示唆される。

以上のことから、木花村古墳2号の築造時期は、中期末から後期の早い段階に限定されたい。

(2) 木花古墳群の形成について

上記のように、木花村古墳2号の築造時期が中期末から後期の早い段階に限定できるという推定が正しいとした場合、2号周辺に展開する古墳群（以下木花古墳群）形成の背景を若干検討したい。

2号周辺には、1号及び3号（消滅）の2基の前方後円墳の存在が知られている。1号については、葺石が確認できるが、埴輪の存在は確認されていない。また、かつて石棺から鉄剣が出土したとの伝聞がある。葺石の存在から、古手の様相を残すと考えられるが、築造時期の決め手には欠ける。3号については、現状、築造時期を判断できる情報は皆無である。その他、消滅している4～7号についての情報も確認できない。

以上のように非常に情報量の少ない状態での乱暴な仮定となるが、比較的時期推定の根拠が多い2号の築造時期を前方後円墳集成による10期編年（以下、集成編年）の8期後半～9期前半と考え、1号をその前段階、集成編年8期前半とし、木花古墳群の形成の開始時期と捉えたい。

同時期の南部宮崎平野で最も有力な下北方古墳群の首長墓系譜と比較すると、下北方古墳群で系譜が途絶える時期に木花古墳群の系譜が始まることとなる。石崎川流域の首長墓系譜を検討した際にも述べた（和田 2021）が、この時期は生目7号墳の築造時期とも重なり、生目系譜との関係も視野に入れ検討を行うべきだろう。また、木花古墳群の系譜に関して時期やその前後関係が正しいとするのであれば、埴輪祭祀が2号のみで行われていることにも注目される。木花の系譜が開始して以降、下北方の系譜と併存することも考慮すれば、近い時期に埴輪が採用されている下北方13号墳との詳細な比較検討を今後行う必要がある。これまで、顧みられることが少なかった木花古墳群であるが、清武川南岸という宮崎平野部の南限に位置することからも、日向の古墳時代の政治的な背景を考えるうえで重要な位置を占めていることは論を待たないだろう。

4 まとめ

県指定木花村古墳で採集された埴輪片2点の資料紹介をとおして、木花古墳群の若干の評価を

行った。

埴輪と墳丘の観察からは、2号は集成編年の8期後半から9期の前半に位置する可能性が高いと判断した。この判断をもとに、木花古墳群の首長墓系譜が8期前半前後から始まると仮定した。その仮定を前提に、下北方、生目の首長墓系譜との比較を行った結果、木花古墳群の形成の開始は下北方の系譜が一時期途絶える期間であり、また、生目の系譜に7号墳が築造される時期と重なる。これは、以前に行った石崎川流域の首長墓系譜の検討とも通ずる結果である。また、木花古墳群では埴輪祭祀が2号のみにしか採用されていないが、木花古墳群の系譜が、その開始以降、下北方の系譜と併存することとあわせ、注目される事象だろう。これらのことは、古墳群同士が密接に関連した、日向の古墳時代の政治的な背景の現れである可能性がある。

今回、指摘した事項に関しては、乏しい資料からの乱暴な仮説に依る部分が多く、また、以前の検討結果からの循環論法的な展開を行ったことも否めない。今後、今回提起した点について更なる資料の蓄積から実証的検証を重ねていく必要がある。

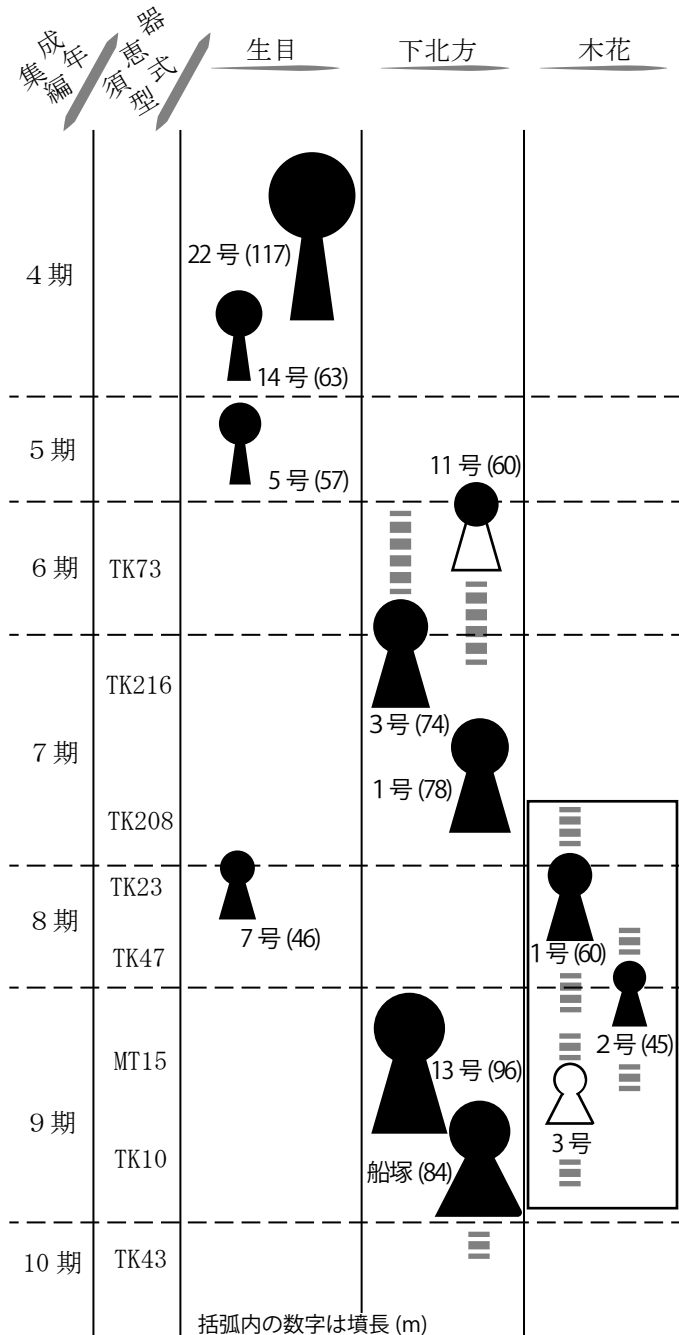


図5 生目・下北方・木花古墳群の首長墓系譜

註

- (1) 宮崎市教育委員会により1号に設置されている説明板によれば、3号は1号の北側に近接してあるとされている。この箇所は、周辺畑地より若干高い部分に墓地が築かれているが、現状では墳丘が全く確認できない。説明板の図による配置では1号墳との間隔がほとんどないこともあり、分布図では微地形なども考慮し説明板よりやや北側を推定位置とした。
- (2) 木花村古墳の1号と2号については文献によって混乱がみられる。『宮崎県史』記載については、各古墳の記載内容と掲載写真については同一であるが、分布図上の番号は入れ換わっている（長津 1993）。『前方後円墳集成』九州編においては東側のものが1号墳、西側のものが2号墳となっており、補遺編で訂正されている。宮崎県に保管されている台帳の地番やその他の記録からも補遺編の訂正は妥当と考えら

れ、本稿では西側を1号墳、東側を2号墳としている。

- (3) 和銅6(713)年に日向国から分国された大隅国の範囲を含め古墳時代の日向の範疇と考えれば、古墳時代中期に神領10号に非常にリアルな武人の顔を持つ埴輪があるが、四肢や胴体のない盾持人埴輪である(橋本2008)。

引用・参考文献

- 川西宏幸 1988「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』
木花郷土誌編集委員会 1980『木花郷土誌』
竹中克繁 2003「円筒埴輪の地域性」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集
柳沢一男 1997「宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』
長津宗重 1993「木花古墳群」『宮崎県史』資料編考古2
近藤義郎 編 1992『前方後円墳集成』九州編
近藤義郎 編 2000『前方後円墳集成』補遺編
和歌山県立紀伊風土記の丘 2011『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』平成23年度 和歌山県立紀伊風土記の丘 開館40周年記念特別展
橋本達也 2008「武人埴輪のその後」『鹿児島大学総合研究博物館 news letter』vol.19
和田理啓 2021「石崎川流域の首長墓系譜について」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6集

図出典

- 図1 国土地理院電子地形図25000をもとに作成
図2、4 竹中美智子による実測図を和田がトレース、写真撮影は和田による
図3 宮崎市作成 平成30年度宮崎市現況図1/2,500及び近藤2000、510頁掲載図をもとに作成
図5 和田2021 第7図をもとに作成

宮崎県内出土の近現代ガラス製品の報告例について

竹田 享志

（宮崎県埋蔵文化財センター）

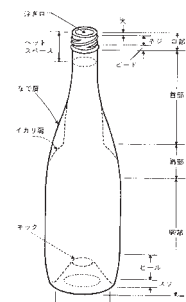
1 はじめに

筆者は、2008年刊行の「宮ノ東遺跡」（表2・図3の10）発掘調査報告書の「近現代」の整理を担当した。宮ノ東遺跡は宮崎県西都市に所在し、旧石器時代から近現代に至る複合遺跡である。近現代においては昭和50年の航空自衛隊新田原基地の飛行機進入路にあたるとして一ツ瀬川対岸の西都市四日市地区へ集団移転するまで「岡富地区集落（岡富村）」が所在した。本調査においては、調査区内に所在した「住吉神社」跡地の石垣裏込（明治）や防空壕跡、表面採集等により多数のガラス製品が出土した。これらを整理するにあたり、宮崎県下の発掘調査報告書掲載の近現代ガラス製品の集成を行い報告書刊行後も継続してきた。今回、その集成を元に若干の考察を行う。

2 宮崎県下の発掘調査報告書掲載の近現代ガラス製品

（1）集成の方法

集成は2021年までに宮崎県教育委員会・宮崎県埋蔵文化財センター・西都原考古博物館から刊行された発掘調査報告書を奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」（<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>、以下「総覧」）での検索および紙媒体で行った。また、図・写真については、「総覧」よりダウンロードしたPDF形式の報告書を加工し使用した。「総覧」にPDFデータが未掲載の報告書に関しては、紙媒体をスキャニングして加工した。



【図1】ガラス瓶の各部名称（山本1990より転載）

大分類	Ⅰ 薬品		Ⅱ 食品			Ⅲ 日用品			Ⅳ 不明
中分類	(1) 医療用薬品	(2) 一般用薬品	(1) 飲料	(2) 食品	(3) 不明	(1) 化粧品	(2) 文具	(3) その他	
小分類	①医療用薬品瓶 ②アンプル ③注射器	①一般用薬品瓶 ②目薬瓶 ③揮発油瓶 ④殺虫剤瓶 ⑤不明	①酒瓶 ②清涼飲料瓶 ③牛乳瓶 ④不明瓶	①調味料瓶 ②食品瓶	①一升瓶	①化粧クリーム瓶 ②白髪染瓶 ③整髪料瓶 ④化粧水瓶 ⑤香水瓶 ⑥不明瓶	①インク・墨汁瓶 ②糊瓶	①玩具・ランプ・蠅取り器	①瓶 ②栓

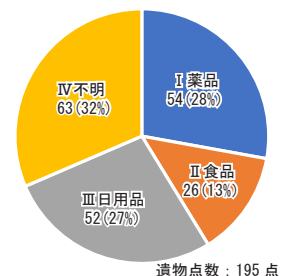
【表1】ガラス製品分類表

（2）分類の方法・ガラス瓶の各部名称について

本稿のガラス製品の分類は、表1の例に沿って分類した。大分類・中分類については瓶等の用途別、小分類については中身の種類（例：酒）＋器種（例：瓶）で分類した。種類に関しては報告書の情報に沿っているが、本稿で新たに判明した商品名等の事実については報告書の記載内容に修正・追加を行っている。また、本稿で取り扱ったガラス瓶の各部名称については、図1に沿って記述した。

（3）報告例の動向

集成の結果、20遺跡195例が報告されていた（表2・図3）。また、図・写真は掲載されていないが、文章上での報告も数点認められた。なお、



【図2】大分類内訳

No.	遺跡名	所在市町村	発行機関	書名	番号	主なガラス製品
1	馬場畑遺跡	延岡市	延岡市教委	市内遺跡	54	香水瓶
2	延岡城内遺跡 (8次)	延岡市	延岡市教委	延岡城内遺跡第8次	27	香水瓶 等
3	浄土寺遺跡 (1次)	延岡市	延岡市教委	市内遺跡	49	瓶
4	恒富中学校地点	延岡市	延岡市教委	平成17年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	32	一升瓶
5	延岡城下町遺跡 (1次)	延岡市	延岡市教委	平成11年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	22	整髪料瓶、インク瓶 等
6	岡遺跡 (9次)	日向市	埋文セ	岡遺跡 (第9次調査)	223	目薬瓶
7	平山下原遺跡	都農町	埋文セ	平山下原遺跡	201	化粧品瓶
8	野首第2遺跡	高鍋町	埋文セ	野首第2遺跡 (第2分冊)	172	アンプル、注射器
9	永牟田第2遺跡	新富町	埋文セ	永牟田第2遺跡	134	一般用薬品瓶、調味料瓶、インク瓶
10	宮ノ東遺跡	西都市	埋文セ	宮ノ東遺跡	173	医療用薬品瓶、一般用薬品瓶、目薬瓶、清涼飲料瓶、牛乳瓶、調味料瓶、化粧クリーム瓶、白髪染瓶、整髪料瓶、化粧水瓶、インク瓶、糊瓶、蠅取り器、ランプ、ビー玉 等
11	昌明寺遺跡	えびの市	えびの市教委	昌明寺遺跡	30	瓶
12	地主原A区	えびの市	えびの市教委	小木原遺跡群	16	瓶
13	高岡麓遺跡	宮崎市高岡町	県教委	高岡麓遺跡		薬瓶、清涼飲料瓶、おはじき 等
14	別府町遺跡	宮崎市	埋文セ	別府町遺跡	137	酒瓶 (ワイン)、インク瓶
15	大久保第2遺跡	都城市	都城市教委	大久保第2遺跡	48	瓶
16	中町遺跡 (5次)	都城市	都城市教委	中町遺跡 (第5次調査)	129	医療用薬品瓶、一般用薬品瓶、目薬瓶、揮発油瓶、殺虫剤瓶、酒瓶 (清酒・ワイン・ビール)、清涼飲料瓶 (サイダー、ラムネ、牛乳瓶、調味料瓶、化粧クリーム瓶、整髪料瓶、化粧水瓶、インク瓶、糊瓶、ランプ 等
17	天神遺跡 (5次)	都城市	都城市教委	都城島津家領の唐人町周辺の遺跡	65	医療用薬品瓶等
18	八幡遺跡	都城市	埋文セ	八幡遺跡	71	溶けたガラス瓶 (都城空襲)
19	南御屋鋪跡	都城市	都城市教委	南御屋鋪跡	127	一般用薬品瓶、目薬瓶、墨汁瓶 等
20	旧鵜戸墓地跡	日南市	日南市教委	旧鵜戸墓地跡	10	酒瓶

【表2】ガラス製品の報告例がある県内遺跡

文章のみの報告に関しても種別等が分かるものに関しては点数に加算している。ガラス片等の記述については加算していない。

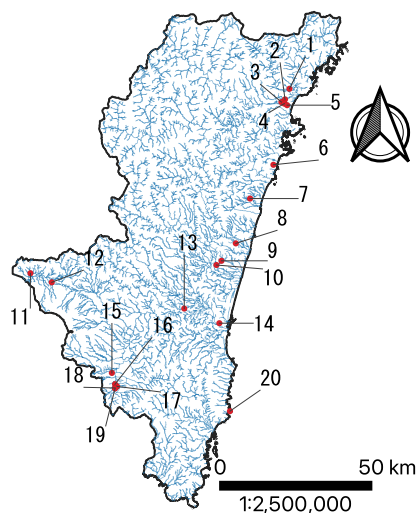
図・写真で報告されたガラス製品の内訳は図2のとおりである。薬品 28%、日用品 27%、食品 13%の内訳となる。

I 薬品

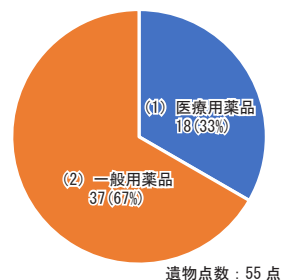
薬品の内訳については、医療用薬品が 33%、一般用薬品が 67%となる (図4)。

1 から 15 は医療用薬品瓶である。他にアンプル (16)、注射器 (17) がある。瓶には医療機関の陽刻 (エンボス) が施されているものもある (1 ~ 7・10・11)。当時のガラス製薬品瓶は服用後、病院等に持参し、詰め替えてもらうものであった。なお、現代においては樹脂製の瓶に置き換わっているが、デザインは踏襲されたものになっている。

18 ~ 54 は一般用薬品瓶 (売薬瓶) である。一般用薬品瓶については、「富山 (トヤマ)」「肥前」の陽刻が施される資料がある (23・36)。四大売薬に数えられた富山・肥前の陽刻をもつこれらの資料は、「配置薬」の1つであることが推察される。また、「神薬」瓶に関しては、さまざまな製薬会社が発売している (20 ~ 23・29・34)。「神薬」は成分にクロロホルムを含む気付薬として、1873 (明治6) 年頃から 1976 (昭和51)



【図3】県内のガラス製品報告遺跡



【図4】I 薬品内訳

年（法令によりクロロホルムの使用禁止）まで販売された。なお規制後、クロロホルム未使用の
 邑田資生堂の神薬はその後販売された。29 は都城市中町遺跡で出土した「資生堂」製の神薬
 である。資生堂は 1872 年に創業した三精舎が興した「資生堂薬局」が元祖である。その後、同
 社名を名乗る複数の企業があり、本資料は明治中期～大正初期の「中田資生堂製」の神薬である。
 なお、19「アサヒ精神薬」・25「ドラミン」は神薬に類似した効能をもつ気付薬である。

形状が特徴的なガラス製品としては目薬瓶がある（35～51）。出土した資料では、35～37、
 44・46 は瓶の一角を凹ませる形状にし、箱に収めた際に生じる隙間に点眼用のガラス管を収納
 し販売されていた。46 は「大学目薬」で 1899（明治 32 年）に発売されている。その後、両口式
 点眼瓶「ロート目薬」（47）が 1931（昭和 6）年に発売され、その後多くの製薬会社でもこの形
 状の目薬が販売された（38・43）。両口式点眼瓶は両端に口部を持ち、大きい方の口に取り付け
 られたゴム製の部品を押すと、薬液が小さい方の口から滴下されるしくみであり、従来の容器に
 比べて薬液に手を触れずに滴下できることで衛生的に使用できるものであった。しかし日中戦
 争・太平洋戦争中のゴム不足から、指で容器の底を叩く際の振動で滴下する一口タタキ点眼瓶（39）
 が使用された。この資料には「組合目薬」の陽刻が施される。戦時統制品である。再び両口式点
 眼瓶が使われ始めるのは戦後になるが（40～42）、1962（昭和 37）年に参天製薬よりポリカーボネー
 ト製点眼容器が発売されることによってガラス製点眼瓶はその役割を終えることになる。40 は
 1952（昭和 27）年発売の「ロートペニマイ目薬」、41 は 1958（昭和 33）年発売の「新ロート目
 薬」である。キャップ等、各所にプラスチックが使用されている。42 は陽刻等の手がかりがなく、
 商品名、販売時期は不明であるが、口縁部に外ネジの加工が施されていることから 40・41 と同
 様プラスチック製のキャップが付くことが想定され、戦後の資料と判断した。

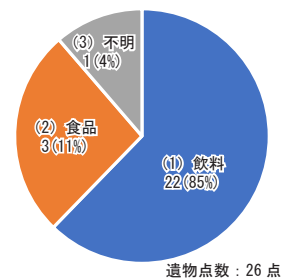
52 は揮発油瓶である。胴部陽刻にある「ライジングサン石油株式会社」は 1900（明治 33）～
 1948（昭和 23）年に操業された現出光興産株式会社・旧昭和シェル石油株式会社の前身である。
 底面に昭和シェル石油の商標である貝殻の陽刻が見られる。

53・54 は殺虫剤瓶である。52 の陽刻にある「大下回春堂」は 1890（明治 23）年に創業し、1962（昭
 和 37）年に株式会社フマキラーに社名変更している。54 は「ハイカチー
 ル」の陽刻をもつ。詳細は不明だが、出土位置が 53 と同じ土坑で有る
 ことから同時期の殺虫剤であろう。

Ⅱ 食品（55～80）

食品については、飲料 85%、食品（調味料等）11%と圧倒的に飲料
 に使用されたガラス製品の割合が高い（図 5）。

55～66 は酒瓶である。55・56 はそれぞれ「三粉詰」（粉＝デシリッ
 トル）「3 D. L I T E R」の陽刻から、1921（大正 10）年の度量衡
 法改正による容量表記義務化後の資料と思われる。57・58 は清酒瓶である。機械栓を装着する
 凹みが口部に見られる。59～63 は底面内のキックの形状からワイン瓶と思われる。59 は「蜂印
 香竄葡萄酒」、商標登録は 1924（大正 13）年である。64～66 はビール瓶である。64・65 は「キ
 リンビール」瓶で、64 は王冠を採用する前のコルク栓を使用する。キリンビールが王冠を採用
 するのは大正に入ってからである。また、陽刻は右から左に施される。65 は「登録商標」の陽
 刻が右から左にかけて施されている。64・65 とともに大正から戦中にかけての資料である。66 は「カ
 ブトビール」瓶である。カブトビールは愛知県半田市で 1898（明治 31）年から 1943（昭和 18）
 年まで製造されていた。

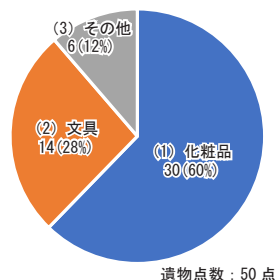


【図 5】Ⅱ 食品内訳

67～71は清涼飲料瓶である。67・68・71はニッキ水瓶である。ひょうたんのような形状に特徴がある。67のように子供向け清涼飲料水（ニッケ水）の陽刻に日中戦争の1932（昭和7）年、爆弾を抱えたまま敵陣に突撃し戦死した（とされた）「肉弾三勇士」（増子2015）の顔と「肉弾三勇士」の文字の陽刻とが施されている。当時の軍国主義思想が子どもの生活の中にも浸透していった様子が伺われる資料である。69はサイダー瓶である。胴部に「大日本麦酒株式会社製造」の陽刻が見られる。大日本麦酒株式会社は1906（明治39）年に札幌・恵比壽・朝日を統合して創業し、戦後の財閥解体・過度経済集中排除法の適用を受け、1949（昭和24）年に朝日麦酒・日本麦酒に分割されるまで続いた。70はラムネ瓶である。内部にガラス玉が見られる。なお、ラムネ瓶はガラス玉栓（1888（明治21）年～）、サイダー瓶は王冠栓（1904（明治37）年～）と栓形状に違いがある。成分等はほぼ同じであるが当時はサイダーのほうが高級品と受け取られていた。

72～75は牛乳瓶である。中町遺跡（第5次調査）（72～74）・宮ノ東遺跡（75）で出土している。宮崎県内における酪農業は、1874（明治7）年に宮崎県別府町（現宮崎市）で搾乳業が開始され、都城市でも1876（明治9）年、西岳村での牧場開場、1880（明治13）年搾乳業が開始された（宮崎県史 資料編 民族1 1992）。宮崎県下で牛乳が消費され始めるのもこの時期と考えられる。牛乳瓶における栓形状の変遷は、Ⅰコルク栓・内ねじ式等（1889（明治22）年～1900（明治33）年）→Ⅱ機械栓（1900（明治33）年以降）→Ⅲ王冠栓（大正末～大戦中）→Ⅳ紙栓（戦後）である（森2017）。72は栓形状は外ネジ式であるが、Ⅰの時期には栓形状にさまざまな種類があり、この形状もバリエーションの一つであることが想定できる。器形はなで肩で首部が残る。初期の牛乳瓶は、細口で首部が長いという特徴があるが、次第に首・肩部が消失し広口瓶の形に変化する。これは瓶洗浄の機械化に関係している。また、胴部には「蒸気消毒」の陽刻が見られるが、この文言の表記義務はなく、おそらく消費者に対する安全性のセールスポイントとしての表記である（森2017）。1897（明治30）～1921（大正10）年頃の資料と思われる。73・74については、王冠栓が1923（大正12）年から普及し、「牛乳営業取締規則」（1927（昭和2）年）で義務化されること、同規則で「高温殺菌」の表示義務化され、その表示が胴部に陽刻されることから1927（昭和2）年から戦中にかけての資料と思われる。なお、容量表記は73が「㍑（デシリットル）」、74が「cc」表示となっている。1921（大正10）年の度量衡法改正による容量表記の義務化および同年改正のメートル法、尺貫法廃止に伴いこのような表記になったと考えられる。75は紙栓である。紙栓は牛乳瓶には戦後導入されている。また、口縁内径は約26mmで、これは1955（昭和30）年の「乳等省令」により「ガラス瓶は無着色透明、口内径が26ミリ以上」と規定されている。胴部に「○正」「180cc」陽刻が見られるが、これは1956（昭和31）年の「計量法・特殊容器制度」で表示を義務付けられたものである。1993（平成5）年には現在のマークに変更されている。1956（昭和31）年～1993（平成5）年までの資料である。なお、牛乳瓶は洗浄・再利用を前提としていたので、洗浄時等の破損の原因となる陽刻はプリントに変更されていく。

77～80は調味料瓶である。77は器形から「バチ瓶」と呼ばれているもので、「味の素」の瓶に似る。「味の素」瓶であれば口部がコルク栓であることから1910（明治43）～1927（昭和2）年（ネジ栓瓶使用開始年）の資料となる。なおバチ瓶は1950年代で消滅する。78は愛知トマト株式会社（現カゴメ株式会社）のケチャップ瓶である。愛知



【図6】Ⅲ 日用品内訳

トマト株式会社創業の1949（昭和24）年からカゴメ株式会社に社名を変更する1963（昭和38）年までの資料である。79はイカリソース瓶350mlである。本資料の形状で1940（昭和15）年から1956（昭和31）年に製造されている。

Ⅲ 日用品

日用品の内訳は、化粧品60%、文具28%、その他12%である（図6）。

81～87は化粧クリーム瓶である。筒形・広口・不透明白色のガラス瓶が多い。また、底面にメーカー商標の陽刻が施されていることもある。82はウテナクリーム（1929（昭和4）年発売・久保政吉商会のちのウテナ）である。底面の陽刻から判明した。85・86は他の資料よりかなり小型であるが、化粧クリーム瓶の特徴を有していることから試供品と見られる。87は底面の陽刻からクロバー化粧品製（合資会社三葉商會（～1956（昭和31）年））と思われる。

88～96は白髪染瓶である。白髪染は古くは近世から商品が存在していたが、掲載資料は明治～昭和30年代の資料である。白髪染の内容成分は染料・糊料・水・酸化剤であるが、これを1つの容器に入れたもの（液体一剤式、1905（明治38）年～）、染料と酸化剤を2つの容器に分けたもの（液体・粉末二剤式、1910（明治43）年～）、粉末三剤式（粉末染料・粉末糊料・酸化剤瓶1本、大正初～中）、粉末一剤式（大正末～昭和初）がある。酸化剤には過酸化水素水を用いていたが、液体二剤式には染料瓶（「甲」の陽刻、県内出土例なし）と区別するために「乙」と定量を示す「一」の陽刻がある。また、粉末三剤式には過酸化水素水を入れるガラス瓶のみ付属するため「定量」「一」の陽刻を施し、「乙」の陽刻はない。88・89は千代ぬれ羽（服部松栄堂）、液体一剤式である。1905（明治38）年～大正の資料である。90は商品名は不明だが、「定量」「一」陽刻があることから粉末三剤式の酸化剤用の可能性があり、大正末から昭和初期の資料と思われる。91も同じく粉末三剤式の酸化剤用のガラス瓶である。「るり羽」「一」「定量」「過酸化水素水」「大阪堂島」「山登産業」の陽刻が施される。山登産業株式会社は1946（昭和21）年からのるり羽を製造販売していた。92・93は「わか君」、粉末三剤式である。92は過酸化水素水の定量を示す「一」が「わか君」とともに陽刻で施されている。発売年は1945（昭和20）年以降である。94～96は「君が代」の容器である。94は「君か代」の陽刻がある。広口であり、「甲」「乙」の陽刻がないことから液体一剤式の可能性がある。そうであれば1910（明治43）年から1920（大正9）年の販売である。95は「君か代」「一」「乙」の陽刻があり、過酸化水素水が入っていたことを示す。液体二剤式である。明治末から1944（昭和19）年の資料である。96は「君が代」「定量」「意匠登録」「33656」「HAIRDYE」「KIMIGAYO」の陽刻がある。粉末三剤式の過酸化水素水の容器である。昭和30年代の資料である。

97～103は整髪料瓶である。97・98は椿油瓶である。1932（昭和7）年大坂毎日新聞に広告「本家をぐら屋・白椿」の広告がある。99は明城ポマード本舗（美星堂：1945（昭和20）年創業）の整髪料（ポマードか）である。100～102は「メヌマポマード」である。底面の「メヌマポマード」の陽刻が右から左に表記されている。井田共栄堂（1910（明治43）年創業）の製品で昭和10年頃の資料である。103は製品名、製造元ともに不明であるが、「ポマード」の陽刻が100～102と同じく右から左に施してあることから同時期の資料であろうか。

104～106は化粧水瓶である。104は大正3（1914）年に発売された化粧水「白色美顔水」である。発売元の桃屋順天館は1885（明治18）年創業である。105は1912（明治45）年発売の化粧水「ホーカー液」である。発売元の堀越商会・二八堂は1909（明治42）年の創業である。106は「清顔水」

の陽刻があるが詳細不明である。104・105と器形の類似点（首部が長く細み、底面形状が四角）から化粧水瓶とした。

107～109は香水瓶である。107は胴部に「KINTSURU」の陽刻が見えることから1927（昭和2）～1959（昭和34）年操業の鶴香水株式会社（1959（昭和34）年「丹頂株式会社」に改名、現マンドラム）の資料である。資料は戦前のものである。108・109は大阪市所在のサハラ香水香油所の香油瓶である。1928（昭和3）年「人事興信録」に佐原忠次郎が香水香油業を営む記述がある。底面にある「2」（108）、「3」（109）の陽刻があり、「2」の資料のほうが幅が大きいことから種類・内容量の異なる複数の製品があったと思われる。

110～112は不明の化粧品瓶である。110は胴部の「CLUB」陽刻から1903（明治36）年創業の株式会社中山太陽堂（現クラブコスメチックス）の瓶である。内容・年代ともに不明である。112は報告書に図・写真は未掲載であったが昭和20年代の資料と報告され、検出した炭窯の時期判定のもとになっている。

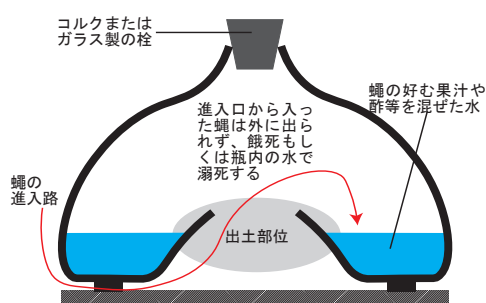
113～124はインク・墨汁瓶である。113・116は底面の「M」の陽刻から丸善インクである。丸善は1885（明治18）年からインク製造を行っている。114はオーストリアに本社を置くコレス社のインク瓶である。創業は1887（明治20）年である。113・115～119は口部形状からコルク栓の可能性があり、戦前の資料であると思われる。120はパイロット1オンスインキボトルである。1949（昭和24）年9月～1959（昭和34）年12月製造の資料である。121は「膳」の陽刻が胴部にあることから、膳写版用のインク瓶と思われる。122は器形と内面にインクと思われる痕跡が残ることからインク瓶とした。コルク栓であることから戦前か。124は胴部に「墨の元」の陽刻が施されている。1898（明治31）年創業の開明株式会社に同名の製品がある。

125・126は糊瓶である。ともに不易糊工業株式会社の製品である。これらの資料は1895（明治28）年の不易糊発売から1961年（昭和36）年の容器がプラスチックに変更されるまでの資料である。

127・128は玩具である。127はビー玉である。玩具に分類しているが、ラムネ瓶の玉栓の可能性もある。128はおはじきである。

129～131はランプである。129はホヤと思われる。130・131は吊りランプ下部の燃料容器と思われる。

132は蠅取器である。図7の網掛け部位が出土した。瓶の底部の口から瓶内の水に混ぜられた果汁や酢の匂いに誘われた蠅が進入するが、蠅は上方にしか飛ばず明るい方向に飛ぶ習性があり進入口からは出られなくなる。瓶内に入った蠅は最終的に餓死か瓶内の水で溺死する。蠅取瓶は明治のころから使用されている製品であるが、



【図7】蠅取瓶断面模式図

は1952（昭和27）年のエアゾール（スプレー）式殺虫剤の発売まで使用されたものであろうか。

IV 不明

製品名等が分からない資料を不明とした。遺跡別に整理している。表3の備考に文献やこれまでに整理した情報から推測した内容物を記載している。

3 集成の結果から

(1) ガラス瓶観察の視点

ガラス製品を観察するにあたって、以下の視点が必要になる。

（i）陽刻

ガラス製品（特にガラス瓶）には、商品名や会社名等さまざまな文字や記号・目盛等が記されている。古手のガラス製品には陽刻（エンボス）で記されていることが多い。ガラス製品の種類や時期等を考える上で大きな指標となる。時代が下るにつれ洗浄・再利用される牛乳瓶など破損しやすい陽刻は印刷に変化していく。また、横書き表記の場合、陽刻が右から左に書かれているガラス瓶は昭和初期以前の遺物の可能性が高い（大正以前＝「右から左」、大正～昭和初期・戦中＝「右から左」「左から右」混在、戦後＝「左から右」：新聞の表記から）。

（ii）色調・透明度・形状（特に胴～底部）

これは陽刻やラベル等が確認できない場合、瓶等の内容物を推定する際に重要な情報となる。例えば、薬品に関しては直射日光による劣化を抑えるために茶色や濃紺の瓶を用いることが多い。また、化粧クリーム瓶は「不透明白色ガラス」「筒形」「広口」というように、商品イメージで色調や透明度等が決まる場合もある。

（iii）気泡・歪み

明治・大正・戦中までの比較的古手のガラス瓶には気泡や歪みが見られる資料が多いが、戦後は製瓶の進歩により見られなくなる。

（iv）合わせ目

ガラス瓶には首～胴・底部にかけて観察される「合わせ目」がある。合わせ目が残る部位により「人工吹き」か「機械製瓶」という製瓶方法が分かり製造時期を推定できる手がかりとなる。1916（大正5）年に導入された「自動製瓶機（機械製瓶）」によるガラス瓶には口縁部まで合わせ目残り、それ以前の「人工吹き」では合わせ目は残らず口縁～首部が歪む傾向がある。また、時代が下るにしたがい、合わせ目は細く目立たなくなる傾向にある。

（v）口縁（栓）の形状

口縁の形状により、紙栓・コルク栓・機械栓・王冠栓等が区別できる。前述のとおりビール瓶や牛乳瓶等、器種の栓の種類によりある程度の時期が判別できる場合がある。

今後、報告書等にガラス製品を報告する際、図や観察表に上記の情報が含まれることを望む。

（2）戦時資料としてのガラス製品

今年(2021年)で戦後76年となる。語り部となる戦争体験者は年を追うごとに減少し、日中戦争・太平洋戦争を語るのは「ヒト」から「モノ」へ否応もなく変化していく。本県出土の戦中遺物としては、宮ノ東遺跡出土の「組合目薬（一口タタキ点眼瓶）(39)」「肉弾三勇士陽刻入りニッキ水瓶（68）」、都城市所在の八幡遺跡出土の都城空襲の際に溶けたガラス瓶等、戦争を物語る資料がある。「一口タタキ点眼瓶」は「両口式点眼瓶」で使用されていたゴムの供給不足により登場した国内の物資不足を背景とした資料である。陽刻された「組合」とは戦時統制経済の中、1941（昭和16）年結成された「全国購買販売組合連合会」を指す。またニッキ水は本来子供向けの清涼飲料水であるが、「肉弾三勇士」の陽刻を瓶に施すことにより、子どもを含む国民の戦意高揚を狙った資料である。軍部とマスコミにより「創られた肉弾三勇士美談」（増子 2015）が民衆の生活の中に浸透していく様子が分かる資料である。なお宮ノ東遺跡が所在する旧岡富村では、昭和20（1945）年4月21日に岡富村公会堂の爆撃（西都市史 2016）時と思われる爆弾破裂痕が検出され、爆弾翼部・機銃弾丸・薬莢が検出されている。都城市八幡遺跡出土の「空襲で溶けたガラス瓶（194）」は、ガラスの溶解温度が800～1000度であることを考えると都城空襲の激しさを

物語っている。これらの戦時下の遺物が大战中の人々の生活の様子を物語ってくれるのではないかと考える。

4 おわりにかえて

集成を行うまで近現代遺物であるガラス製品の報告例は少ないと考えていた。しかし集成を行った結果、195例の報告がなされていた。他の時代の遺物と比べれば決して多い数字ではないが、これだけの数が報告されていたことは意外であった。

宮ノ東遺跡の発掘調査から始めた集成作業は一段落したが、今後は今回不明とした資料の再調査と他の遺構・遺物との関係性などを追いかけていきたいと考えている。

最後に、本稿を執筆するにあたり、近現代遺物を取り上げていただいた発掘調査員とご指導いただいた関係各位に謝意を表し、まとめとする。

参考文献

桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』 六一書房

平成ボトル倶楽部 2017 日本のレトロびん：明治初期から平成までのレアコレクション グラフィック社

山本孝造 1990 『びんの話』 日本能率協会

小林謙一・渡辺貴子 2002 「物質文化研究としての近現代考古学の課題-大橋遺跡出土の近現代ガラス容
器の討から-」『東京考古』第20号

深谷市教育委員会 1997 『埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 51：深谷城跡（第5次）』 深谷市教育
委員会

大橋清信 1999 「英国の薬方コロダインと日本の売薬『神薬』」 薬史学雑誌 34 (2)

増子保志 2015 「創られた戦争美談-肉弾三勇士と戦争美談」 国際情報研究 12 (1)

秋山久美子 2005 「清涼飲料水（ラムネ・サイダー）の近代史」 学苑 778

「3 酪農の変遷」 1992 宮崎県史 資料編 民族1 宮崎県

森貴教 2017 「牛乳瓶の分類と編年：福岡県を対象として」 民具マンスリー 50 (6)

「三 戦争の激化と庶民の生活」 2016 西都市史 通史編 下巻 西都市

内藤記念くすり博物館 HP『薬の記念館』 <http://www.eisai.co.jp/museum/index.html>

北多摩薬剤師会 HP『おくすり博物館』 <https://www.tpa-kitatama.jp/museum/index.html>

日本ガラスびん協会 HP <http://glassbottle.org/>

ちょっと詳しい白髪染の歴史 HP <https://graycolor-history.jp/>

ロート製薬株式会社 HP <https://www.rohto.co.jp/>

「ビールを飲む器とビールの容器 (6) コルク栓から王冠栓へ キリン歴史ミュージアム」 キリンホール
ディングス https://museum.kirinholdings.com/history/theme/b14_12f.html

「ガラス瓶からくるめの近代化を探る 新・筑紫湯の風」 <http://tsukushigata.webcrow.jp/garasubin.html>

【表3】宮崎県下出土のガラス製品一覧

○大分類・中分類・小分類は表1による。 ○色調～無＝無色 透＝透明 不＝不透明 ○時期～明＝明治 大＝大正 昭＝昭和 ○栓～コ＝コルク栓 機＝機械栓 ネ＝ネジ栓 ゴ＝ゴム栓 紙＝紙栓 蓋＝被せ式										
No.	報告書 遺物No.	出土位置	大中 分類	小分類	色調	時期	栓	陽刻	備考	遺跡名
1	4394	S1021 (石垣裏込)	I (1)	①医療用薬品瓶	淡緑透	昭	コ	胴：目盛「○木医院」		宮ノ東遺跡
2	4407	S2138 (防空壕)	I (1)	①医療用薬品瓶	淡緑透	昭	コ	胴：目盛		宮ノ東遺跡
3	4440	S2138 (防空壕)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「米良医院」		宮ノ東遺跡
4	4441	S4742 (溝状遺構)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「米良医院」		宮ノ東遺跡
5	4442	表土	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「米良医院」		宮ノ東遺跡
6	4439	グリッド一括	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「菊池医院」		宮ノ東遺跡
7	4443	表土	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「○院」		宮ノ東遺跡
8	94	SC4 (土坑)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛		中町遺跡 (第5次調査)
9	95	SC4 (土坑)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛		中町遺跡 (第5次調査)
10	98	SC4 (土坑)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「柏村小児成人内科」・ 目盛		中町遺跡 (第5次調査)
11	99	SC4 (土坑)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：「小牧胃腸病療院」・目 盛		中町遺跡 (第5次調査)
12	100	SC4 (土坑)	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛		中町遺跡 (第5次調査)

宮崎県内出土の近現代ガラス製品の報告例について（竹田 享志）

○大分類・中分類・小分類は表1による。 ○色調～無＝無色 透＝透明 不＝不透明 ○時期～明＝明治 大＝大正 昭＝昭和 ○栓～コ＝コルク栓 機＝機械栓 ネ＝ネジ栓 ゴ＝ゴム栓 紙＝紙栓 蓋＝被せ式									
No.報告書 遺物No.	出土位置	大中 分類	小分類	色調	時期	栓	陽刻	備考	遺跡名
13 101	SC4（土坑）	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛		中町遺跡（第5次調査）
14 150	SC5（土坑）	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛 底面：「10」		中町遺跡（第5次調査）
15 417	SC65（土坑）	I (1)	①医療用薬品瓶	無透	昭	コ	胴：目盛陽刻	コルク栓残存	中町遺跡（第5次調査）
16 図無	階段付き土坑	I (1)	②アンプル		昭？				野首第2遺跡
17 図無	階段付き土坑	I (1)	③注射器		昭？				野首第2遺跡
18 120	現代ゴミ穴	I (2)	①一般用薬品瓶	茶透	昭20～30	ネ	胴：「KOBAYASHI TAMUSHITINCTURE」	小林製薬「タムシチンキ」。 昭和20年代後半～30年代 頃のゴミ穴より出土	永牟田第2遺跡
19 4423	表土	I (2)	①一般用薬品瓶	濃藍透	明-大-昭	コ	胴：「アサヒ精神薬」「日朝 製薬株式会社」		宮ノ東遺跡
20 4424	表土	I (2)	①一般用薬品瓶	濃藍透	明-大-昭	コ	胴：「神薬」「株式会社精壽 堂」		宮ノ東遺跡
21 4425	チリ山	I (2)	①一般用薬品瓶	淡藍透	明-大-昭	コ	胴：「神薬」		宮ノ東遺跡
22 4426	チリ山	I (2)	①一般用薬品瓶	濃藍透	明-大-昭	コ	胴：「神薬」「富製薬株式会 社」		宮ノ東遺跡
23 4427	表土	I (2)	①一般用薬品瓶	濃茶透	明-大-昭	コ	胴：「トヤマ」「神薬」「株 式会社廣貴堂」	株式会社廣貴堂（富山県、 明治9年～）	宮ノ東遺跡
24 4428	表土	I (2)	①一般用薬品瓶	無透	昭20代	ネ	底：「丹平」	丹平商会（現丹平製薬株式 会社）「今治水」	宮ノ東遺跡
25 4429	チリ山	I (2)	①一般用薬品瓶	濃緑透	昭	ネ	胴：「ドラミン」「貴仙堂」	貴仙堂（鹿児島県の製薬会 社）。戦前：昭和17年新 聞に広告あり	宮ノ東遺跡
26 92	SC4（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	茶半		ネ？	底面：「☆」	蓋残存	中町遺跡（第5次調査）
27 93	SC4（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	コバルト 半透	明-大	コ	胴：「黄金水」「愛生堂」	藤井愛生堂（宇都宮市）（明 治～大正7年）	中町遺跡（第5次調査）
28 149	SC5（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	白不	大-昭	ネ？	底：「MENTHOLATUM」「REG. 「TRADE MARK」	蓋残存、近江兄弟社「メン ソール・タム」か？（1920～ 1974）、輸入瓶	中町遺跡（第5次調査）
29 399	SC63（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	コバルト 半透	明-大	コ	胴：「神薬」「資生堂製」 「SHISEDO TOKIO」	中田資生堂（明治中～大正 初）	中町遺跡（第5次調査）
30 564	SC108（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	無透		ネ	底面○△エンボス	蓋残存、武田薬品錠剤瓶 か？	中町遺跡（第5次調査）
31 91	SC4（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	茶半透	昭10代	コ	首：「わかもと」 胴部： 「Wakamoto」 上段・下段全 周：3本ライン2組 底： 「11」「NAGA」「8 9 C」	整腸剤「わかもと」（昭和4 年発売）	中町遺跡（第5次調査）
32 146	SC5（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	茶半透	昭10代	コ	首：「わかもと」 胴： 「Wakamoto」 上段・下段全 周：3本ライン2組 底： 「3」「NAGA」「8 9 O」	整腸剤「わかもと」（昭和4 年発売）	中町遺跡（第5次調査）
33 147	SC5（土坑）	I (2)	①一般用薬品瓶	茶半透	昭10代	コ	首：「わかもと」 胴： 「Wakamoto」 上段・下段全 周：3本ライン2組 底： 「1」「NAGA」「10 9 B」	整腸剤「わかもと」（昭和4 年発売）	中町遺跡（第5次調査）
34 157	包含層	I (2)	①一般用薬品瓶	青透	明-大-昭	コ	胴：「神薬」		南御屋鋪跡
35 4431	チリ山	I (2)	②目薬瓶	淡藍透	明-大-昭初	コ	胴：「帝國製薬株式会社」	帝國製薬株式会社（1918～）	宮ノ東遺跡
36 4437 (4432)	S4142（土坑）	I (2)	②目薬瓶	濃茶透	明-大-昭初	コ	胴：「めぐすり鎮眼水」「肥 前神埼大隈南陽堂製」		宮ノ東遺跡
37 4438 (4433)	チリ山	I (2)	②目薬瓶	淡桃透	明-大-昭初	コ			宮ノ東遺跡
38 4432 (4434)	表土	I (2)	②目薬瓶	濃藍透	昭6～	ゴ		両口式点眼瓶	宮ノ東遺跡
39 4433 (4435)	表土	I (2)	②目薬瓶	無透	昭（戦中）	ネ	胴：「組合目薬」	「組合」全国購買販売組合 連合会（昭和16年）、一口 タタキ点眼瓶	宮ノ東遺跡
40 4436 (4438)	チリ山	I (2)	②目薬瓶	淡桃透	昭27	ネ		蓋残、ロートベニマイ目薬 （昭和27年発売、両口式点 眼瓶）	宮ノ東遺跡
41 4434 (4436)	表土	I (2)	②目薬瓶	淡茶透	昭33	ネ		蓋残、新ロート目薬（昭和 33年発売）、両口式点眼瓶	宮ノ東遺跡
42 4435 (4437)	表土	I (2)	②目薬瓶	無透	昭（戦後）	ネ		両口式点眼瓶	宮ノ東遺跡
43 197	表土	I (2)	②目薬瓶		昭13頃	ゴ	胴：「目薬 ヒウン水」「本 舗 田原製薬会社」	蓋残存、昭和13年広告、 録書に写真あり。福岡県「田 原製薬会社」、両口式点眼 瓶	岡遺跡（第9次調査）
44 156	包含層	I (2)	②目薬瓶	青透	明-大-昭初	コ	胴：「加村目薬」「加村薬房」		南御屋鋪跡
45 657	SC133（土坑）	I (2)	②目薬瓶	無透	明-大	コ	胴：「目薬」「上池液」	徳島県「富松武助謹製」	中町遺跡（第5次調査）
46 398	SC63（土坑）	I (2)	②目薬瓶	無透	明32～昭7	コ	胴：「大學目薬」「参天堂薬 房」		中町遺跡（第5次調査）
47 145	SC5（土坑）	I (2)	②目薬瓶	コバルト 半透	昭6～	ゴ	胴：「EYE WATER ROHTO」	ロート目薬、両口式点眼瓶	中町遺跡（第5次調査）
48 写真		I (2)	②目薬瓶		明-大-昭初	コ			高岡麓遺跡
49 写真		I (2)	②目薬瓶		明-大-昭初	コ			高岡麓遺跡
50 写真		I (2)	②目薬瓶			コ			高岡麓遺跡
51 写真		I (2)	②目薬瓶		昭6～	コ	胴：「EYE WATER ROHTO」	ロート目薬、両口式点眼瓶	高岡麓遺跡
52 113	SC4（土坑）	I (2)	③揮発油瓶	青半透	昭23	コ	胴：「ライジングサン石油 株式会社精製品」	ライジングサン石油株式会 社（現出光興産株式会社・ 旧昭和シェル石油）1900（明 治33）～1948（昭和23年）	中町遺跡（第5次調査）
53 116	SC4（土坑）	I (2)	④殺虫剤瓶	青半透	昭37年	王	胴：「専賣特許」「フマキラ 堂」「發賣本舗」「大下回春 堂」	株式会社フマキラー（昭和 37年「大下回春堂より社名 変更」）	中町遺跡（第5次調査）
54 114	SC4（土坑）	I (2)	④殺虫剤瓶	茶半透		王	胴：「専賣特許」「ハイカチ ール」底面：「○」「△」「7」		中町遺跡（第5次調査）
55 13	造成土	II (1)	①酒瓶	薄青緑透	昭20前後	王	胴：「3坊詰」（左横書き）	容量300ml（「坊」エンボス はデシリットル）※右横書 き：戦前）	旧鶴戸墓地跡
56 12	造成土	II (1)	①酒瓶	薄青緑透	昭20後	王	胴：「3D.LITER」	容量300ml（「D」エンボス はデシリットル）	旧鶴戸墓地跡
57 373	SC56（土坑）	II (1)	①酒瓶	青半透		機		清酒	中町遺跡（第5次調査）
58 374	SC56（土坑）	II (1)	①酒瓶	青半透		機		清酒	中町遺跡（第5次調査）
59 159	SC5（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透	大13～	コ	胴：「BEE BRAND KOZAN WINE」「R.KONDO & CO TOKYO」	ワイン、商標出願年1923 年登録年1924年	中町遺跡（第5次調査）
60 371	SC56（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透		コ		ワイン	中町遺跡（第5次調査）
61 372	SC56（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透		コ		ワイン	中町遺跡（第5次調査）
62 408	SC63（土坑）	II (1)	①酒瓶	緑半透		コ？		ワイン	中町遺跡（第5次調査）
63 写真		II (1)	①酒瓶			コ		ワイン	別府町遺跡
64 406	SC63（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透	明40～45	コ	胴：「キリンビール」TKIRIN BREWERY CO」	ビール	中町遺跡（第5次調査）
65 157	SC5（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透	大-昭（戦中）	一	胴：「登録商標KB」	ビール、麒麟麦酒	中町遺跡（第5次調査）
66 405	SC63（土坑）	II (1)	①酒瓶	茶半透	明31～昭18	王	胴：「KABUTO BEER」	ビール	中町遺跡（第5次調査）
67 4450	グリッド一括	II (1)	②清涼飲料瓶	淡緑透	大～昭？	コ？		ニッキ水	宮ノ東遺跡

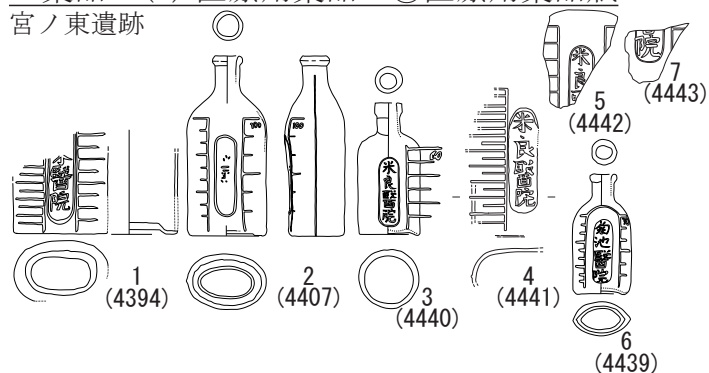
○大分類・中分類・小分類は表1による。 ○色調～無＝無色 透＝透明 不＝不透明 ○時期～明＝明治 大＝大正 昭＝昭和 ○枠～コ＝コルク枠 機＝機械枠 ネ＝ネジ枠 ゴ＝ゴム枠 紙＝紙枠 蓋＝被せ式										
No.	報告書 遺物No.	出土位置	大分類	中分類	色調	時期	枠	陽刻	備考	遺跡名
68	4451	グリッド一括	Ⅱ (1)	②清涼飲料瓶	淡緑透	昭(戦中)	コ?	胴:「肉弾三勇士の顔」	ニッキ水、「肉弾三勇士」(昭和7年)	宮ノ東遺跡
69	156	SC5 (土坑)	Ⅱ (1)	②清涼飲料瓶	緑半透	明39-昭24	一	胴:「商標」「DNB」「大日本麦酒株式会社製造」	サイダー、大日本麦酒株式会社 (1906 (明治39) ～1949 (昭和24))	中町遺跡 (第5次調査)
70	180	SC5 (土坑)	Ⅱ (1)	②清涼飲料瓶	緑半透		一			
71	写真		Ⅱ (1)	②清涼飲料瓶	無透		一		ラムネ、内部にガラス玉	中町遺跡 (第5次調査)
72	186	SC5 (土坑)	Ⅱ (1)	③牛乳瓶	無透		ネ	胴:「蒸気」「消毒」「全乳」	ニッキ水	高岡麓遺跡 中町遺跡 (第5次調査)
73	89	SC4 (土坑)	Ⅱ (1)	③牛乳瓶	無透	昭9-36	王	胴:「都城牛乳株式会社」「高温」「滅菌」「全乳」「0.9?入」	都城牛乳(昭和9年～36年)	中町遺跡 (第5次調査)
74	90	SC4 (土坑)	Ⅱ (1)	③牛乳瓶	無透		王	胴:「高温」「滅菌」「全乳」「90CC」	王冠残存	中町遺跡 (第5次調査)
75	4452	S4142 (土坑)	Ⅱ (1)	③牛乳瓶	無透	昭31-	紙	胴:マルショウマーク 底面:「石」「6」「G」	マルショウマークは昭和26(1951)年の計量法制定後、昭和31(1956)年より付与。石塚硝子製	宮ノ東遺跡
76	375	SC56 (土坑)	Ⅱ (1)	④不明	緑半透		王			中町遺跡 (第5次調査)
77	158	SC5 (土坑)	Ⅱ (2)	①調味料瓶	無透	明43-昭2	コ	バチ瓶	味の素か。資料は1910 (明治43) 年～1927 (昭和2) 年 (スクリュー栓瓶使用開始年) ※バチ瓶は1950 年代で消滅	中町遺跡 (第5次調査)
78	4408	S2138 (防空壕)	Ⅱ (2)	①調味料瓶	無透	昭24-38	王	底:「AICHI TOMATO CO. 55」六芒星	愛知トマト株式会社 (1949 年) ～カゴメ株式会社 (1963 年)	宮ノ東遺跡
79	122	現代ゴミ穴	Ⅱ (2)	①調味料瓶		昭15-31	王	胴:「IKARI SOUCE CO. LTD」底:イカリマーク	イカリソース 350ml。昭和15 年～31 年製造。	永牟田第2 遺跡
80	図・写真	造成土	Ⅱ (3)	①一升瓶		大-昭初	一			恒富中学校地点
81	4404	S2138 (防空壕)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不		ネ			宮ノ東遺跡
82	4420	表土	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不	昭4-	ネ	底:ウテナマーク 蓋上面:ウテナマーク	蓋残存、ウテナクリーム (昭和4 年発売・久保政吉商会のちのウテナ)	宮ノ東遺跡
83	102	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不		ネ			中町遺跡 (第5次調査)
84	103	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不		ネ			中町遺跡 (第5次調査)
85	107	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	乳白不		蓋?		小型、試供品か	中町遺跡 (第5次調査)
86	108	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不		蓋?		小型、試供品か	中町遺跡 (第5次調査)
87	152	SC5 (土坑)	Ⅲ (1)	①化粧クリーム瓶	白不		蓋?	底:クローバーマーク	合資会社三葉商会?	中町遺跡 (第5次調査)
88	384	SC59 (土坑)	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透	明38-	コ	胴:カラスマーク	千代めれ羽 (服部松栄堂、明治38 年～大正)、液体一割式	中町遺跡 (第5次調査)
89	4411	S2138 (防空壕)	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透	明38-	コ	胴:カラスマーク	千代めれ羽 (服部松栄堂、明治38 年～大正)、液体一割式	宮ノ東遺跡
90	4400	S2138 (防空壕)	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透		コ	底:「定量」	酸化剤用か	宮ノ東遺跡
91	4414	チリ山	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透		ネ	胴:「るり羽」「定量」「過酸化水素水」「大阪堂島」「山産産業」	るり羽 (1946 年～山産産業株式会社)	宮ノ東遺跡
92	4415	表土	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透	明末-大	ネ	胴:「わか君」		宮ノ東遺跡
93	4416	表土	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透	明末-大	ネ	胴部:「わかきみ」		宮ノ東遺跡
94	4417	表土	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	淡緑透	明末-大	コ	胴部:「君が代」	山吉商店・明治43 年発売、液体二割式 (明治43 年以降)、染料瓶か。	宮ノ東遺跡
95	4418	S7109 (土坑)	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	淡緑透	明末-大	ネ	胴:「君が代」「乙」	蓋残存、山吉商店・明治43 年発売、酸化剤 (「乙」表記)	宮ノ東遺跡
96	4419	チリ山	Ⅲ (1)	②白髪染瓶	無透	昭30	ネ	胴:「君が代」「定量」「意匠登録」「33656」「HAIRDYE」「KIMIGAYO」	山吉商店・明治43 年発売	宮ノ東遺跡
97	30	ビット6	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	無透	昭初	コ	胴:「小倉油」 底:「登録商標」・紅葉	椿油、昭和7 年大坂毎日新聞に広告あり	延岡城下町遺跡第1 次
98	4405	S2138 (防空壕)	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	無透	昭初	コ	胴:「小倉油」 底:「登録商標」・紅葉	97に同じ	宮ノ東遺跡
99	4421	チリ山	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	無透		ネ	底:「明城」格子	ボマード、明城ボマード舗 (昭和20 年創業)	宮ノ東遺跡
100	104	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	白不	昭10-	ネ	底:「メヌマボマード」	ボマード、井田京栄堂 (明治43 年創業)	中町遺跡 (第5次調査)
101	105	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	白不	昭10-	ネ	底:「メヌマボマード」	100に同じ	中町遺跡 (第5次調査)
102	106	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	白不	昭10-	ネ	底:「メヌマボマード」	100に同じ	中町遺跡 (第5次調査)
103	151	SC5 (土坑)	Ⅲ (1)	③整髪料瓶	緑半透		一	底:「ボマード」	ボマード	中町遺跡 (第5次調査)
104	4403	S2138 (防空壕)	Ⅲ (1)	④化粧水瓶	無透	大3-	コ	底:「桃にトンボ」図案	白色美顔水 (大正3 (1914) 年発売)、桃屋順天館 (明治18 年創業)	宮ノ東遺跡
105	4422	表土	Ⅲ (1)	④化粧水瓶	無透	明末-	コ	胴:「ホーカー液」「堀越」底:「九」	ホーカー液 (明治45 年発売)、堀越商会・二八堂 (明治42 年創業)	宮ノ東遺跡
106	690	SC144 (土坑)	Ⅲ (1)	④化粧水瓶	無透		コ	胴:「清顔水」		中町遺跡 (第5次調査)
107	3	確認トレンチ	Ⅲ (1)	⑤香水瓶		昭初-34	一	胴:「KINTSURU」	金鶴香水株式会社 (現マダム) 1927 (昭和2) ～1959 (昭和34) 創業	馬場畑遺跡
108	39	溝状遺構	Ⅲ (1)	⑤香水瓶		大-昭	コ	胴:「サハラ香油」 底:「3」	サハラ香水香油所 (大阪市) 昭和3 年「人事興信録」に佐原忠次郎が香水香油業を営む記述あり	延岡城内遺跡第8 次
109	40	溝状遺構	Ⅲ (1)	⑤香水瓶		大-昭	コ	胴:「サハラ香油」 底:「2」	108に同じ	延岡城内遺跡第8 次
110	185	SC5 (土坑)	Ⅲ (1)	⑥不明	無透		ネ	胴:「CLUB」	クラブ化粧品 1903 (明治36) ～	中町遺跡 (第5次調査)
111	109	SC4 (土坑)	Ⅲ (1)	⑥不明	無透		一			中町遺跡 (第5次調査)
112	図・写真	ドーム型炭窯	Ⅲ (1)	⑥不明	無透		一		昭和20 年、本遺物から遺構年代を推定	平山下原遺跡
113	4412	S2138 (防空壕)	Ⅲ (2)	①インク瓶	淡緑透	明18-	コ	底:「M」	丸善製 (インキ製造明治18 年開始)	宮ノ東遺跡
114	4413	S2138 (防空壕)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透	明20-	ネ	胴:「KORES INK」 底:「KORES」	オーストリア「コレス社」 (1887 年～)	宮ノ東遺跡
115	111	SC4 (土坑)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透		コ	底:「S」		中町遺跡 (第5次調査)
116	154	SC5 (土坑)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透	明18-	コ	底:「登録」「M」	丸善製 (インキ製造明治18 年開始)、アテナインキか?	中町遺跡 (第5次調査)
117	410	SC63 (土坑)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透		コ			中町遺跡 (第5次調査)
118	411	SC63 (土坑)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透		コ			中町遺跡 (第5次調査)
119	412	SC63 (土坑)	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透		コ			中町遺跡 (第5次調査)
120	121	現代ゴミ穴	Ⅲ (2)	①インク瓶		昭24-34	ネ	胴:「PILOT」「MAID IN JAPAN 17」	蓋残存、パイロット1 オンスインキボトル、昭和24 年9 月～昭和34 年12 月製造	永牟田第2 遺跡

宮崎県内出土の近現代ガラス製品の報告例について (竹田 享志)

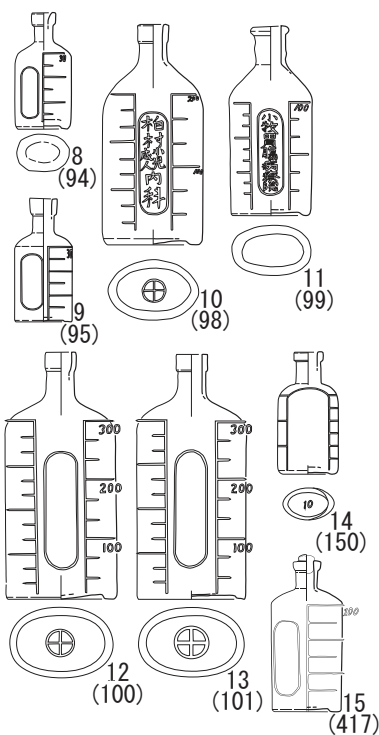
○大分類・中分類・小分類は表1による。 ○色調～無＝無色 透＝透明 不＝不透明 ○時期～明＝明治 大＝大正 昭＝昭和 ○栓＝コ＝コルク栓 機＝機械栓 ネ＝ネジ栓 ゴ＝ゴム栓 紙＝紙栓 蓋＝被せ式										
No.	報告書 遺物No	出土位置	大中 分類	小分類	色調	時期	栓	陽刻	備考	遺跡名
121	28	ビット6	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透	昭	コ	胴：「膳」		延岡城下町遺跡第1次
122	29	ビット6	Ⅲ (2)	①インク瓶	無透	昭	コ	内面にインク付着		延岡城下町遺跡第1次
123	写真		Ⅲ (2)	①インク瓶			—			別府町遺跡
124	158	包含層	Ⅲ (2)	①墨汁瓶	無透	明-大?	コ	胴：「墨の元」	墨汁、1898 (明治31) 年創業開明株式会社	南御屋跡
125	4430	チリ山	Ⅲ (2)	②糊瓶	濃緑透	明28-昭36	ネ	底：「フエキ」	不易糊工業 (1886 (明治19) 年創業)	宮ノ東遺跡
126	110	SC4 (土坑)	Ⅲ (2)	②糊瓶	青半透		ネ	底面「フエキ糊」	125に同じ	中町遺跡 (第5次調査)
127	4453	表土	Ⅲ (3)	①玩具	濃青透		—	断面楕円形	ビー玉	宮ノ東遺跡
128	写真		Ⅲ (3)	①玩具			—		おはじき	高岡麓遺跡
129	4396	S1021 (石垣裏込)	Ⅲ (3)	①ランプ	無透		—		ランプホヤ	宮ノ東遺跡
130	4409	S2138 (防空壕)	Ⅲ (3)	①ランプ	無透		—		ランプ燃料容器	宮ノ東遺跡
131	404	SC63 (土坑)	Ⅲ (3)	①ランプ	無透		—		ランプ燃料容器	中町遺跡 (第5次調査)
132	4395	S1021 (石垣裏込)	Ⅲ (3)	①蠟燭器	無透		—		蠟燭器	宮ノ東遺跡
133	1127	SR-01 (盛土畦畔)	Ⅳ	①瓶	無透		コ			昌明寺遺跡
134	85	SA-01 (竪穴遺構)	Ⅳ	①瓶		明～大	コ			地主原A区
135	159	包含層	Ⅳ	①瓶	茶透		ネ	「SS」「ア」		南御屋跡
136	38	溝状遺構	Ⅳ	①瓶		大-昭	コ	口縁部に注口・胴部下位に屋号あり	薬品?	延岡城内遺跡第8次
137	27	ビット6	Ⅳ	①瓶	無透	昭	コ		薬品?	延岡城下町遺跡第1次
138	25	ビット6	Ⅳ	①瓶	無透	昭	コ		薬品?	延岡城下町遺跡第1次
139	88	D7 (SD01 溝状遺構)	Ⅳ	①瓶	緑透		—		飲料・殺虫剤?	大久保第2遺跡
140	4389	S1021 (石垣裏込)	Ⅳ	①瓶	無透	明-大	コ		薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
141	4390	S1021 (石垣裏込)	Ⅳ	①瓶	無透	明-大	コ		薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
142	4391	S1021 (石垣裏込)	Ⅳ	①瓶	淡青透	明-大	コ		薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
143	4392	S1021 (石垣裏込)	Ⅳ	①瓶	無透	明-大	—		樟油?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
144	4393	S1021 (石垣裏込)	Ⅳ	①瓶	淡藍透	明-大	コ	目盛	薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
145	4398	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	淡緑透	昭	コ	底：「A」	染料? 時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
146	4399	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	淡緑透	昭	コ		薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
147	4401	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	濃藍透	昭	コ	目盛	薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
148	4402	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	無透	昭	コ		薬品?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
149	4406	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	無透	昭	コ		インク・樟油?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
150	4410	S2138 (防空壕)	Ⅳ	①瓶	無透	昭	コ		インク・白髪染?、時期は遺構年代から	宮ノ東遺跡
151	4444	表土	Ⅳ	①瓶	濃藍透		コ	目盛	薬品?	宮ノ東遺跡
152	4445	表土	Ⅳ	①瓶	淡青透		コ	目盛	薬品?	宮ノ東遺跡
153	4446	S2143 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	宮ノ東遺跡
154	4447	チリ山	Ⅳ	①瓶	無透		コ		インク・樟油?	宮ノ東遺跡
155	4448	チリ山	Ⅳ	①瓶	無透		コ		インク?	宮ノ東遺跡
156	4449	チリ山	Ⅳ	①瓶	無透		ネ	「O K45」	薬品?	宮ノ東遺跡
157	57	SC3 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透	明-大	コ		化粧水?	中町遺跡 (第5次調査)
158	96	SC4 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
159	97	SC4 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
160	115	SC4 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		コ	底：「E」「8」	薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
161	117	SC4 (土坑)	Ⅳ	①瓶	緑半透	大-昭36	コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
162	148	SC5 (土坑)	Ⅳ	①瓶	茶半透		—	胴：「オラホカ」「OLAVOCA」	薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
163	153	SC5 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ	底：「一」	化粧水?	中町遺跡 (第5次調査)
164	155	SC5 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		ネ		佃煮?	中町遺跡 (第5次調査)
165	160	SC5 (土坑)	Ⅳ	①瓶	緑半透		コ		醤油?	中町遺跡 (第5次調査)
166	376	SC56 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
167	377	SC56 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		王?		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
168	378	SC56 (土坑)	Ⅳ	①瓶	茶半透		コ	底：「TWC」	化粧水?	中町遺跡 (第5次調査)
169	379	SC56 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		インク?	中町遺跡 (第5次調査)
170	380	SC56 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		樟油?	中町遺跡 (第5次調査)
171	396	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		王		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
172	397	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	青半透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
173	400	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
174	401	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
175	402	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		—		顆粒薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
176	403	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	緑半透		コ		染料?	中町遺跡 (第5次調査)
177	407	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	緑半透		王		飲料・調味料?	中町遺跡 (第5次調査)
178	409	SC63 (土坑)	Ⅳ	①瓶	緑半透		—		酒?	中町遺跡 (第5次調査)
179	615	SC132 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		染料?	中町遺跡 (第5次調査)
180	658	SC133 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		—		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
181	691	SC144 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		化粧水?	中町遺跡 (第5次調査)
182	693	SC147 (土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
183	771	SH1 (特殊土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
184	772	SH1 (特殊土坑)	Ⅳ	①瓶	無透		コ		薬品?	中町遺跡 (第5次調査)
185	314	ドーム型炭窯	Ⅳ	①瓶	淡緑透	昭20	—	瓶全体に気泡が多い	薬品?	①医療用薬品瓶
186	315	ドーム型炭窯	Ⅳ	①瓶		昭20	—	口縁部は欠損	薬品?	平山下原遺跡
187	112	SC4 (土坑)	Ⅳ	2栓	無透		—			中町遺跡 (第5次調査)
188	385	SC59 (土坑)	Ⅳ	2栓	無透		—			中町遺跡 (第5次調査)
189	773	SH1 (特殊土坑)	Ⅳ	2栓	無透		—			中町遺跡 (第5次調査)
190	写真		Ⅳ	①瓶			コ		薬品?	高岡麓遺跡
191	写真		Ⅳ	①瓶			コ		薬品?	高岡麓遺跡
192	図・写真	客土	Ⅳ	①瓶			—			浄土寺遺跡第1次
193	図・写真	西都原16号墳半地下施設	Ⅳ	①瓶			—		ガラス瓶から遺構年代が判明した事例	西都原16号墳
194	図・写真		Ⅳ	①瓶			—	溶けたガラス塊。都城空襲の被害か。		八幡遺跡
195	図・写真		I (1)	①医療用薬品瓶			—	「坂元医院」		天神遺跡5次

I 薬品 (1) 医療用薬品 ①医療用薬品瓶

宮ノ東遺跡

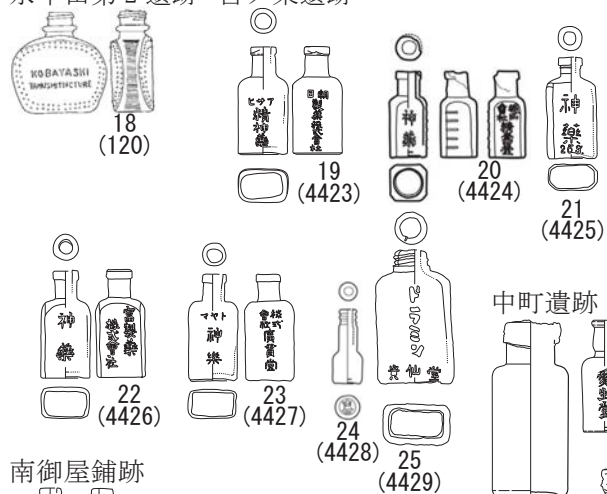


中町遺跡第5次調査



I 薬品 (2) 一般用薬品 ①一般用薬品瓶

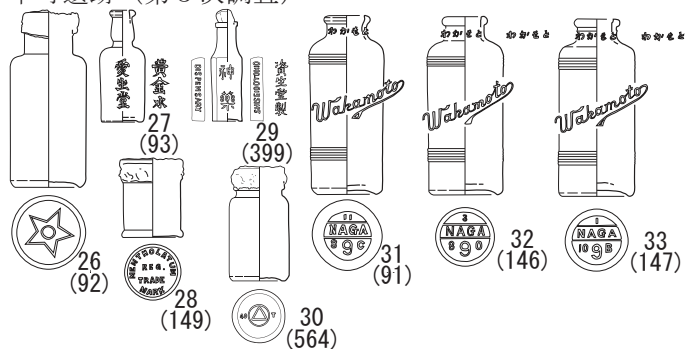
永牟田第2遺跡 宮ノ東遺跡



南御屋舗跡

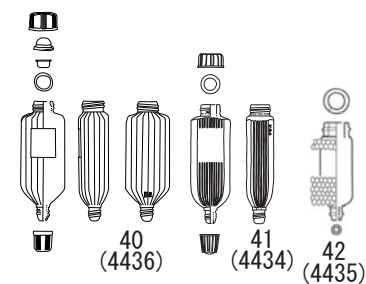


中町遺跡 (第5次調査)

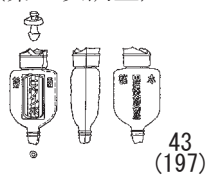


I 薬品 (1) 一般用薬品 ②目薬瓶

宮ノ東遺跡



岡遺跡
(第9次調査)



南御屋舗跡

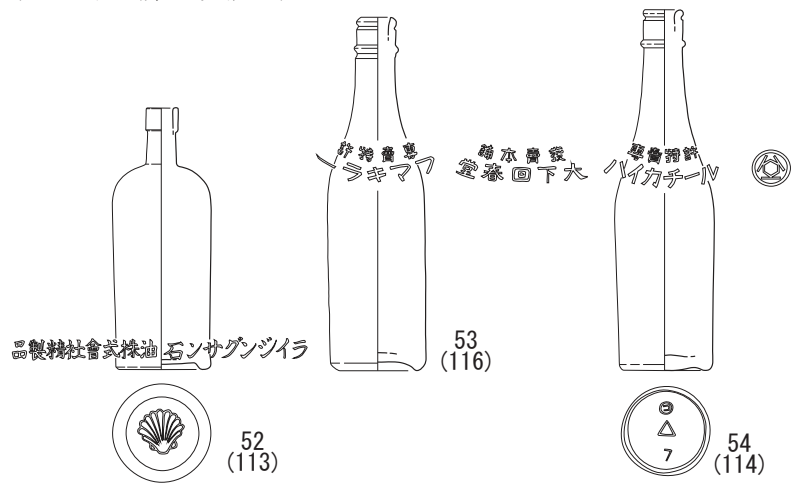


中町遺跡 (第5次調査)



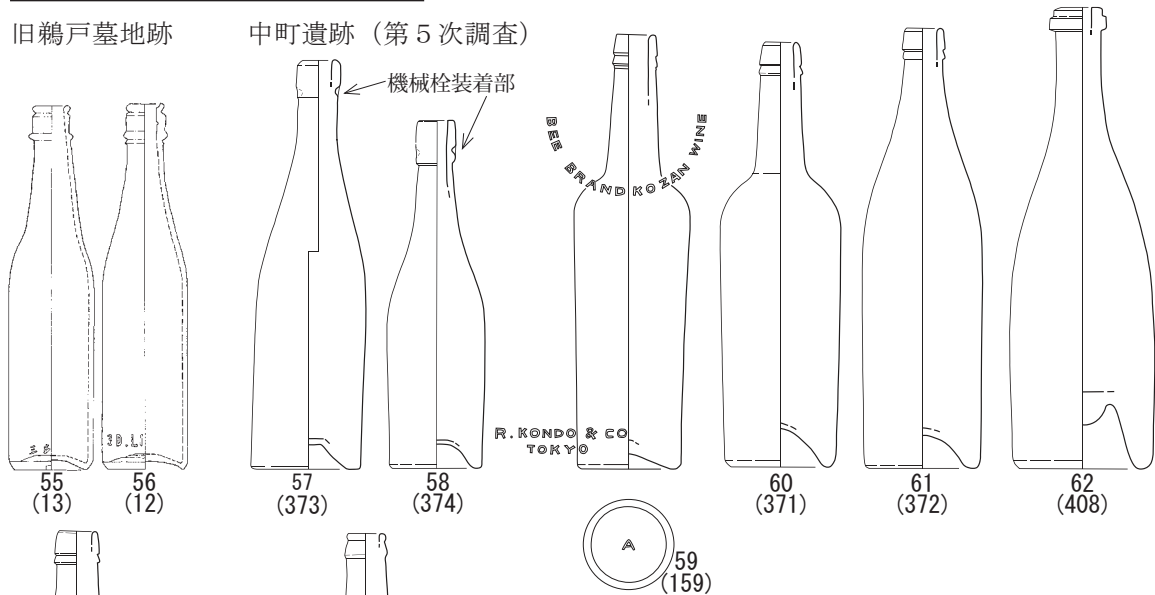
0 10cm
S=1:5

I 薬品 (1) 一般用薬品 ③揮発油瓶 ④殺虫剤瓶
中町遺跡（第5次調査）



II 食品 (1) 飲料 ①酒瓶

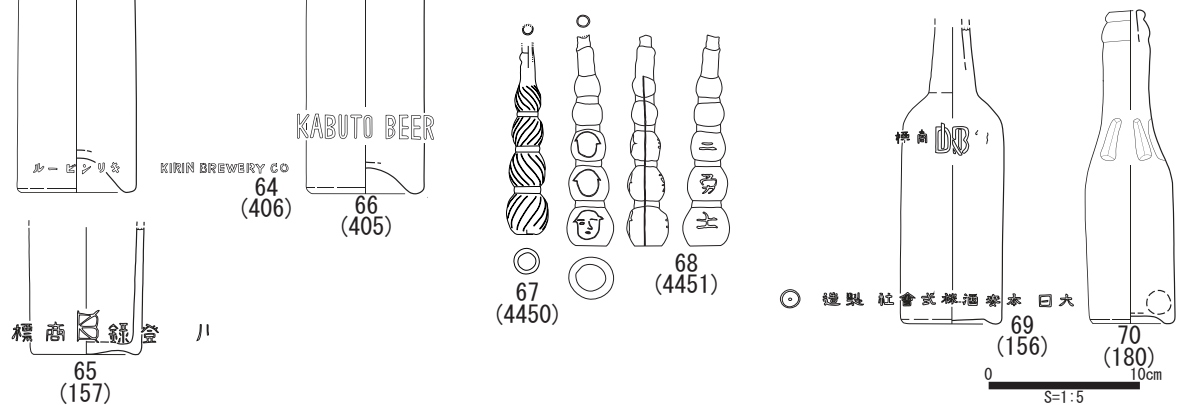
旧鶴戸墓地跡 中町遺跡（第5次調査）



II 食品 (1) 飲料 ②清涼飲料瓶

宮ノ東遺跡

中町遺跡（第5次調査）



II 食品 (1) 飲料 ③牛乳瓶

中町遺跡 (第5次調査) 宮ノ東遺跡

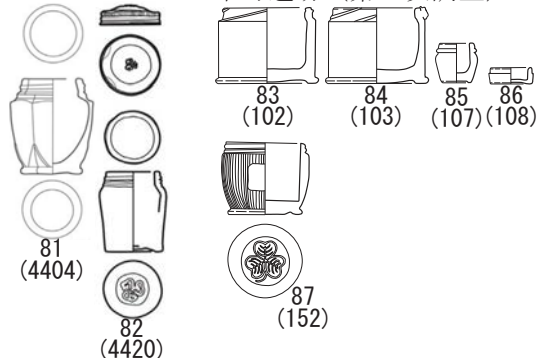


III 日用品

(1) 化粧品 ①化粧クリーム瓶

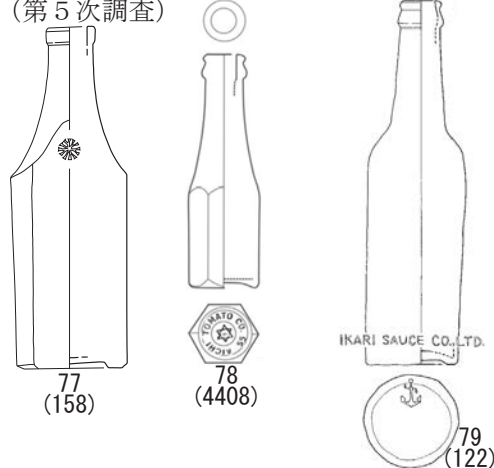
宮ノ東遺跡

中町遺跡 (第5次調査)



II 食品 (2) 食品 ①調味料瓶

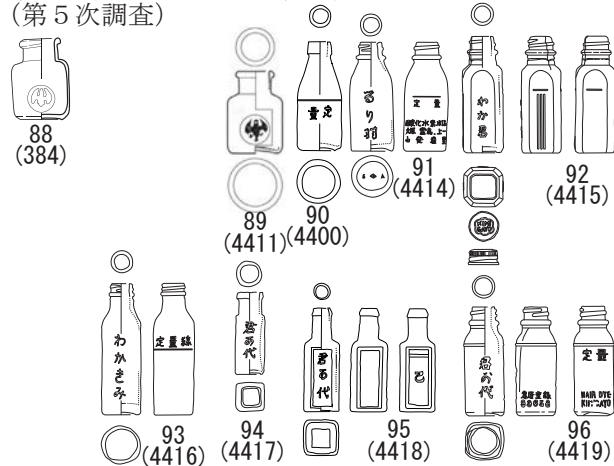
中町遺跡 (第5次調査) 宮ノ東遺跡 永牟田第2遺跡



III 日用品 (1) 化粧品 ②白髪染瓶

中町遺跡 (第5次調査)

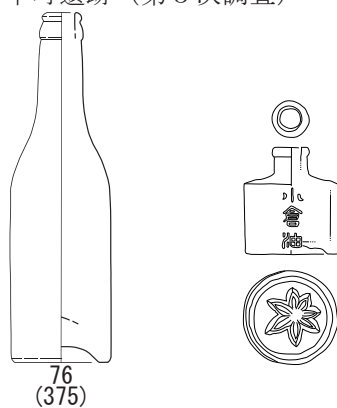
宮ノ東遺跡



II 食品

(1) 飲料 ④不明瓶

中町遺跡 (第5次調査)

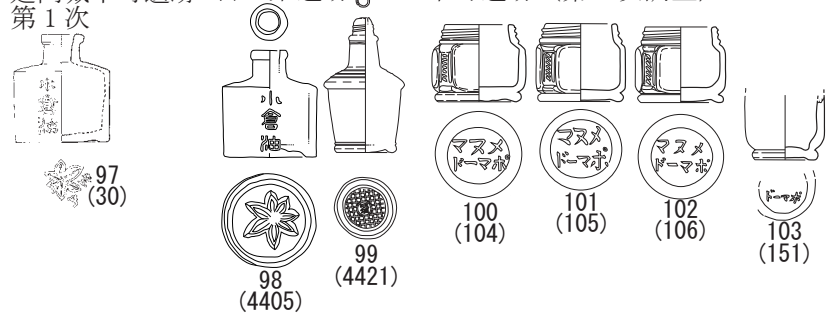


III 日用品 (1) 化粧品 ③整髪料瓶

延岡城下町遺跡 第1次

宮ノ東遺跡

中町遺跡 (第5次調査)



III 日用品

(1) 化粧品 ④化粧水瓶

宮ノ東遺跡

中町遺跡 (第5次調査)

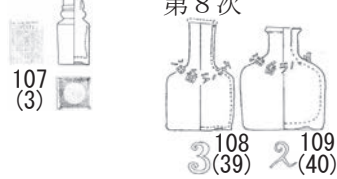


0 10cm
S=1:5

Ⅲ日用品

(1) 化粧品 ⑤香水瓶

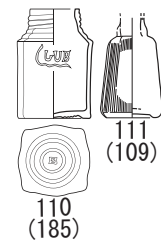
馬場畑遺跡 延岡城内遺跡
第8次



Ⅲ日用品

(1) 化粧品 ⑥不明瓶

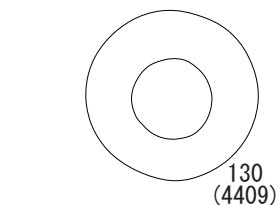
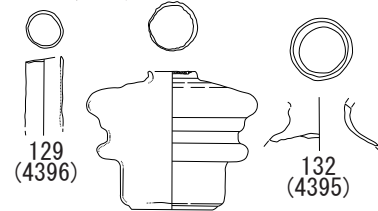
中町遺跡
(第5次調査)



Ⅲ日用品 (3) その他

②ランプ ③ハエ取り瓶

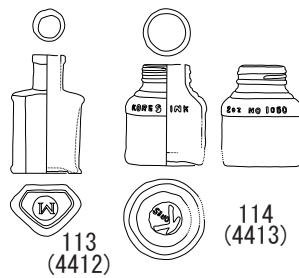
宮ノ東遺跡



Ⅲ日用品 (2) 文具

①インク瓶・墨汁瓶

宮ノ東遺跡



Ⅲ日用品

(2) 文具

宮ノ東遺跡

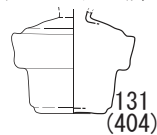


②糊瓶

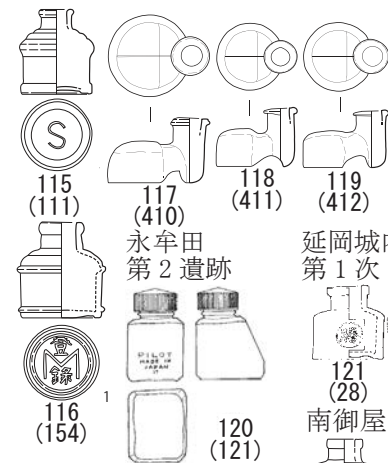
中町遺跡
(第5次調査)



中町遺跡 (第5次調査)



中町遺跡 (第5次調査)



永牟田
第2遺跡



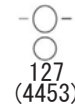
延岡城内遺跡
第1次



Ⅲ日用品

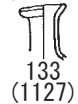
(3) その他 ①玩具

宮ノ東遺跡



Ⅳ不明 ①瓶

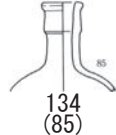
昌明寺遺跡



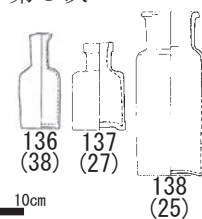
南御屋鋪跡



地主原A区



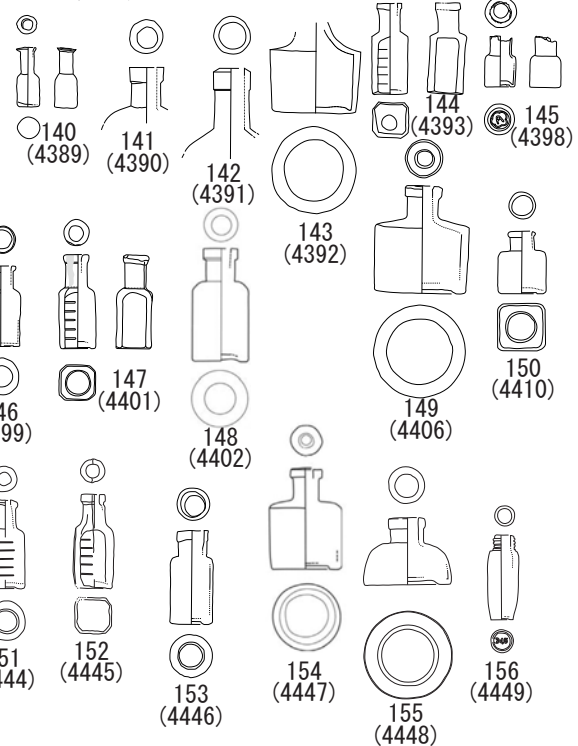
延岡城下町遺跡
第8次



大久保
第2遺跡

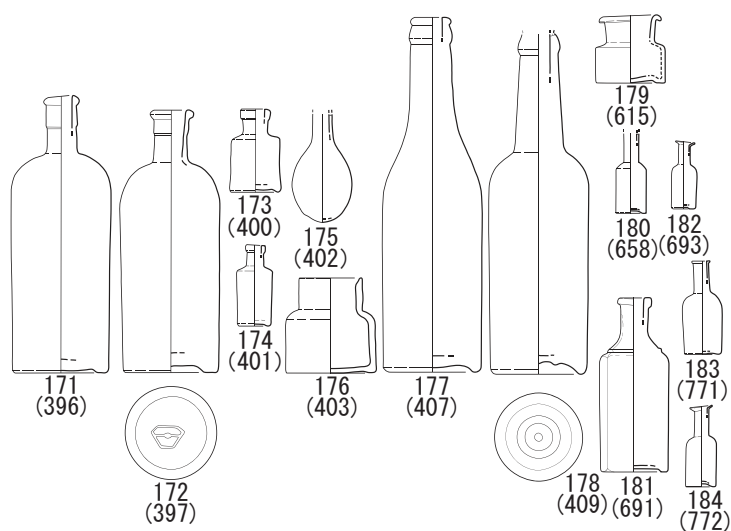
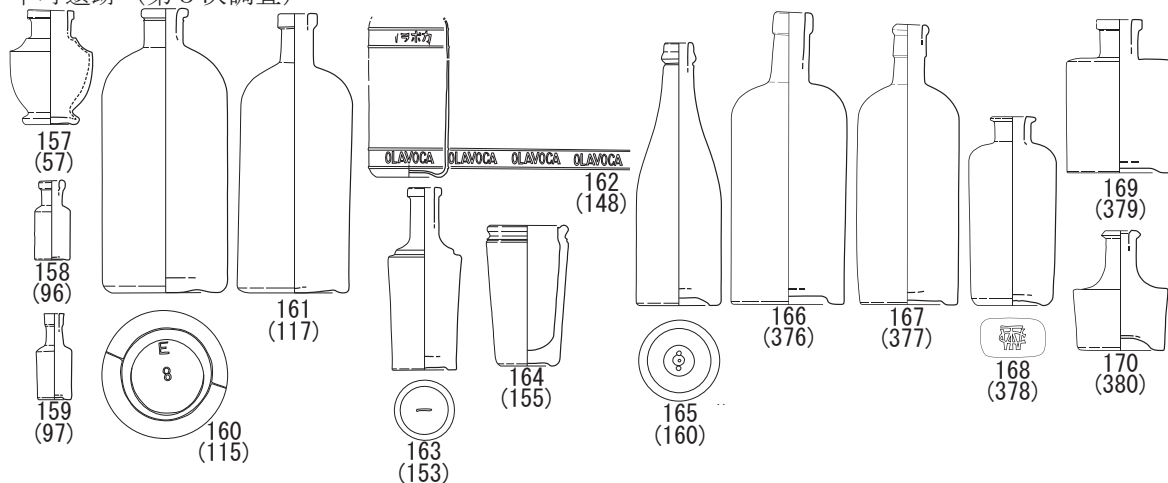


宮ノ東遺跡

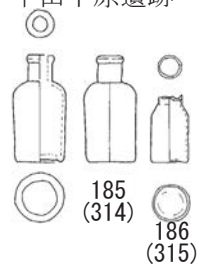


0 10cm
S=1:5

中町遺跡 (第5次調査)



平山下原遺跡

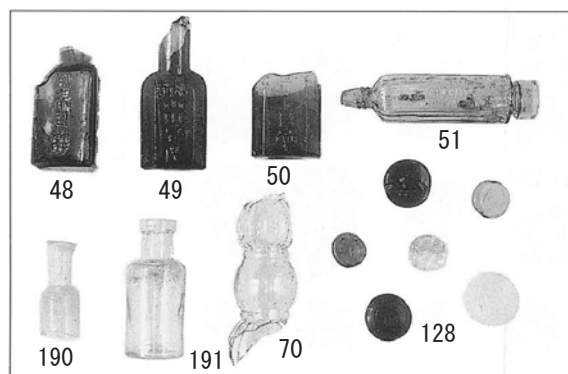


IV不明 ②栓

中町遺跡第5次調査



0 10cm
S=1:5



高岡麓遺跡



別府町遺跡

地域の埋蔵文化財を活用した学習指導の在り方 ～小・中学校と連携した現地説明会と出前授業の実践を通して～

平井 祥蔵・伊東 浩二
（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

本センターでは、発掘調査期間中に現地説明会を行い、周辺地域へのアウトリーチ活動を行っている。本年度の発掘調査においても現地説明会を実施し、出土した遺物や遺構の解説等を通して、地域の埋蔵文化財について理解を深める活動を行った。また、発掘調査時に地域の方等が見学されている際には、積極的に声をかけて遺跡の説明を行うなど、地域との関りを意識しながら発掘調査を行っている。

現地説明会の参加者や見学者の感想の多くは、自分の住む地域に遺跡があることへの驚きがほとんどである。また、実際に発掘現場を見学し、遺物などに直接触れることで、埋蔵文化財に対する理解が深まり、地域の歴史を知るよい機会となっている。これら発掘調査における地域との交流は、埋蔵文化財の普及活動はもとより、地域に住む児童・生徒の「学習の場」として捉えることもできる。

新学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）では、地域の人的・物的資源の活用や、社会教育との連携の必要性が説かれ、さらに小学校学習指導要領「指導計画の作成と内容の取扱い」のなかでは、身近な地域の遺跡や文化財の調査活動など、その内容に関わる専門家や関係の諸機関との連携の必要性が明記されている。このような新学習指導要領の示す「関係機関との連携」において、本センターのもつ役割は重要である。また、本センターは、埋蔵文化財に関する専門的な知識や技能を学んだ小・中学校の教員が多く在籍しているため、児童・生徒の発達段階や、各教科の指導内容に即した授業を展開することができると考える。

そこで、本年度発掘調査を行った 2 つの遺跡において、当該地域の学校を対象とした現地説明会や、出前授業の実践をもとに、埋蔵文化財の活用法とその教育的役割を検証し、本センターと学校の連携の在り方について考察していきたい。

2 新学習指導要領が示す「社会に開かれた教育課程」

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、教育課程の実施にあたっては、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図るなど、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが重要であると示されている。また、「小学校学習指導要領 第 3 指導計と内容の取扱い」では、

第 3 指導計画と内容の取扱い

（3）博物館や資料館など施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの調査活動を入れること。また、内容に関わる専門家や関係者、関係機関との連携を図ること。

遺跡や文化財の調査活動を関係機関と連携して行うことが示されている。

3 新学習指導要領における埋蔵文化財と関連した項目

埋蔵文化財を活用した学習内容は、小・中学校社会科「歴史分野」における「狩猟・採集や農耕の生活」が主として考えられるが、遺跡の立地や環境、地質や地層、食文化など様々な観点で

教科等	学年	小学校学習指導要領における埋蔵文化財と関連する内容や項目
社会科	第3学年	＜身近な地域や自分たちの市の様子＞ ○身近な地域や自分たちの市の様子を大まかに理解すること。 ○古くから残る建造物の分布などに着目して、身近な地域や市の様子を捉える。 ＜市の様子の移り変わり＞ ○生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現する。
	第4学年	＜地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働き＞ ○県内の文化財や年中行事は地域の人々の願いが込められ受け継がれていることを理解できるようにする。 ＜地域社会の一員としての自覚を養う＞ ○伝統や文化の保護・継承を実現していくために共に努力し、協力しようとする意識などを養う。
	第6学年	＜大まかな歴史を理解するとともに、優れた文化遺産を理解すること＞ ○狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の様子を手掛かりに、むらからくにへと変化したことを理解すること。 ○神話・伝承を手掛かりに、国の形成に関する考え方などに関心をもつこと。 ○遺跡や文化財、地図や年表などの資料で調べ、まとめること。 ○世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上の主な事象を捉え、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え、表現する。
理科	第6学年	B 生命・地球 ＜土地のつくりと変化＞ ○土地は、礫、砂、泥、火山灰などからできており、層をつくって広がっているものがある。 ○地層は、流れる水の動きや火山の噴火によってできること。 ○土地は、火山の噴火や地震によって変化すること。
家庭	第5学年 第6学年	B 衣食住の生活 ＜栄養を考えた食事＞ ○健康・快適・安全で豊かな食生活、衣生活、住生活に向けて考え、工夫する活動 ○体に必要な栄養素の種類と主な働きについて理解する。
総合的な学習の時間		地域には、豊かな体験活動や知識を提供する公民館、図書館や博物館などの社会教育施設や、その地域の自然や社会に関する詳細な情報を有している企業や事務所、社会教育団体や非営利団体等の各種団体がある。また、遺跡や神社・仏閣などの文化財、伝統的な行事や産業なども地域の特色をつくっている。この時間が豊かな学習活動として展開されるためには、学習の必然性に配慮しつつ、こういった施設の利用を促進し、地域に特有な知識や情報と出合わせる工夫が求められる。 【横断的・総合的な課題】・科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化 【地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題】・地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々 【児童の興味・関心に基づく課題】・実社会で働く人々の姿と自己の将来（キャリア）・ものづくりの面白さや工夫と生活の発展（ものづくり）

教科等	学年	中学校学習指導要領における埋蔵文化財と関連する内容や項目
社会科	地理的分野	<人間と自然環境との相互依存関係> ○人間の生活と自然環境との密接な関わり（人々の生活は、自然からの制約を受けることで、それに対応して伝統的な生活様式を確立し、それに対応して生活に関わる技術を発展させてきた） ○地域的特色を理解し、地域の環境開発や環境保全を考える。 <「地域」について> ○人々の生活と自然環境がどのように関わり、他地域とどのように結び付き、それらの関係がどのように変容しながら、現在の地域が形成されたのかを考察する。
	歴史的分野	<身近な地域の歴史> ○自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、地域の歴史を調べたり、情報を年表などにまとめたりする。 ○地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現する。 <古代までの日本> ○我が国の古代までの特色を、世界の動きとの関連を踏まえて課題を追及したり解決したりする活動。 ○日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰。 ○新たな遺跡の発掘の成果や具体的な遺物の発見による「考古学などの成果」とともに「古事記、日本書紀、風土記などにまとめられた神話・伝承など」の学習。
理科	第2分野	<大地の成り立ちと変化> ○身近な地形や地層、岩石などの観察を通して、土地の成り立ちや広がり、構成物などについて理解する。 ○地層の様子やその構成物などから地層のでき方を考察し、重なり方や広がり方についての規則性を見いだして理解するとともに、地層とその化石を手掛かりとして過去の環境と地質年代を推定できることを理解する。 ○火山の形、活動の様子及びその噴出物を調べ、それらを地下マグマの性質と関連付けて理解するとともに、火山岩と深成岩の観察を行い、それらの組織の違いを成因と関連付けて理解すること。
技術・家庭科	技術分野	< A 材料と加工の技術> ○技術に込められた問題解決の工夫について考えること。（緻密なものづくりの技が、我が国の伝統や、木の文化・和の文化を支えてきたことに気付かせる）
	家庭分野	B 衣食住の生活<食事の役割と中学生の栄養の特徴> ○中学生に必要な栄養の特徴が分かり、健康によい食生活について理解すること。
総合的な学習の時間		地域には、豊かな体験活動や知識を提供する公民館、図書館や博物館などの社会教育施設や、その地域の自然や社会に関する詳細な情報を有している企業や事務所、社会教育団体や非営利団体等の各種団体がある。また、遺跡や神社・仏閣などの文化財、伝統的な行事や産業なども地域の特色をつくっている。この時間が豊かな学習活動として展開されるためには、学習の必然性に配慮しつつ、こういった施設の利用を促進し、地域に特有な知識や情報と出会わせる工夫が求められる。 【目標を実現するにふさわしい探求課題】・「現代的な諸問題に対応する横断的・総合的な課題」・「地域や学校の特色に応じた課題」・「生徒の興味・関心に基づく課題」・「職業や自己の将来に関する課題」

題材にすることで社会科に限らず、教科等横断的な学習として幅広く活用できる。ここでは、新学習指導要領における埋蔵文化財と関連する項目や内容等についてまとめる。

4 教科書等における埋蔵文化財と関連した項目

埋蔵文化財を活用する主な教科としては、小学校6年社会、中学校社会科（歴史分野）、小・中学校理科となる。また、小学校4年社会科の郷土学習副読本「住みよい郷土のくらし」（宮崎県教育委員会発行）には、宮崎県内の文化財についての内容が記載されている。そこで、各教科書等に記載されている埋蔵文化財に関連する主な語句や、イラスト等を一覧表化した。

学年・教科等	記載されている語句	掲載されている写真・イラスト等
小学校社会科 6年	縄文時代	縄文時代の暮らしの様子（イラスト）
	縄文土器	・縄文土器づくり。石器づくり。縄文土器による煮炊き。
	竪穴住居	・石皿、磨石を使用したどんぐり等の磨り潰し。
	掘立柱建物	・弓による狩猟。漁網、釣り針による漁猟。
		・木の実などの採取。獣皮や魚の加工。
		・石斧による木船の製作。食べ物の貯蔵。（貯蔵穴）
		石器（石鏃、石斧、釣り針、石匙）
		当時の食事内容（肉、魚、木の実、貝等）
	弥生時代	弥生時代の暮らしの様子（イラスト）
	弥生土器	・弥生土器づくり。弥生土器による煮炊き。
中学校社会科 歴史分野	高床倉庫	・米作り（石包丁を使った収穫、水路づくり）
	石包丁	・米の脱穀。米の貯蔵。（高床倉庫）
	田げた	・編み物。区切り溝。柵列。
	くわ（木製）	当時の食事内容（米、貝、魚、野菜、酒等）
	むらから国へ	争いのようす
	吉野ヶ里遺跡、豪族、邪馬台国、卑弥呼、銅鐸	
	古墳時代	古墳づくりのようす
	古墳（円墳、方墳、前方後円墳）大仙古墳	
	旧石器時代	人類の進化、人類の広がり
	打製石器、磨製石器、港川人	尖頭器
中学校社会科 歴史分野	縄文時代	大陸と陸続きのころの日本列島
	縄文土器	縄文時代の暮らしの様子（イラスト）
	磨製石器	・縄文土器づくり。石器づくり。縄文土器による煮炊き。
	竪穴住居	・弓による狩猟。釣り針による漁猟。貝塚。
	土偶	・木の実などの採取。獣皮や魚の加工。釣り針。
		当時の食事内容（米、貝、魚、野菜、酒等）
	弥生時代	弥生時代の暮らしの様子（イラスト）
	弥生土器（壺、甕）	・米作り（石包丁を使った収穫、水路の建築）
	高床倉庫、稲作、銅鐸、銅剣	・米の脱穀。米の貯蔵。（高床倉庫）
	邪馬台国、卑弥呼、金印、魏志の倭人伝	
中学校社会科 歴史分野	古墳時代	前方後円墳のしくみ
	古墳（前方後円墳）大山古墳	
	埴輪、鉄剣、鉄刀、鉄製のよろい	

学年・教科等	記載されている語句	掲載されている写真・イラスト等
小学理科6年	大地のつくりと変化 地層 れき岩、砂岩、でい岩 火山灰、化石 火山や地震と大地の変化 マグマ、よう岩、断層	地層の様子 地層のでき方 火山灰の特ちょう チバニアン（77万～12万6千年前の地層） 火山の様子
中学校理科	地層 大地がもち上がる隆起、大地が沈む沈降 大地が波打つように曲がるしゅう曲 大地が割れてずれ動く断層 地層や岩石などが地表に現れている露頭 火山噴出物（溶岩、火山弾、火山れき、火山灰） マグマ、マグマだまり マグマが冷えると鉱物とよばれる一定の形や色などをした結晶がではじめる。 鉱物の種類 有色鉱物（カンラン石、キ石、カクセン石、クロウンモ） 白色・無色の鉱物（チョウ石、セキエイ） その他の有色の鉱物（磁鉄鉱） 火山ガラス マグマが冷え固まってできた岩石を火成岩 斑晶、石基 火成岩は斑状組織の火山岩と等粒状組織の深成岩に大別される。 火山岩（玄武岩、安山岩、流紋岩） 深成岩（斑れい岩、せん緑岩、花こう岩） 石基ばかりの火山岩でつくられた石器（黒曜石、サヌカイト） 堆積岩（れき岩、砂岩、泥岩、凝灰岩、石灰岩、チャート） チバニアン 鍵層、海岸段丘	沈降、しゅう曲、断層、露頭の写真 地域の大地の観察 岩石などの採取（岩石を割る方法の説明） 地域の大地の観察 溶岩、火山弾、火山れき、火山灰、軽石の写真 鉱物（カンラン石、キ石、カクセン石、クロウンモ、チョウ石、セキエイ、磁鉄鉱）の写真 火山灰の観察 顕微鏡で拡大した火山灰の写真 火砕流の様子 マグマの性質と火山の形の関係 火山の様子 火成岩の観察 火成岩（玄武岩、安山岩、流紋岩、斑れい岩、せん緑岩、花こう岩）の写真 火山岩（黒曜石、サヌカイト）の写真【社会科と関連】 地層の様子、地層のでき方 堆積岩（れき岩、砂岩、泥岩、凝灰岩、石灰岩、チャート）の写真 堆積岩の観察 地層の観察 チバニアンの写真 海岸段丘の写真

学年・教科等	掲載されている写真・イラスト等	郷土のできごと（年表）
小学校4年 社会科副読本 「住みよい郷土の暮らし」	旧石器時代	日之影町出羽の洞窟に、人が住んでいた。
	堂地西遺跡出土の尖頭器	
	出羽洞穴（旧石器時代のほら穴）	延岡市大貫貝塚や、宮崎市の柏田や跡江貝塚などから、
	縄文時代	およそ7000年前の土器がほり出された。
	縄文土器（宮崎市、野尻町、串間市、西都市、高千穂町）	日之影町大溜や日向市岩脇、綾町尾立などから5000年前の土器がほり出された。
	平畑遺跡（縄文時代の住居跡）	
	弥生時代	郷土のあちこちで、そのころの人が使った石器や土器がほり出されている。（縄文土器）
	前原北遺跡出土の弥生土器（つぼ、かめ）	
	七又木遺跡（花びら型の竪穴住居）	
	古墳時代	宮崎市憶中学校のところから、およそ2000年前の家のあとや、土器などがほり出された。（弥生土器）
	持田1号墳（全景）	
	よろい・かぶと（古墳時代）	
	平安時代	
	大島畠田遺跡（南九州最大級の建物跡）	
	前原南遺跡（平安時代のかめや坏）	
	大島畠田遺跡（建物等を復元したイラスト）	

5 説明会及び出前授業の実施について

今年度発掘調査を行った2つの遺跡（A・B遺跡）において、遺跡の近隣に所在する小・中学校の児童生徒を対象とした現地説明会を行った。現地説明会については、社会科を中心とした理科、総合的な学習の時間との教科等横断的な学習の場として位置づけ、学習内容を設定した。実施に際しては、遺跡の説明だけに留まらず、「自らが考える場」の設定や、模擬石器による切削体験などの体験的な活動を取り入れた。また、現地説明会は、調査の進捗状況等により限られた期間に実施するため、該当学校との日程調整や、学校と遺跡との距離的な問題から、現地説明会への参加が困難な場合は、センター職員（遺跡の担当職員）が学校へ赴いて出前授業を行い、地域の遺跡の紹介や、埋蔵文化財を活用した社会科、「総合的な学習の時間」の授業を行った。

社会科の学習内容については、実物に直接触れること、視点をもって観察すること、自己の考えをもとに協働する場面を設けることを活動の中心に捉え、対象学年の履修状況や発達段階に応じて学習目標を設定した。

「総合的な学習の時間」については、探究的な見方・考え方を養う題材として、地域の遺跡の発掘調査を通して「なぜここに遺跡があることが分かるのか」を遺跡周辺の地形や埋蔵文化財包蔵地名表等の資料から読み取らせ、「開発と保全」の視点から「持続可能な社会」について考察する学習内容を設定した。

6 現地説明会

（1）現地説明会の目標

○身近な地域の遺跡について学び、埋蔵文化財への興味を高める。

○建物跡などの遺跡、土器、石器などの遺物が残されていることを知り、当時の生活の様子を想像することができる。

（２）現地説明会の学習内容（Ａ 遺跡近隣学校 小学３年生～中学１年生）

主な学習活動と学習内容	指導上の留意点 【】は関連教科等	準備物
１ 遺跡周辺の地形と地層について ２ 出土遺物の説明 （１）縄文土器片 （２）石鏃 （３）石錘 （４）スクレーパー等 ３ 模擬石器を使った体験学習	○ なぜ、ここに遺跡があるのか遺跡周辺の環境をもとに考えさせる。【総合的な学習の時間】 ○ 地層を見せて、遺跡周辺の地形をもとに地層の成り立ちを考えさせる。【小学６年 理科】 ○ 出土した遺物に触れることで、文様や質感などを感じさせる。 ○ 石鏃に直接触れて観察し、加工の細かさに気づかせる。 石鏃に使われる石材（黒曜石等）は、熊本県や大分県などが主な産地であり、遠方から持ち込まれたことを伝える。 ○ 石錘を見せて、何に使う道具か考えさせる。 近くに川があることに気づかせ、網を使って魚を捕っていたことを伝える。 ○ 模擬石器を使って段ボールを切らせて、当時の生活を体験させる。【総合的な学習の時間】	・ 地層の説明資料 ・ 各遺物の説明パネル ・ 出土遺物 ・ 模擬石器 ・ 段ボール



【写真１】 発掘の様子を観察



【写真２】 遺物の観察



【写真３】 遺物の観察



【写真４】 模擬石器の切削体験

(3) 現地説明会の学習内容 (B 遺跡近隣学校 小学6年生)

主な学習活動と学習内容	指導上の留意点 【】は関連教科等	準備物
1 地層と出土遺物について	○ 遺跡の地層を見せて、火山灰を手がかりに各時代を推測する。【小学6年 理科】 アカホヤ火山灰（約7,300年前降灰）が南九州に及ぼした影響を伝える。	・ 地層の説明資料 ・ 火山灰の説明パネル
2 遺構の説明	○ 出土した遺物に触れることで、文様や質感などを感じさせる。 ○ 各遺構について、イラストによる説明パネルを準備し、当時の様子を想像しやすくする。 ○ どうすれば遺構を見つけられるのかを考えさせる。 地面の色・質感の違い（シミ等）を手掛かりに遺構を見つける。	・ 出土遺物 ・ 各遺構の説明パネル
(1) 小穴跡(掘建柱建物跡含む)	○ 子穴に模擬柱を立てて、掘建柱建物跡と推測される穴を探させる。	・ 模擬柱
(2) 土坑		
(3) 火どころ		
(4) 竪穴建物跡	○ 子穴に模擬柱を立てて、掘建柱建物跡と推測される穴を探させる。	・ 模擬柱
(5) 溝状遺構(区切り溝含む)	たくさんある小穴から、直線状に等間隔で並ぶ小穴を見つける活動。 ○ 竪穴建物跡は、実際に中に入ること、穴の深さや床面の硬さなどを感じさせる。 ○ 竪穴建物跡について、なぜ穴を掘って建てるのかを考えさせる。 遮熱対策、防寒対策、部材（外壁等）を少なくするなど、住みやすくするために、様々な知恵を使っていたことに気付く。	・ 竪穴建物跡出土遺物 ・ 模擬石器 ・ 段ボール
3 模擬石器を使った体験学習	○ 模擬石器を使って段ボールを切らせて、当時の生活を体験させる。 【総合的な学習の時間】	



【写真5】 地層の観察



【写真6】 模擬柱を立てる活動

7 出前授業

社会科学習指導案 小学校3年生

(1) 題材名「昔の道具」

(2) 目標

- 住んでいる地域の遺跡について理解する。
- 昔の人々が生活する上で、どのような道具を作り、活用したのか自分の言葉で説明できる。

(3) 指導過程（B 遺跡） ※現地説明会に参加していない児童・生徒。

段階	主な学習活動と学習内容	指導上の留意点	準備物
導入 7分	私たちの住む町にある遺跡は、どのような遺跡だったのだろう	○遺跡を紹介する動画を視聴しながら、各遺構について説明する。 ○説明の際には、遺構の説明イラストを掲示する。	・プロジェクト ・遺跡紹介動画 ・遺構の説明イラスト
展開 30分	昔の人は、どんな道具をどのように使っていただろう 1 もし、無人島に行き、道具を1つだけ持っていけるとすれば、どんな道具を持っていくか考える。【個人への質問】 2 昔（縄文時代）はどのような道具があったのか考える。 ・縄文土器を提示し、その用途を考える。 ・石鏃、石斧、石匙を各班に配り、観察しながらその用途について個人で考える。 ・個人の考えをもとに、班で話し合い、班の意見をまとめる。 ―― 【主体的・対話的な深い学び】 ―― 3 道具の用途について、班の意見を発表する。 4 それぞれの用途について、使用例を見せながら解説し、どのような道具なのかを学ぶ。	○無人島で土器、石窯、船などを作っている様子を紹介することで、無人島での生活を連想させ、道具の必要性を感じさせる。 ○土器は、器としてだけではなく、煮炊きの道具としても使われていたことを理解させる。 ○それぞれの遺物の刃部（歯）に注目させることで思考力を高める。 ○各班の意見を解答用紙に記入し、黒板に提示する。	・ワークシート ・石鏃 ・石斧 ・石匙 ・班の解答用紙 ・石斧レプリカ
週末 8分	5 まとめを行う。 ・昔の人は、いろんな道具を作り、生活を送っていた。 ・道具は、形を変えながら私たちの生活を便利にしている。 6 展示している遺物を鑑賞する。	○石斧→斧→チェーンソーなどのように道具が時代とともに、より便利に変化していることを理解させる。 ○その他の道具や、地域で出土した遺物について紹介する。	展示物 ・地域の遺跡で出土した遺物 ・石錘 ・石皿 ・磨石

社会科学学習指導案 小学校6年生 中学校1年生

(1) 題材名「縄文時代の暮らし」

(2) 目標

○ 埋蔵文化財センターの果たしている役割を理解することができる。

○ 発掘調査の成果をもとに、縄文時代の人々が道具に施した技術からその用途を考え、縄文時代が1万年以上続いた理由について自分の言葉で説明できる。

(3) 指導過程 (A 遺跡) ※現地説明会に参加していない児童・生徒。

段階	主な学習活動と学習内容	指導上の留意点	準備物
導入 7分	1 埋蔵文化財センターの役割について考える。 <u>なぜ、この調査をしたのだろうか</u> ・ 工事により、遺跡がなくなるから。 ・ 調べたことや分かったことまとめ、未来に残すため。 ・ 過去を学び、未来を考えるため。	○ 今回調査した地域の遺跡について紹介する。 ○ 工事等の影響により、遺跡が壊れてしまう場合には、発掘調査を行い、記録保存することを伝える。	・ プロジェクタ ・ 遺跡の写真
展開 30分	<u>なぜ縄文時代は1万年以上も続いたのか？</u> 2 自分の住む町が縄文時代の頃、どのような道具があったのか考える。 「縄文土器、石鏃、石錘、石匙を各班に配り、観察しながらその用途について個人で考える。 ・ 個人の考えをもとに、班で話し合い、班の意見をまとめる。 【主体的・対話的な深い学び】 3 道具の用途について、班の意見を発表する。 4 それぞれの用途について、使用例を見せながら解説し、どのような道具なのかを学ぶ。	○ 石匙については、遺跡が川に近いことや、刃部（歯）に注目させることで思考力を高める。 ○ 班で協力して答えを導き出せるような声かけを行う。	・ ワークシート ・ 縄文土器 ・ 石鏃 ・ 石錘 ・ 石匙
週末 8分	5 まとめを行う。 <u>・ 調査によって分かった過去を学ぶことで、未来を考えることができる。</u> ・ 縄文人は、さまざまな道具を開発し、次に伝えていくことで厳しい環境を生き抜くことができたので、1万年以上続いた。 6 展示している遺物を鑑賞する。	○ その他の道具や、地域で出土した遺物について紹介する。	展示物 ・ 地域の遺跡で出土した遺物 ・ 石錘 ・ 石皿 ・ 磨石

「総合的な学習の時間」学習指導案 小学校6年生

（１）題材名「開発と保全」

（２）目標

○埋蔵文化財センターの果たしている役割を理解することができる。

○発掘調査の成果をもとに、自分が住む町に多くの遺跡が存在することを理解し、開発と保護の

バランスを取りながら、未来につないでいくことについて考察することができる。

（３）指導過程（B 遺跡） ※事前に現地説明会で地域の遺跡について学習済み。

段階	主な学習活動と学習内容	指導上の留意点	準備物
導入 7分	1 住んでいる町の地図を見て、遺跡の場所を確認する。（調査面積約 500 m²） 2 住んでいる町の面積約 60 km²に対して、0.5 km²の B 遺跡についての学習問題をつくる。 なぜ、ここに遺跡が存在することが分かるのか？		・地域の地図
展開 30分	3 遺跡がそこにあることがなぜ分かるのか、その理由を考える。 4 個人へ資料を配布し、遺跡がそこにあることがなぜ分かるのか、その理由を考える。 「資料をみて、なぜ遺跡が存在することが分かるのか「持続可能な社会」をキーワードに個人で考える。 ・個人の考えをもとに、班で話し合い、班の意見をまとめ発表する。 ―――【主体的・対話的な深い学び】―――	【予想される反応】 ・なんとなく分かる。 ・工事を進めているうちに出てくる。 ○遺跡周辺の地図や埋蔵文化財包蔵地名表などの資料を配布し、読み取らせながら、理由を考えさせる。	・ワークシート ・文化財保護法 ・遺跡調査資料 ・埋蔵文化財包蔵地名表
週末 8分	5 まとめを行う。 ・過去の調査などをもとに、遺跡がある場所を先に地図にしているから。発掘調査は開発にあわせて進めている。 6 開発と保全のバランスを考える。	○開発か保全かを検討している地域の例を挙げる。	・開発か保全か



【写真7】 遺物の観察



【写真8】 道具の用途を考える



【写真9】 グループ活動



【写真10】 遺物の展示

8 アンケート分析

現地説明会を受けての感想	学習指導要領〈〉、学習目標「」との関わり
・自分の住んでいる町に遺跡があることに驚いた。(多数) ・私たちににとって自慢できる町になると思った。 ・今、自分が住んでいるところにも昔の人が住んでいて安心した。 ・昔に比べると、今は住みやすい町になっている。	＜身近な地域や自分たちの市の様子＞ ＜市の様子の移り変わり＞ ＜科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化＞
・「身近な地域の遺跡について学び、埋蔵文化への興味を高める。」 ・今でも遺跡が残っていることがすごいと感じた。(多数) ・大変な思いをしながら、いっぱい考えていた。 ・昔の人は頭が良かった。いろんな工夫をしていた。 ・本当に竪穴建物があつたんだと思いました。	＜身近な地域の歴史＞ ＜古代までの日本＞ ＜人間と自然環境との相互依存関係＞ 「建物跡などの遺跡、土器、石器などの遺物が残されていることを知り、当時の生活の様子を像することができる。」
・地層がこんなにはっきり分かるものだと知り驚いた。 ・土が層になっていて時代が違うことが見て分かった。 ・石で段ボールが切れるとは思わなかった。(多数) ・僕は、社会が好きで歴史を学ぶことができてとても良かったです。 ・昔の歴史について、知ることが大好きなのでとても良い経験でした。	＜土地のつくりと変化＞ ＜大地の成り立ちと変化＞ ＜ものづくりの面白さや工夫と生活の発展＞ ＜実社会で働く人々の姿と自己の将来＞

出前授業を受けての感想 小学3年生（社会科）	学習指導要領〈〉、学習目標「」との関わり
・自分が住んでいる町に遺跡があったなんて思わなかった。 ・自分の住んでいる町に遺跡があることが心に残りました。 ・家の窓から見える所で、遺跡があったことに、とてもびっくりしました。	<身近な地域や自分たちの市の様子> 「住んでいる地域の遺跡について理解する。」
・実際に見ること、触ることができてうれしかった。きれいだっただ。 ・いろんな道具があって、実際見たらすごいなと思った。	※実物に触れることによる興味・関心の高まり
・昔の道具は、すごく考えて作っていると思った。 ・昔の人は、頭がいいと思った。 ・昔の人は石を使って暮らしていたと思うと不思議。 ・昔の道具は、今の道具より不便だと思った。 ・どんどん道具が進化するのがすごいと思った。 ・道具が変わっていくことが印象に残った。 ・昔の道具を作って、使ってみたいと思った。 ・道具がきれいに残っていることに驚いた。 ・昔の人の暮らしが分かって、とてもいい経験、勉強になった。	<市の様子の移り変わり> 生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現する。 「昔の人々が生活する上で、どのような道具作り、活用したのか自分の言葉で説明できる。」
・遺跡のことをもっと知りたいと思いました。 ・私も発掘の仕事をしてみたいと思った。	<実社会で働く人々の姿と自己の将来>
出前授業を受けての感想 小学6年生・中学1年生（社会科）	学習指導要領〈〉、学習目標「」との関わり
・実物を使っていて、分かりやすかったです。（多数） ・昔の人が触っていたんだと考えるとワクワクした。 ・触ってみて、いろんな感触があったので、面白かったです。 ・初めて土器に触ったので、すごい体験ができました。 ・道具を初めて触ったので、「こんな形をしているんだ」と思いました。 ・クイズみたいにして、道具に触ったりしたから、より観察できたとし、楽しかった。 ・1万年以上前のものが今も残っているのがすごい。それに触れて嬉しかった。（多数）	※実物に触れることによる興味・関心の高まり ※実物に触れることによる気づき
・普通の石が、少しの工夫で道具になっていることに驚いた。 ・縄文人が、矢じりなどを作る技術があることにびっくりした。 ・縄文人は、漁網に重りを付けたことから、発想力があると思った。 ・昔の人は頭で考え、知恵を使ってすごいなと思った。 ・どんな時代のどんな場所でも道具があれば、何も持っていない生活よりも便利な暮らしになることを改めて知りました。 ・縄文時代が、道具によって1万年以上続いているのにびっくりしました。 ・昔の人も、今の人と同じように、生きるために、いろんな道具を使っているんだなと思った。 ・もっとどんなもの（遺物）があるのか気になりました。	<狩猟・採集や農耕の生活> 貝塚や集落跡などの遺跡、土器などの遺物や、水田跡の遺跡や農具などの当時の遺物が残されていること、日本列島では長い期間、豊かな自然の中で狩猟や採集の生活が営まれていたことが分かる。 「発掘調査の成果をもとに、縄文時代の人々が道具に施した技術からその用途を考え、縄文時代が1万年続いた理由について自分の言葉で説明できる。」

出前授業を受けての感想 小学6年生(総合的な学習の時間)	学習指導要領〈〉、学習目標「」との関わり
・住んでいる町には遺跡が多いことや、開発が進んでも遺跡が残されることがあることが分かった。 ・開発と保全が遺跡に関係していることが分かった。開発と保全の両立が大切だと改めて感じた。 ・開発をすると人にいいことはあるけど、昔のものを壊すことはよくないと思った。 ・自然を大切に作る。リサイクルなどをする。SDGsを守る。 ・遺物を大切に保管すること。 ・あまり耳にしない法律を知れたのでとてもよかった。 ・僕は保全を大切にしたい方いいと思いました。 ・みんなが持続可能な社会をつくるために、目標に向けて努力することが大切。 ・「持続可能な社会」をつくることは、未来をつくることになるから、昔のことを今大事にすることが大切。 ・どのように開発・保全していくかを考えて、実行すること。 ・後の人たちへとつないでいく自分たちの意思が大切だと思う。	＜より良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する＞ 「発掘調査の成果をもとに、自分が住む町に多くの遺跡が存在することを理解し、開発と保護のバランスを取りながら、未来につないでいくことについて考察することができる。」

9 考察

(1) 埋蔵文化財の活用法とその教育的役割について

現地説明会及び出前授業は、遺構や遺物に直接触れることを活動の中心にしている。児童生徒にとって遺構や遺物は、教科書等の書籍や博物館等で見る機会はあるが、実物を見て触れる機会は初めての経験であると考えられ、事後アンケートからは、驚きや感動とともに興味・関心の高まりを見ることができた。

実物に触れることで気付くことも多く、石鏃（矢じり）の観察では、細部にまで施された加工痕を見て、当時の技術力を感じ取っていた。また、遺物の質感や遺構の大きさなど様々な体験をもとに学習することで、当時の生活の様子をより豊かに想像する様子が伺えた。

興味・関心の高まりは、「遺跡のことをもっと知りたい」、「私も発掘の仕事をしてみたい」などといったより深い学びの場につながり、キャリア教育の一環としても捉えられる。

このように実物に直接触れる体験的な学習は、児童生徒が学習意欲を高め、主体的な活動を促す有効な手立てであり、実物を活用した体験学習は、探求的な学習へと繋がり、「確かな学力」を育成できると考える。

(2) 本センターと学校との連携の在り方について

現地説明会及び出前授業は、単に「身近な遺跡の紹介」を目的とせず、学習指導要領における「関係機関との連携」に基づいた取組であり、教員（本センター職員）が関係機関の専門家の立場として、教育課程上の教科学習を行うことを目的としている。よって、学習目標は、教科の単元目標と関連づけ設定している。また、出前授業においては、埋蔵文化財を活用した「主体的・対話的な深い学び」の視点に立った授業を構築した。以下に現地説明会と出前授業における学習効果について、アンケートと指導案をもとに分析を行った。

〈現地説明会〉

- 遺跡等は、資料集や博物館で見る遠く離れた特別な場所という認識がほとんどであり、現地説明会に参加した児童・生徒の反応の多くは、自分の住む地域に遺跡が存在することへの驚きであった。現地説明会を通して自分の住む地域に対する理解を深め、地域社会に対する誇りと愛情を養う学習効果が期待できる。
- 現地において、付近を流れる河川等の立地環境に気付き、生活の痕跡や土器、石器等の遺物を実際に観察することで、人間の生活と自然環境との密接な関わりについて学ぶことができる。
- 堅穴住居跡の床面に立ち、その深さや広さを体感しながら「なぜ堅穴を掘ったのか」など、深く考える場面設定や模擬石器の切削体験等を通して、当時の生活の様子を想像させ、変化していく暮らしの様子を理解することができる。
- 現地説明会で見ることのできる遺構のほとんどは、地面を掘った穴の跡であり、そこに模擬柱等を立て、想像図（イラスト等）を活用することで、教科書等に載っている堅穴住居や掘立柱建物等とのイメージの一致を図ることができ、社会科の該当単元学習の一助となる。
- 発掘現場の地層観察、火山灰の降灰の様子、出土した石器の材質調べなどを通した小・中学校「理科」の学習や、当時の道具や自然環境から推測される食文化の変化など教科等横断的な学習の場として活用できる。

〈出前授業 「小学校3学年社会」、「小学校6学年、中学校1学年社会科」〉

- 小学校3学年を対象とした社会科の授業は、「昔の道具」を題材名とし、縄文時代における生活の道具を観察しながら、時間の経過に伴い変化していく道具について学習した。これは、3学年の学習内容である「身近な地域や自分たちの市の様子を大まかに理解すること」、「生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること」に関連した学習内容である。児童にとって縄文時代に関する学習は初めてであるため、地域の遺跡の紹介をもとに当時の様子を想像させ、自然の中にある様々なものを活用しながら生活している縄文人の姿を学習した。授業を通して児童は、地域の遺跡について理解を深め、人間生活における道具の必要性を感じとりながら、道具が時代とともに変化していく様子を理解した。
- 小学校6学年、中学校1学年を対象とした社会科の授業は、「縄文時代の暮らし」を題材名とし、縄文時代の道具に着目し、1万年以上続いた縄文時代について学習した。児童・生徒は、縄文時代の学習はすでに履修済みであり、当時の生活の様子を教科書のイラスト等で学んでいる。

今回の授業は、「狩猟・採集や農耕の生活」における「貝塚や集落跡などの遺跡、土器などの遺物や、水田跡の遺跡や農具などの当時の遺物が残されていること」、「日本列島では長い期間、豊かな自然の中で狩猟や採集の生活が営まれていたこと」に関連した学習内容である。

児童・生徒は、地域の遺跡の紹介や、出土した遺物に直接触れることで、縄文時代の遺構や遺物が現在も残っていることを知り、当時の人々が様々な道具を生み出しながら、厳しい生活環境の中で1万年以上続いた縄文時代の生活について理解を深めた。

- 2つの授業は縄文時代の道具（石器）に直接触れながら、その用途について考えることを活動の中心としており、個人の考えをもとにグループ活動を取り入れることで、互いの意見や考えを伝え合う「対話的な学び」の場を設定している。道具（石器）の観察では、興味・関心や思考力の高まりが見られ、直接触れながら細部まで観察することで、縄文人の技術力や、知恵などそれぞれの視点での気づきがあった。

〈出前授業 「小学校6学年総合的な学習の時間」〉

○ 総合的な学習の時間については、「開発と保全」を題材名とし、埋蔵文化財センターの役割を理解し、開発と保全のバランスを考える持続可能な社会づくりに、児童自身がどのようにして関わるのかを考えさせることを授業のねらいとした。

児童は現地説明会に参加しており、地域の遺跡や埋蔵文化財センターの役割について理解を深めている。「なぜ、ここに遺跡が存在することが分かるのか」の問いに対しては、「工事の途中にたまたま発見した」という考えを多くの児童がもっていたが、資料をもとに考えることで、計画的に発掘調査が進められているという認識に変容していた。また、地域の遺跡は、道路拡張工事に伴う発掘調査であり、調査終了後には、遺跡が消失することに関連し、授業後半では、現代的な課題である「開発と保全のバランス」をどのようにとるのか、具体的な事例をもとに考えを深めた。

今回の授業は、「埋蔵文化財を活用した総合的な学習の時間」を1単位時間の授業で構築している。学習内容については、「問題解決的な活動を通して、探求的な見方・考え方を働かせる」ことができる題材を設定し、身近な地域の遺跡を通して、持続可能な社会を実現するための行動について考えさせた。

学習指導要領では、総合的な学習の時間の指導計画の作成に際し、三つの課題（現代的な諸課題、地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題）を意識し、各学校の目標の実現にふさわしい探究課題を設定するよう示されている。「埋蔵文化財を活用した総合的な学習の時間」は、今回行った授業（現代的な諸課題）、地域の遺跡について調べる授業（地域や学校の特色に応じた課題）、実物を用いた様々な授業（児童の興味・関心に基づく課題）など三つの課題に即した授業を当該学校と連携しながら構築できると考える。

10 おわりに

埋蔵文化財発掘調査に携わりながら学んだ専門的知識を、学校教育でどのように生かすことができるかを考え、実践していくことが今回の取組の趣旨であった。

埋蔵文化財を活用して「何を学ばせるのか」、「どのように学ばせるのか」を明確にしながら授業を構築することで、埋蔵文化財の教育的活用は広がり、様々な学習効果が期待できる。また、今回行った現地説明会や出前授業において、児童・生徒が見せる目の輝きや、感動する様子は大変印象的であり、本センターの特色を生かした体験的な学習は、自ら考える力を養い、思考を高め、学ぶことの喜びや意欲を生み出すものであると考える。

最後に、新学習指導要領の示す「社会に開かれた教育課程」の実現や「関係機関との連携」において、本センターが担う役割を「埋蔵文化財を活用したカリキュラムマネジメントの一例」としてまとめている。今後も学校教育とのさらなる連携を図っていきたい。

参考・引用文献

文部科学省 平成29年度告示 『小学校学習指導要領解説 社会編・理科編・家庭編・総合的な学習の時間編』

文部科学省 平成29年度告示 『中学校学習指導要領解説 社会編・理科編・技術・家庭科編・総合的な学習の時間編』

宮崎県教育委員会 令和3年『わたしたちの宮崎県 住みよい郷土の暮らし』

日本文教出版 教科用図書『小学社会6年』

教育出版 教科用図書『中学社会歴史』

啓林館 教科用図書『わくわく理科 未来へひろがるサイエンス』

徳田尚文 令和元年 『小学校6年生における埋蔵文化財を活用した出前授業の在り方』 宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要

埋蔵文化財を活用したカリキュラムマネジメントの一例



執筆者一覧（掲載順）

赤崎 広志 (AKAZAKI Hiroshi)	宮崎県埋蔵文化財センター
堀田 孝博 (HORITA Takahiro)	宮崎県埋蔵文化財センター
藤木 聡 (FUJIKI Satoshi)	宮崎県埋蔵文化財センター
和田 理啓 (WADA Masahiro)	宮崎県埋蔵文化財センター
竹田 享志 (TAKEDA Kyoji)	宮崎県埋蔵文化財センター
平井 祥蔵 (HIRAI Syozou)	宮崎県埋蔵文化財センター
伊東 浩二 (ITOU Kouji)	宮崎県埋蔵文化財センター

投稿規定

- 1 投稿できるのは、宮崎県埋蔵文化財センター職員及び紀要編集担当が認める者とする。
- 2 投稿原稿は、当該年度の紀要編集担当が定める期日までに提出する。紀要編集担当が指名する匿名査読者の査読を経たうえで掲載する。
- 3 原稿は宮崎県の埋蔵文化財および関連する諸分野に関する論文、研究ノート、資料紹介とする。既発表のものは受理しない。
- 4 一編当たりの分量は20頁以内とし、一人一件を原則とする。
- 5 執筆要項は次の通りである。

版面（キャプション含）は幅155mm、高さ240mmで、本文の文字は明朝10pt、1頁当たり43字×40行とする。註・参考文献は9ptで、文末に註と参考文献に分けてまとめる。本文中の註は、文字右上に(1)のように表記する。文末の参考文献は著者・発行年・「表題」『出典』・発行機関・掲載頁の順とする。

宮崎県埋蔵文化財センター

研究紀要

第7集

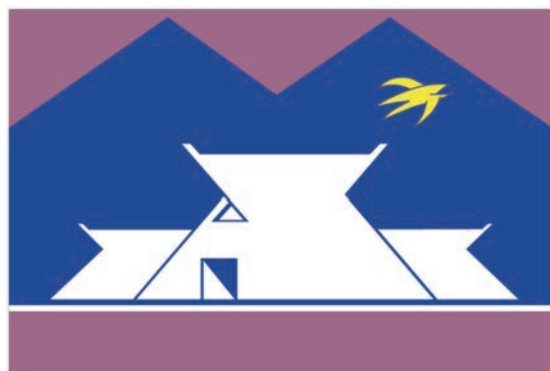
2022年3月

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985-36-1171・1172 FAX 0985-72-0660

Research Bulletin
of
Miyazaki Prefectural Archaeological Centre
vol.7



2022.3

Miyazaki Prefectural Archaeological Centre